

平成28(2016)年度 文化庁委託事業報告書

---

被災地方言で語る生活文化の再発見と継承：  
茨城と福島浜通りの方言を中心に

---

平成29（2017）年3月

茨城大学人文学部 杉本妙子研究室



## まえがき

本報告は、文化庁の委託を受けて行った調査研究事業「被災地方言で語る生活文化の再発見と継承：茨城と福島浜通りの方言を中心に」の報告書である。平成 24 年度文化庁委託研究事業「東日本大震災による危機的な状況が危惧される方言の実態に関する調査研究（茨城県）」から始まり、平成 25～27 年度文化庁委託事業・被災地における方言の活性化支援事業として取り組んだ一連の事業に続くものである。今年度も、東日本大震災の被災地である茨城県および福島県浜通り地域における方言の継承や、方言をとおした地域活性化活動に活かし得るものとして取り組んだつもりである。今年度、最も力を注いだのは、方言による昔話の会の開催であった。その詳細は本報告第三部に記したが、方言、特に被災地方言の語りが聞く人の力になるということを、改めて確認できた。昔話の会そのものも多数の来場者を得て、成功裏に終えることができた。昨年度の『茨城のことばで語る おあきさんの昔ばなし』でお世話になった七絃の会の皆様には、今年度の昔話の会でも準備段階から大変なご協力をいただいた。七絃の会の皆様のお力なしには、会の成功はなかったと思う。七絃の会の皆様との出会いも、方言が見つないでくれたご縁である。それ以外でも、茨城・福島の方言への取り組みが、すばらしい出会いを私にもたらしてくれている。東日本大震災からすでに 6 年、文化庁のご支援による私共の取り組みも 5 年となった。続けることがつながることだと感じている。

さて、本報告は五部から成っている。第一部では本事業の概略等を、第二部では各地被災地方言の記録として文字化した談話を、第三部では「聞いてみっぺ・語ってみっぺ・方言昔話」の会について取り上げた。また、第四部では地域の民俗に注目した報告を、第五部では本事業の一環として行った茨城方言講座の報告をした。第二部の方言談話では、南相馬市の方言についての談話を収めることができた。添付の CD といっしょにご覧いただければ、方言でなければ表せないことがあること、方言の力をご理解いただけるのではないかとと思っている。また、茨城と福島の暮らしや民俗の談話も、それぞれ数編、収めることができた。これもまた、それぞれの土地や時代の暮らしの一面を知ることのできる貴重な談話資料となっていると思われる。本報告書とは別に、小冊子『福島県浜通りの方言談話集 2』も作成した。これらの談話を形にすることができたのは、話し手として快くご協力くださった方々のおかげである。暮らしや地域の民俗に関わる方言談話をとおして、地域や各地の方言への興味を感じていただければ、幸いである。

東日本大震災と原発事故から6年。かつての生活を取り戻された方がいらっしゃる一方で、変わらず厳しい状況にある方もいらっしゃる。新しい生活を始める決意をされた方もおられる。そのような皆様と、今年もまた、昨年の今と同じく、方言をとおして、また友としてつながっていきたいと、改めて思う。

今年度の事業でも、多くの方々のご支援、ご協力をいただきました。関係自治体等の皆様、ならびに調査に快く応じてくださり、お名前を挙げることをご承諾くださった個人の皆様です。調査にご協力くださった方の中には、時間的な制約から本報告書に方言談話等を収めることができなかった方もいらっしゃいますが、そのような方も含めて、今年度の取り組みへの皆様のご協力に感謝し、ここにお名前を挙げさせていただきます。

#### 《自治体等団体》

茨城県教育委員会、茨城県内への避難者・支援者ネットワーク・ふうあいねっと、茨城大学図書館、大子町教育委員会、大子町立さはら小学校

#### 《個人のご協力者の皆様》（五十音順、敬称略）

青木いづみ、雨貝恵子、猪狩栄子、猪狩米子、海老原佳美、江又とみ、小貫三佐子、川澄敬子、河野昭夫、木幡トシ子、齋藤千二、佐々木和子、佐藤貞子、佐藤富子、白川ケイ子、鈴木澄男、田中優子、千葉涼子、東ヶ崎秋雄、東ヶ崎婦美子、半谷トミ子、深谷哉子、藤枝豊子、藤枝安子、前田幸子、宮田洋子

最後になってしまったが、研究補助員として本事業全般にわたってサポートして下さった高野光代さん、調査データの入力や集計、談話資料等の入力補助、昔話の会の開催準備や当日のサポート等を誠実に手伝ってくれた学生の藤堂みさ都さん、田山翔子さん、吉岡杏さん、Nguyen Vu Hoang Lan さんに対しても、ここに記して感謝いたします。

平成 29 (2017) 年 3 月

茨城大学人文学部 杉本妙子



## 目 次

第一部 概要	1
1 業務の概要	3
2 談話収集調査の概要	7
第二部 各地の方言談話	11
0 文字化の基準・記号の見方	13
I 茨城県かすみがうら市（旧千代田村）の方言談話	17
【CD 収録談話】 初午の食べ物「ツモチカイリ」／正月の餅、 ならせ餅	
II 福島県双葉郡浪江町の方言談話	24
【CD 収録談話】 農の始め、はよ縄もじり／秋冬の田の耕作、 苗代づくり／稲穂餅、神棚と仏壇の話	
III 福島県南相馬市小高区の談話	42
【CD 収録談話】 方言の話 1／方言の話 2	
第三部 方言による昔話の会	49
I 「聞いてみっぺ・語ってみっぺ・方言昔話」の実施概要	50
II 方言昔話	52
【DVD 収録の昔話】 きゅう太と蛙／舌切り雀／飴コ買いに來た幽霊 ／雪の夜ばなし／大悲山大蛇物語／カッパレ餅／ほおどしの頭／ 額田のたつつあい話・欲がねえ／大晦日ならじゃーぼでもよい	
III 来場者アンケート結果	74
第四部 茨城の民俗	83
(1) カッパレ餅	
(2) 「シモツカレ」類	

第五部 茨城方言に関する講座	89
----------------	----

資料編	105
-----	-----

文献調査：茨城の民俗

- 1 「カッパレ餅」類
- 2 「シモツカレ」類

# 第一部 概要

## 1 業務の概要

### 1-1 業務題目

被災地方言で語る生活文化の再発見と継承：茨城と福島浜通りの方言を中心に

### 1-2 目的

本業務の目的は、茨城県沿岸地域および福島県浜通り地域の方言とそれらの方言で語られる地域の生活文化について、地域が育んできた文化として記録するとともに、その文化への学びや継承を促進することである。当該地域の方言、特に茨城方言の魅力や価値は、首都圏との地理的な近さや首都圏方言との共通性の高さから、これまで注目されにくく見過ごされがちであった。一方、東日本大震災を契機に、茨城県においても、また福島県浜通りにおいても地域そのものや地域のつながりが再考されている。このような現状から、本業務の実施によって、当該地域の人々が方言をとおして地域の文化を再発見・再認識し、方言や地域に対して自信を持って学び継承しようとすることを促進する取り組みを行う。

### 1-3 業務の期間

平成 28 年 9 月 1 日～平成 29 年 3 月 31 日

### 1-4 当該年度における課題項目とその業務実施状況の概略

本業務は、平成 24 年度から平成 27 年度の 4 年間、被災地方言の保存・継承を目的とする文化庁委託事業を茨城大学が受託し、4 年間の事業において行ってきた取り組みを継続・発展させるものである。本業務の目的に沿って、以下の 4 項目の取り組みを行った。

#### (1) 被災地の方言を収録・保存する取り組み

被災地としての茨城県沿岸部および福島県浜通り地域（茨城県内への避難者を含む）の方言ならびに方言で語られる地域の暮らしについて、本業務の主要な取り組みの一つとして方言談話収集調査を行った。また、各調査地域の方言の特色に関する調査を合わせて行った。

- ①茨城県沿岸部および福島県浜通りの被災地方言について、方言談話資料（文字化資料ならびに音声 CD）をまとめた。談話資料の詳細については、後述の「2 談話収集調査の概要」ならびに「第二部 各地の方言談話」に示した。
- ②被災地の生活の中の伝統的な行事として、茨城県東茨城郡茨城町に伝わる「カップレ餅」と初午の料理「シモツカレ」類に注目した。「カップレ餅」については、その行事の全般について現地調査によって記録するとともに、この行事に関わる談話を

収集した。「シモツカレ」類については、数地点について調査した。また、当該地域の行事の地域的広がりを文献調査をもとにまとめた。その結果は、本報告書の第4部および資料編で報告した。

- ③地域の方言談話集として、『福島県浜通りの方言談話集 2』（別添冊子）を作成した。この方言談話集は、これまでの文化庁委託事業の成果をもとに、より多くの人に手軽に方言談話に触れてもらうために「読む方言談話」としてまとめなおしたものである。『福島県浜通りの方言談話集 1』の続編であり、平成26・27年度に報告した浜通りの民俗・暮らしに関わる方言談話を見直し、修正等を施してまとめなおしたものである。具体的な内容は次のとおり。

『福島県浜通りの方言談話集 2』で取り上げた談話

一 双葉郡浪江町の談話

- 【一】正月の食べ物、塩引き鮭
- 【二】稲穂餅（いなぼもち）
- 【三】昔の結納、婚礼
- 【四】昔の婚礼のお膳
- 【五】葬式のお膳

二 双葉郡双葉町の談話

- 【一】こども達の楽しみ、鮭獲り

三 双葉郡檜葉町と周辺地域の談話

- 【一】夏餅ははらわたになる
- 【二】送り盆

本報告書ならびに上記③の成果は、茨城県内の公立図書館（大学付属図書館を含む）を中心に送付した。報告書に収めた方言談話は、添付の音声データ（CD）とともに、地域の暮らしの記録として、より多角的に利用することが可能だと考えられる。

なお、方言談話の収集・文字化ならびに方言談話集として再編集する取り組みは、より多様な使用に資するためにも、次年度以降も地域や話題を考慮しながら、継続的に取り組み、資料として充実させていくことが必要であると考えている。

(2) 被災地の方言を学ぶ教室を実施する取り組み

方言を聞き、学ぶための機会を設け、本業務の成果を地域社会に還元する。

- ①平成27年度までに作成した方言教材、昔話集、方言談話資料等を活用し、方言を学ぶ講座を実施した。本委託事業期間外ではあるが、平成28年度茨城大学教養科目「茨城の方言と民俗」（前学期開講科目）を公開授業として開講し、一般受講者を受け入れた。その受け入れの実践で得られた知見をもとに、平成28年11月12日（土）に茨

②被災地である他県（青森県、岩手県）での方言教室や方言を語る会等を視察し、茨城県での教育的な取り組みの実施・検討の参考とした。

茨城方言を中心に、被災地方言による昔話の語りの会「聞いてみっぺ・語ってみっぺ・方言昔話」を実施した。この昔話の会は、茨城大学図書館と連携した「土曜アカデミー」の講座として、茨城県教育委員会の後援を得て、平成 28 年 12 月 10 日（土）に開催した。この会においては、来場者アンケート調査も行い、方言や方言による昔話への関心の高さを確認することができた。本報告第 3 部において、会の概要、会で語られた茨城・福島・青森の方言による昔話（文字化と DVD 映像）、アンケート調査結果について報告した。（別途、文化庁への実施報告も行った。）

方言昔話の会の開催を契機に、既存の新聞メディアに記事として取り上げてもらうことをとおして、被災地方言への取り組みの情報を広く発信した。新聞記事は、以下の3記事である。

[illegible]

[illegible]

2016年(平成28年)12月18日
日曜日
茨城
土城
桑戸

# 方言で昔話 聞き比べ

茨城町の方言で「カッパレ餅」や「大晦日ならジャ－ボでもよい」を披露＝茨城大学図書館

東北や県内各地の方言による昔話を聞く集いが、水戸市京町千田の茨城大学図書館3階ライブラリーホールで開かれ、約100人が参加した。青森県や福島県、県内の方言による昔話を耳を傾け、生活文化の違いを感じたり、失われたある地域文化に思いをはせた。

## 青森、福島、茨城…

集いは、文化庁委託「被災地で語る生活文化の再発見と継承」事業の二環で、同館土曜アカデミーの「まこと」で、「聞いてみよっ・語ってみよっ・方言昔話」と題して開いた。第一部では、ばくち好きがカエルにはかされる「さめう太と蛙」という昔話を、共通語と群馬方言、徳島方言、茨城方言で聞き比べた。同じ話でありながら、言葉や語句の調子、表現力がそれぞれ違い、それぞれ趣を味わった。続いて、青森県の太平洋側（五戸町）の南部弁、日本海側（弘前市の津軽弁、福島県・中通り（福島市、浜通り（相馬町）の語り手が「舌切り雀」や「馬鹿嫁話」、雪女郎（雪女）が出てくる怪談、南北朝代の大蛇退治を伝える「大悲山の話」など、軽妙な話から、タイムシクな伝説までさまざまな話を聞かせた。

カッパレ餅の風習を今なおお続けている茨城町上飯沼の東ヶ崎桃雄さん、婿美子さん夫妻も会場へ昔話を聞き、「わが家に伝わる話をうまくまとめた」と感動していた。（武藤秀明）

## 水戸 生活文化の違い実感

最後には県内の昔話として、茨城町の「七夜のおのメンバ」が「ぼおじの頭」「大晦日ならジャ－ボでもよい」「カッパレ餅」が、那珂市の宮田洋子さんが「額田のたつあい話」を披露した。

ぼおじとは、イワシの類（「えい」の部分を書き下して刺した）もの。ジャ－ボは類ひのこと、話の中には、棺の口を担ぐ「六道が出てくるなど、古くからの葬儀の風習なども描かれている。カッパレ餅は12月1日に餅を流して、水の事故が起きないようにカッパに祈る風習を基にした。額田のたつあいはどんな話で、農民の悩み事を知恵で解決して親しめた」などと解説した。

集いを企画した杉本妙子同大教授は「いろいろな方言を聞いた。方言でないと伝えられない言葉がある。方言を育んだ地域社会が大震災で危機的状況にあり、このような催しを今後もお開きたい」と締めくくった。

## 1－5 業務実施体制

業務実施体制は次のとおりである。

- ・代表責任者：

杉本妙子（茨城大学人文学部教授）

担当内容：業務全体の統括、方言（談話を含む）に関する現地調査、茨城方言をテーマとした講座の実施、方言昔話の会の開催（責任者）、方言談話集作成、報告書等の作成、等

- ・副責任者：

佐々木冠（札幌学院大学経営学部教授）

担当内容：方言に関する現地調査の分担

- ・実施補助：

高野光代（茨城大学研究補助員（本業務担当））

担当内容：代表責任者の業務の補助全般

田山翔子・藤堂みさ都（茨城大学人文学部学生）

担当内容：昔話の会開催準備・当日業務補助、各種調査データの入力・集計、談話資料作成補助、他

ゲン ヴー ホアン ラン（茨城大学人文科学研究科院生）・吉岡杏（茨城大学人文学部学生）

担当内容：昔話の会当日業務補助

## 2 談話収集調査の概要

「1 業務の概要」の「1-4 当該年度における課題項目とその業務実施状況の概略」の（1）「被災地の方言を収録・保存する取り組み」として行った方言談話収集調査について、調査を行った地点（地域）、調査者、文字化等担当者等は2－1のとおりである。地点（地域）別の談話一覧は2－2のとおりである。また、本報告の文字化の対象以外に行った調査について、2－3に参考として示す。

### 2－1 文字化対象の談話収集調査地域

- （1）茨城県かすみがうら市（旧千代田村）

談話収録地点：かすみがうら市中志筑（調査協力者宅）

調査年月日：2016年9月27日



話者：女性 1 名

調査員：杉本妙子

文字化等担当者：杉本妙子

(2) 福島県双葉郡浪江町

談話収録対象地域：福島県双葉郡浪江町

談話収録場所：茨城県つくば市・牛久市（話者宅）

調査年月日：2016 年 11 月 19・20 日

話者：女性 2 名

調査員：杉本妙子

文字化等担当者：杉本妙子

(3) 福島県南相馬市小高区

談話収録対象地点：福島県南相馬市小高区

談話収録場所：茨城県水戸市（調査協力者宅）

調査年月日：2016 年 9 月 19 日、11 月 13 日

話者：女性 2 名

調査員：杉本妙子

文字化等担当者：杉本妙子

2-2 地点（地域）別の方言談話一覧

(1) かすみがうら市（旧千代田村）

①初午の食べ物「ツモチカイリ」

②正月の餅、ならせ餅

(2) 双葉郡浪江町

①農の始め、はよ縄もじり

②秋冬の田の耕作、苗代づくり

③稲穂餅、神棚と仏壇の話

(3) 南相馬市小高区

①方言の話 1

②方言の話 2

## 2－3 その他の調査地域

### (1) 茨城県東茨城郡茨城町

調査地点：東茨城郡茨城町上飯沼（話者宅）

調査年月日：2016 年 12 月 1 日、2017 年 2 月 13・14 日

話者：男性 1 名、女性 1 名

調査員：杉本妙子

### (2) 茨城県久慈郡大子町

調査地点：久慈郡大子町左貫（話者宅）

調査年月日：2017 年 2 月 1 日

話者：男性 2 名

調査員：杉本妙子

### (3) 福島県双葉郡檜葉、他

調査対象地域：福島県双葉郡檜葉町および近隣地域

調査場所：茨城県つくば市（話者宅）

調査年月日：2016 年 9 月 19 日

話者：女性 3 名

調査員：杉本妙子

## 第二部 各地の方言談話

0 文字化の基準・記号の見方

I 茨城県千代田町の方言談話

II 福島県双葉郡浪江町の方言談話

III 福島県南相馬市小高区の方言談話

## 0 文字化の基準・記号の見方

方言談話の文字化の基準ならびに文字化に用いた各種記号について説明する。以下に示す文字化の基準は、下記の二つの参考文献に基づく平成 24 年度文化庁委託事業「東日本大震災において危機的な状況が危惧される方言の実態に関する調査研究事業（茨城県）」の文字化基準を若干修正したものである。

〈参考文献〉

- ・『伝える、励ます、学ぶ被災地方言会話集文字化の基準・記号の見方』（川越めぐみ氏、東北大学産学官連携研究員（作成時））
- ・『宮城県沿岸市町村談話資料作成マニュアル 東日本大震災において危機的な状況が危惧される方言の実態に関する調査研究事業』

### （１） 文字化の概要

文字化に当たっては、調査協力者（話し手）の方言の発話を文字化したものと、それを共通語訳したものを上下段に並べて表記した。方言は上段にカタカナで表記し、共通語訳は下段に漢字かなまじり表記で記してある。また、基本的には下の例のように文節で分かち書きをしてある。なお、調査員の発話については、概ね発音どおりとしたが、上下段に分けない漢字かなまじり表記を基本とし、発音が特定できない場合は漢字にルビを付した。

方言音声 → 上段、表音的カタカナ表記 共通語訳 → 下段、漢字かなまじり表記
--

例：ソー ソンデ ホーゲン デダノカシラ。 ← 上段 方言音声の文字化  
そう それで 方言 [は] 出たのかしら。 ← 下段 上段に対する共通語訳

### （２） 発話者の表示

#### ① 発話の単位

1 人の話者が続けて話している発話で、話者が交替するまでの連続した発話を原則として 1 発話（発話権が交替するまでが 1 発話）とした。あいづち、発話権の交替のない短い発話は別に処理した。

#### ② 発話記号

話者、調査者など、談話の場にいる人物に A、B、C、D～のようにアルファベットで記号をつけ、各談話の文字化資料の冒頭において「話し手」として A、B、C、D～の話者情報を示した。

#### ③ 発話番号

発話の通し番号を、1 発話の話者記号の前に入れてある。

例：001A：～ 012B：～ 023C：～

この通し番号は、一つの話者ごとの通し番号とし、同じ話者による談話でも、話題が変われば通し番号は「001」から始まる番号となっている。

### (3) 固有名詞

個人が特定できるような固有名詞（一部の地名を含む）、話者名及び一般の人名についてはアルファベットに置き換えてある。多数の人名が出てくる場合には、アルファベット＋数字で区別してある。

話者 → 「A」「B」などの話者記号を使用

会話中の個人名や地名 → X、Y～を使用。

例：Xチャン、X 1 サント～／Yニ イク

会話中の屋号 → RまたはR＋数字を使用。

なお、歴史上の人物、有名人、話者の個人情報に関係しない会社名その他の固有名詞、地名についてはそのまま記載した。（一部の地名については、アルファベットを用いた。）

### (4) 文字表記の基準

調査員（自治体職員を含む）を除く談話の話者の発話は、「方言音声の文字化」と「共通語訳」との２段で表記してある。調査員の発話については、１段での表記とし、概ね発話どおりに、原則としてひらがな漢字まじり文で表記してある。

#### 【方言音声の文字化部分】（上段）

表音的カタカナ表記を用いた。音声の方言的特色（キの口蓋化、母音の無声化など）は、特に書き分けることはしていない。

長音：「ー」 例：ソーナンダ（×ソウナンダ）

助詞：「は」→「ワ」 例：アレワ ナンダガ

「を」→「オ」 例：コレオ モッテゲ

「へ」→「エ」 例：ガッコーエ イグ

鼻濁音：半濁点を使用してある。

ガ行鼻濁音「カ°」「キ°」「ク°」「ケ°」「コ°」

入り渡り鼻音は上付き文字を使用「ンダ」

中舌音：どちらかの音声の近いほうを採用した。

例：スに近いシ → 「シ」

シに近いス → 「ス」

「ア」と「エ」の中間の音については「エァ」「アエ」という表記も許容した。

例：「ネァ（ない）」「ナエ（ない）」

四つ仮名：「ジ」「ズ」に統一した。（「ヂ」「ヅ」は使用していない）

例：「アエズ（あいつ）」

#### 【共通語訳部分】（下段）

意訳はできるかぎり行わず、基本的に方言の直訳とした。

漢字かなまじり表記を用いてある。

助詞：ないと読みにくい場合のみ、適宜、補った。補ったものは[ ]でくくってある。

？：ないと疑問文と判断しにくい場合のみ適宜補った。

長音：感動詞や終助詞などにおいては、基本的に長音記号「ー」を使用した。

(5) 記号の見方

【方言文字化の部分】 (上段)

- 。(句点) : ポーズがあり、意味的に1つのまとまりを持つ文の最後につけた。
- 、(読点) : 基本的に息をついた箇所またはポーズのある箇所に付してある。  
読みやすさを重視して付した部分もある。
- ( ) : あいづち。発話権が移っていない時に話をさえぎったり、口を挟んだりした箇所。  
例：ソーヤッテ ムガシワネー (B ンダネー) ヤッダンダー。
- { } : 笑い声、咳払い、間などの非言語音。  
例：{笑} {咳} {手を叩く音}
- ~~~~~ : 聞き取れない部分には波線を引いた。  
例：オチャズケノ~~~~~  
聞き取りが不十分な部分は、聞こえた音を記した箇所に波線を引いてある。  
例：コエズカレデ~~~~~
- \_\_\_\_\_ : 発話が重なっている部分には、普通の下線を引く。  
あいづちは発話を( )に入れ、重なっている部分には下線を引いた。  
例：モラッテクダサイ (A ソーダ) (B モラテー)
- ===== : 発話が重なり、かつ聞き取れない部分には、二重下線を引いた。  
例：アイズ \_\_\_\_\_ (B ホンテ) オドゲデネーゴド  
発話が重なって聞き取りが不十分な部分は該当箇所に二重下線を引いた。  
例：アイズ キタナー (B ホンテ) オドゲデネーゴド
- ( ) : 注記。( )内の数字は注記番号。各談話の後に注記をまとめてある。  
地域特有の語や表現の意味用法を説明したり、談話に登場する主な人物、場所、屋号、船名などを説明している。その他、特に注意しておきたい音声的特徴などに使用したものもある。  
例：ムガシワ サンザンサ<sup>(1)</sup> エッタゲンド  
例：カーチャンノミセ<sup>(2)</sup>。

【共通語訳部分】 (下段)

- 。(句点) : ポーズがあり、意味的に1つのまとまりを持つ文の最後につけた。
- 、(読点) : 基本的に息をついた箇所またはポーズのある箇所に付してある。  
読みやすさを重視して付した部分もある。
- ? : 疑問文であることがわかりにくい箇所に適宜使用する。  
例：チョー エギサ エッタナ。  
今日 駅に 行ったの？
- ( ) : あいづち。発話権が移っていない時に話をさえぎったり、口を挟んだりした箇所。なお、調査員のあいづち等は省略した。  
例：ヒトグミダケダト。 (A アー) ダカラ ハヤグ、 チッテ。  
一組だけだと。 (A あー) だから 早く、 といって。

{ } : 笑い声、咳払い、間などの非言語音。(一部のあいづちを含む) 「{笑}{咳}{手を叩く音}」のように示す。

例：イチンチグレ ジャナクテ ナンツー {笑} {C 咳}  
一日ぐらい じゃなくて 何という {笑} {C 咳}

×××× : 言い間違いや言いよどみなど、共通語訳ができない部分。

例：ム ム ムツカシー  
× × 難しい

~~~~~ : 聞き取れず、共通語訳も不明な部分には波線を引いた。また、聞き取りが不十分で共通語訳も不十分な部分にも該当箇所に波線を引いた。

例：ツナミ ~~~~~ ネクテ  
津波 ~~~~~ なくて

\_\_\_\_\_ : 発話が重なっている部分には、方言の部分に準じて下線を引いた。

例 005A : アー。  
ああ。

006B : ソレオ イレデ。  
それを 入れて。

===== : 発話が重なっており、聞き取れない、または聞き取りが不十分であり、共通語訳も不明な部分には、方言の部分に準じて二重下線を引いた。

例：ビョーギ ===== (B =====) シタンダ。  
病気 ===== (B =====) したんだ。

[ ] : 方言音声には出てこないが、共通語訳の際に補った部分。

例1：ミカン ノセテ  
みかん [を] 乗せて

例2：ヨメカ° ジッカニ カインノワ ジューコ° ンチダナンテ  
嫁が 実家に 帰るのは [正月の]15日だなんて

※ 意味の説明や意識にも使用した。その場合は「=」を付してある。

例：イマ ユー  
今 いう [=今話題にあがった]



# I 茨城県かすみがうら市（旧千代田村）の方言談話

## 【1】初午の食べ物「ツモチカイリ」

収録時間 2分41秒

### 話し手

A 女 1942（昭和17）年 （収録時74歳）

B 女 （調査員）

001B：さっきの「ツモジカイリ」

002A：「ツモチカイリ」 ツツノワネ。  
「ツモチカイリ」 っていうのはね。

003B：ツモチカイリ。

004A：ツモチ ツモチカイリッテ。  
ツモチ ツモチカイリって。

005B：それは、あのう、栃木なんかの「シモツカレ」と同じ？

006A：ア オナジナンデスケド、 シー ワタシノ ハハワ アンガイ  
あ 同じなんですけど、 んー 私の 母は 案外

ツモチカイリッツンノ ヤンナカッタデスケドー、 （B ん） ワタシノ  
ツモチカイリっていうの やらなかったんですけど、 私の

シュジンテユーノワ ヤサトマチノ Y<sup>(1)</sup>ッテユートコノ ウマレナンデスヨ。  
主人ていうのは 八郷町の Yっていう所の 生まれなんですヨ。

ジューネンマエニ ナグナリマシタケド。 ソノ ジッカノ アニノ オクサン、  
10年前に 亡くなりましたけど。 その 実家の 兄の 奥さん、

（B あ） ソノシトカ° ツクルノワ マタ、 ソーユ クサイモノオ  
その人が 作のは また、 そういう 臭いものを

イレナインダワ。  
入れないんだわ。

007B：臭いものって言うと？

008A：クサイモノツツノア ホラ、 シャケノアタマナンカ ホント  
臭いものっていうのは ほら、 鮭の頭なんか 本当 [は]

イレルデシヨ。(B えーえーえー えー) ソユノワ イレナイノ。  
入れるでしよ。 というのは 入れないの。

009B : じゃあ、さっぱり食べられますね。

010A : サッパリ、 アブラケ° オ モー テズクリノ アブラケ° カ° アノー  
さっぱり、 油揚げを もう 手作りの 油揚げが あのう

011B : 手作り。

012A : アスコニ ウッテンデスヨ。 ワカ° クニサン<sup>(2)</sup> テユー ヤマノネー シタノ  
あそこに 売ってるんですよ。 吾国山という 山のね 下の

ヤサトマチノネ、 ンー、 ナンテユー トコダロ。 オータデワナイ、  
八郷町のね、 ンー、 何ていう 所だろう。 [石岡市] 太田ではない、

オーツカッテユー トコロニ、 ソコカラ アブラケ° オ カッテキテ、  
[石岡市] 大塚っていう 所に、 そこから 油揚げを 買ってきて、

ソレオ ヤイテ。 ソレガラ、 ツモチカイリワ アノー ダイコンノ  
それを 焼いて。 それから、 ツモチカイリは あのう 大根の

ナンテユーンデシヨ、 アラオロシッテユーンデスカ、 (B ンー) コー  
何ていうんでしょ、 粗下ろしっていうんですか、 こう

タケデ ギカ° キ° カ° キ° カ° キ° カ° キ° カ° ッテ コーナッテンノデ  
竹で ギガギガギガギガギガギガって こうなっているの

アレデ コー スッテネ、 ソレサ シオ チョット イレテネ、  
あれで こう 磨ってね、 それに 塩 [を] ちょっと 入れてね、

サンジップンカ イチジカンク° ライ オイテ、 コー シボッテ、 ソレニ  
30分 1時間ぐらい おいて、 こう 絞って、 それに

アブラケ° ノ ヤイタノオ イレテ、 ソレカラ ラッカセーオ ヨーク  
油揚げの 焼いたのを 入れて、 それから 落花生を よく

イッテネ。(B えー) ソンデ イレ アノ イレテ、 ショーユト スト  
煎ってね。 それで ×× あの 入れて、 しょう油と 酢と

サドーカナ。 ソレデー アジツケシテ、 ソレカ° ー ウチノ  
砂糖かな。 それで 味付けして、 それが うちの

ダンナナンカー ダイスキナ ツモチカイリダッタンドワ。  
旦那なんか 大好きな ツモチカイリだったんだわ。

013B：それは煮ないんですか。

014A：ニナイデス。（B あー、そうですか） ソレワ ニナイ。 ホントノ  
煮ないです。 それは 煮ない。 本当の

ナンテユンデショ、「ナマス」。  
何て言うんでしょ、「なます」。

015B：えーえーえー。

016A：ン。 ソレモ オイシーノ、 ホントニ。  
ん。 それも おいしいの、 本当に。

017B：じゃ、本に出てるのと ちょっと違うのかな。どーなんでしょ。 それは、いつ作  
りましたか。

018A：ア ヤッパリ、 アレデスヨ、 ハツウマデスヨ。 ハツウマ。 コレワ、  
あ やっぱり、 あれですよ、 初午ですよ。 初午。 これは、

ハツウマノ タベモノダカラネ。 ツモチカイリツツーノワ。 スミツ  
初午の 食べ物だからね。 ツモチカイリっていうのは。 ×××

ムコーノホー<sup>(3)</sup> デワ、「スミツカレ」ッテ ユーカラネ。  
向うのほうでは、「スミツカレ」って 言うからね。

(中略)

019B：この ツモチカイリなんですけども、

020A：ンーンー。  
んーんー。

021B：これは、初午の時に作って、そのまま、すぐ食べちゃうんですか。

022A：ア ソーデス。 タダ、  
あ そうです。 ただ、

023B：どこかに、この上げたりはしないんですか。 神様に。

024A：ンー、 アゲマスネ。 ナンカ アノー ウジガミサマミタイナトコロニ  
んー、 供えますね。 何か あのう 氏神様みたいなところに

(B えーえー) アゲマスネ。  
上げますね。

025 B : い 家の中に。

026 A : ソーデス。 ヤシキノー トコロニー シ ワラカナンカデ、 コー  
そうです。 屋敷の ところに ん 藁かなんかで、 こう

ナンテ ユーンダロ、 シー コヤミタイノ、 チッチャク ツクッテアッテ、  
何て 言うんだろう、 んー 小屋みたいの、 小っちゃく 作ってあって、

ソコイ、 ナンカ ヨクー、 オヤナン ワタシノ オヤナンカワ、 ヨク  
そこに、 何か よく、 親など 私の 親なんかは、 よく

オソナエシテマシタネ。 シー。 イマノシトワ、 ホラ、 ダレモ  
お供えしてましたね。 んー。 今の人は、 ほら、 誰も

ヤラナイカラ。 シ。  
やらないから。 ん。

---

《注》

- (1) Y 旧の茨城県新治郡八郷町の字名。Yは現在は石岡市内の町名。
- (2) ワカ° クニサン 吾国山。茨城県の笠間市と石岡市の境にある山。標高 518m。
- (3) ムコーノホー 栃木県のこと。

## 【2】正月の餅、ならせ餅

収録時間 1分54秒

### 話し手

A 女 1942（昭和17）年 （収録時74歳）  
B 女 （調査員）

001B：さっき、あのう、えーと 10月に 餅、古い米で、もち米で

002A：ソ、モチコ°メデ。 モジ ズイチャン。 モツタイナイガラネ。  
そ、糯米で。 餅 搗いてしまうの。 もったいないからね。

003B：これは ふだん 食べる餅として 食べる。

004A：ア フダン ソーソー。 タベル オモチ、 シカクイ オモチ。 ン。  
あ ふだん そうそう。 食べる お餅、 四角い お餅。 ん。

005B：なんか行事、 え、 行事が あるからって ことじゃなくって、

006A：イーエ、ソーユコトジャナク、 ヤッパリモチコ°メモー アンマリ  
いいえ、そういうことじゃなく、 やっぱり 糯米も あんまり

オイトイテワ ココマイニシツチャウカラ モー、 コトシジューニ フルイ  
置いておいては 古古米にしちゃうから もう、 今年中に 古い

モチコ°メワ タベチツチャウノ。 （B えー） ソイデ、 エー クレニ  
糯米は 食べ切っちゃうのよ。 それで、 えー 暮に

ショーカ° ツヨーノ モチワ アタラシー モチコ°メデネ、 ツクンデスヨ。  
正月用の 餅は 新しい 糯米でね、 搗くんですよ。

007B：で、ところで その 12月にも あのー お正月用に お餅を 搗くと 思う  
んですけども。

008A：アーア ツキマス。  
あーあ 搗きます。

009B：餅つきは、いつ、搗かれましたか。

010A：ジューニカ° ツワネー、 クモチワ スルモンジャナイガラ （B えー） クワ  
12月はね、 九餅は するもんじゃないから 9は

ノゾイテ、 ダイタイ ニジューハチカ サンジューニチ。 ソレカ° センセ、  
除いて、 だいたい 28 [日]か 30日。 それが 先生、

ナーンマイモ ツクンダガラ。  
何枚も 搗くんだから。

011B : 何枚って ゆうのは、 あの お 折敷って ゆんですか。

012A : ソー、 アッ ソーソー。 イシ マ イッショウモジナラ ア  
そう、 あっ そうそう。 ×× まあ 一升餅なら あ

ジューマイグライ ツイチャウ。 {笑} ウリダスホド。 {笑}  
十枚ぐらい 搗いちゃう。 {笑} 売り出すほど。 {笑}

(中略)

013B : お正月になってっからも、お餅は搗きますか？

014A : ツキマス。 マター、 アノ イチカ° ツジューヨッカワ、 ナラセモチントキン  
搗きます。 また、 あの 1月14日は、 ナラセ餅の時に、

アルデショ。  
あるでしょう。

015B : ならせ餅。

016A : ンー。 ナラセモチッテ。  
うん。 ならせ餅って。

017B : あっ、わかりました。

018A : ネット。 アカイトカ コー ネット。 {笑} アノ ナラノキニネ。  
ねっ。 赤い [餅] とか こう ねっ。 {笑} あの 櫓の木にね。

019B : これに、出ました。

020A : アッ ソー。 ソノトキニワ ツクンデスヨ。 シンモチツツッテネ。  
あっ そう。 その時には 搗くんですよ。 新餅っていってね。

(B えー) ンー。  
んー。

021B : それは、紅白ですか。

022A : ンー、 アダシワー アカワ アンマリ ツカナイケド シロダネー ヤッパリ  
んー、 私は 赤は あんまり 搗かないけど 白だねー やっぱり

フツーニ。  
ふつうに。

023 B : 白だけでも 構わないんですか。

024 A : カマーナイデスヨ。 ダッテ、 アカナンカ チョット ショクベニ  
構わないですよ。 だって、 赤なんか ちょっと 食紅

イレレバネ、 (B えーえ) キレーンナツチャーカラ。  
入れればね、 きれいになっちゃうから。

025 B : で、あの 木は 櫨の木ですか。

026 A : ナラノキデス。 ムカシワ トリニ イガセラレタヨネ、 コドモノコロワ。  
櫨の木です。 昔は 取りに 行かせられたよね、 子どもの頃は。

027 B : んーん。どこに取りに行ったんですか？

028 A : ヤマへ。  
山へ。

## Ⅱ 福島県双葉郡浪江町の方言談話

### 【1】農の始め、はよ縄もじり

収録時間 2分14秒

#### 話し手

- A 女性 1932（昭和7）年（収録時84歳） 農業  
(B 女性 1935（昭和10）年（収録時81歳） 農業)  
C 女（調査員）

001A：コデナワ<sup>(1)</sup>。 チーサイ、 アスコ ツクッタ。 ニホンズツデ モジッタ  
こで縄。 小さい、 ~~~~~ 作った。 二本ずつで もじった

コデナワツツタンダケッド、 ソレオ ナンボンモ コー  
こで縄って言ったんだけど、 それを 何本も こう

ヨッテッタンダイナ キカイ、 (C あー) シトデ アズマッテ  
縊ってったのだよな 機械、 人出[が] 集まって

コーイシテ ヤッタンダ。 (C あー) デ、 オライノシャテーラワ  
このようにして やったんだ。 で、 俺の家の弟らは

イッテ ヤッテターカラ オラ ワカンダケッド ~~~~~ント。 ホスト  
行って やってたから 俺[は] わかるんだけれど うんと。 そうすると

コーユ フトイ アノ イマダラ ロ フトイ ロップノ カワリニー  
こういう 太い あの 今なら × 太い ロープの 代りに

(C えー) ハヨ ハヨナワ<sup>(2)</sup>ツテ ボンノチョ (C ハヨナワ) チカ°ー  
×× はよ縄と言って ~~~~~ 違う

チカ°ー、 ショーカ° ツノ ズーヨッカニ ノーノハジメツツッテ、  
違う、 正月の 14日に 農の始めって言って、

(C えー) ハヨナワモジリツテ ヤッタンダヨ。  
はよ縄もじりと言って やったんだよ。

002C：はー。こで縄をより合わせて、

003A：ン、 ナンボンモ ヨリアワセタノオ (C えー) ミン ナー (C えー)  
ん、 何本も 縊り合わせたのを みんな

サンニン サンニククライデ ヤッタンダトモンダナー、 ソレワ。  
3人 3人くらいで やったんだと思うんだなあ、 それは。



004C : これは、男がやったんですか？

005A : ソー。 オトコカ°、 ソレー アノ ムカシワ アノ アレカ°  
そう。 男が、 それ あの 昔は あの あれが

ナカッタカラ フトイ ロープカ° ナカッタカラ (C えー) ロープノ  
なかったから 太い ロープが なかったから ロープの

カワリニ ツカッタン。 (C えーえー) アー。  
代りに 使ったの。 ああ。

006C : <sup>じゅうよっか</sup>14日<sup>か</sup>が 農のはじめってゆうことは、 14日までは 畑とか 田んぼは  
やらないんですか。

007A : アー。 イヤ ヤッケッドモ ソーユ アレデ ヤッテタンダナー。  
ああ。 いや やるけれども そういう あれで やってたのだなあ。

008C : あー、行事として。

009A : ンー。  
うん。

010C : で、そのー

011A : ソノコロマデワ ミンナ オドリ オドッターナンカシテ ブ ナンテユダ、  
その頃までは みんな 踊り 踊ったりなんかして × 何ていうのだ、

アソンデ アルツ テユー アレダッタケンドモ。 {笑} {C 笑}  
遊んで 歩いて という あれだったけれども。 {笑}

セーネンノシタチカ° カ イロンナ ゴジ、 ギョーギ ヤッテーイタヨ。  
青年の人たちが × いろんな 行事、 行事 やっていたよ。

(C んー) ナン オドリー オドッテ、 イッシュカンクレ ブラク  
×× 踊り 踊って、 一週間くらい 部落

ホッチコッチノ アレオ (C えー) オドッター ナー (C へー)  
そっちこっちの あれを 踊ったり なあ

ナンカシテ。  
なんかして。

012C : 各家々を こ 訪ね、回って。

013A : マワツタリ、シーシー。 ソーユコト ヤッテタッタナー。  
回ったり、うんうん。 そういうこと やっていたなあ。

014C : それ、 回って来てくれた時には、 (A んー) 例えば なんか お お振舞  
みたいの、するんですか。

015A : シー、ソーチキ ソースンナー、 シー キモチ アケ° テ、 セーネンノ  
うん、 そうするなあ、 うん 気持ち あげて、 青年の

シタチニー。  
人たちに。

016C : 気持ちって、 お金を、 気持ち。

017A : シー、 イロイロ。  
うん、 いろいろ。

018C : 酒 飲ませたりもしましたか。

019A : シー、 ソーダイナー、 ダカラ イーアンベ ヨッパラッテ ミナ ナガジバン  
うん、 そうだいなあ、 だから いい按配 酔っぱらって 皆 長襦袢

キタリナンカシテー、 オドッテー、 ダガラ ナカ° ジバンナンカ スソ  
着たりなんかして、 踊って、 だから 長襦袢なんか 裾

キレルホド オドッタッテ、 ソノマエワ (C は一) アンマリダジ、  
切れるほど 踊ったって、 その前は あんまりだし、

ノーノハジメノ マイワ アンマイ シコ° ト シナカッタнда。  
農の始めの 前は あんまり 仕事 しなかったんだ。

020C : えー、あー そーやって、まー あそ 遊んで。

021A : タノシンダんだナー。  
楽しんだんだなあ。

022C : そーですねー。

---

《注》

(1) コデナワ 小手縄。『相馬方言考 改訂版』(新妻三男著、相馬郷土研究会、1973(初版 1930)) には、「コデナワ (名) 小手 (手さき) でもぢった細い縄。」とある。

(2) ハヨナワ 太い縄。大縄。『福島県方言辞典』(兒玉卯一郎著、西澤書店、1935) には、「ハヨナ」の見出しで「大縄」とある。

## 【2】秋冬の田の耕作、苗代づくり

収録時間 7分02秒

### 話し手

- A 女性 1932（昭和7）年（収録時84歳） 農業  
（B 女性 1935（昭和10）年（収録時81歳） 農業）  
C 女（調査員）

001A：ソレガラ、コンドー、タオコシダーナンダッテ、（C えー）チョー  
それから、今度、田起こしだなんだって、×××

アレワー ナンダッケ。コンドノ エーカ° デ ヤッテ ル ツッタノ、  
あれは なんだっけ。今度の 映画で やってるって言ったの。

ウサキ°。タネマキウサキ°<sup>(1)</sup> ト オンナジデ。ソノコロカラ コンド  
うさぎ。種まきうさぎと 同じで。そのころから 今度

タオコシダーナンダッテ （C えー） ヤッタнда。  
田起こしだなんだって やったんだ。

002C：でも、1月の14日の田起こしは、ずいぶん早いですよね。

003A：ニカイ オコスカラ。  
二回 起こすから。

004C：はー。じゃ、ふ まだ 真冬の寒い時期に一度起こして。

005A：ンー。ソノマエニ アキー アノー ヤッテ、コンド タイヒ イレテー  
うん。その前に 秋に あのう やって、今度 堆肥 入れて

（C えー） ン。  
ん。

006C：あー、堆肥入れて、少し

007A：ン ン。ハロー<sup>(2)</sup>ティユーノ コーイ シカクイノ ト イッパイ コ  
ん ん。ハロウっていうの こういう 四角いの × いっぱい こう

ク クキ° ミテノ コンナ ナカ° イノデ ササッタノデ ハローッテ ツチオ  
× 釘みたいの こんな 長いので 刺さったので ハロウって 土を

タカ° ヤシテ タイラニシテー、  
耕して 平らにして、

008C : 「ハロウ」ですか。

009A : ンー。 ソコサ コンド タイヒオ ミンナ ハコンデ ジブンデ  
うん。 そこに 今度 堆肥を みんな 運んで 自分で

カズッタリナンカシテ ハコンデナー。 マデー ヤル シトモ イッシ  
担いだりなんかして 運んでなあ。 丁寧に やる 人も いるし

ヨージサ ブラサケ° テ。 (C えー) ンー。 ソレオ チラカシテ  
に ぶら下げて。 うん。 それを 散らかして

コンド マダ モーイッペン ウナウ。  
今度 また もう一遍 うなう。

010C : んーん。「ハロウ」ってゆのは、土を耕す道具のことですか。

011A : ソーソー。  
そうそう。

012C : や 初耳。初めて聞きました。

013A : ンー、 ハローカケ。 ホンツキ°  
うん、 ハロウかけ。 その次

014C : 「ハロウカケ」って ゆんです [か] ?

015A : ンー、 ハロー、 アノ ツジオ タカ° ヤス アノ ハロー カケタンダ。  
うん、 ハロウ、 あの 土を 耕す あの ハオウ かけたんだ。

ハローテユノワ ソレ シカクイノーサー (C えー)  
ハロウっていうのは それ 四角いのに

ニジッセンチクレーノ ミンナ グキ° ッテ コー クキ° ッツッテモー ク  
20センチくらいの みんな 釘って こう 釘って言っても ×

ナンテユーダベナー、 アレワ。 ト サキ  
何ていうんだろうなあ、 あれは。 × 先

016C : 釘よりも もっと頑丈な。

017A : ガンジョーナ ヤズデ。 トンカ° ッタノカ° コレクライノデ ナカ° イノデ  
頑丈な やつで。 とんがったのが これくらいのもので 長いので

ミンナ コー サシテアッテ。 (C えー) ソレオ タ ウシニ シ  
みんな こう 刺してあって。 それを 田 牛に ×

ダノ          ンマニ   シッパラセテ、          ズーット   ツジオ   タイラニシタンダ。  
[牛]だの   馬に   引っ張らせて、          ずーっと   土を   平らにしたんだ。

(C　へー)　ソコエ　タイヒオ　イレテー、　　(C　えー)　コンド  
               そこへ　堆肥を　入れて、                                  今度

|      |     |      |        |   |       |
|------|-----|------|--------|---|-------|
| ソノアド | タイヒ | イレダラ | モーイッカイ | ウ | アドンドン |
| その後  | 堆肥  | 入れたら | もう一回   | × |       |

018C : あ、そうですね。土に混じな 混ぜないと

019A：シー、　　ウナッテー、　　コンド　ミズ　カケテー、　　（C　んー）　　コンド  
           うん、　　うなッて、　　今度　水　かけて、　　今度

シロカキントキワー ミズ カケテ カクトキワ、 マンカ° ッテユーノ  
代掻きの時は 水 かけて [土を]かくときは、 馬鍬っていうの

ツカッタン。  
使ったん。

020 C : えーえーえー。

021A：マンカ° ッテユーノワ テー モッテ、 アノ ウシニ ヤッパシ  
馬鋤っているのは 手を持て、 あの 牛に やっぱり

シッパラセテ コーユ カタチデー ココントコサ ヤッパシ  
引っ張らせて こういう 形で このところに やっぱり

オンジョーナ アレカ° アッタンダ。  
 同じような あれ（＝釘）が あったんだ。

022C : は一あ。 あの 針じゃないですけども、

023A : シー、 (C それが) ソレカ° マンカ°。  
うん、 それが 馬鋏。

024C：おっきい 鋸みたいなのが くっついてるんですね。 鋸ってゆうか あの 釘み  
たいなのが。

025A：ソーソー クキ° ノ オッキーヤツ ミタイナノデナー。  
 そうそう 釘の 大きいやつ みたいなのでなあ。

026C：この、ハロウカケの時は、あの土を平らにして、その時って切り株はまだ残ってるんですか。

027 A : イッカイ ウナッテアルワ、 ア  
一回 うなッてあるわ、 秋

028 C : あー、秋の時に。

029 A : アキニ ハー、 シー。  
秋に もう、 うん。

030 C : んー。そのデコボコを<sup>なら</sup>均して、

031 A : ソー。  
そう。

032 C : で、堆肥を入れて

033 A : タイヒオ イレテ  
堆肥を 入れて

034 C : そして、こー

035 A : モー イッカイ ウナッテー、 (C うなッて) タイヒト マゼンダ。  
もう 一回 うなッて、 堆肥と 混ぜるのだ。

(C んーん) ソノツキ° コンド ハロ アノ ナンダ、  
その次 今度 ハロウ あの 何だ、

シロカキツツテ ホレデ。  
代掻きッて言ッて それで。

036 C : 代掻きだと、 もう、 田植えの 前じゃないんですか。

037 A : イッカイ ヤッ ヤッテー、 シロカキー ア ア アト タウエノ マイダヨ。  
一回 ×× やッて、 代掻き × × あと 田植えの 前だよ。

コンドー ソレデ マンカ° ッテユーノデ ホレ ズーッ ミズ カケデカラ  
今度 それで 馬鍬ッていうので ほら ずーッ 水 かけてから

(C えー えー。) アルク。 コンド ナラスッテ、 ソレサ マダ キデ  
歩く。 今度 均スッて、 それに また 木で

ツクッタ ヤツオサメテ コンド ハバシロイ ナラシボーテユーノ  
作ッた やつを 今度 幅広い 均し棒ッていうの

(C えー) ツクッテ、 デ イッショニ オシテ アルッタ。  
使って、 で いっしょに 押して 歩いた。

038C : それはもう、 4月とか 5月ですか。

039A : ヤ タウエシル マエーダガラ シカ° ツ ゴ (C だから 4月ですか)  
いや 田植えする 前だから 4月 ×

ムカシワ タウー オソカッタガラナー。 ン、 ハナミントキワ  
昔は 田植え 遅かったからなあ。 うん、 花見の時は

タネマキシタシー (C えー) ナワシロツター (C えーえー) アノ  
種まきしたし 苗代っていつて あの

ミズー イチネンチュー ナワシロテユノア ミズ ハッテオイダランダヨ。  
水[を] 一年中 苗代っていうのは 水 張っておいたんだよ。

040C : 1年中 水 張っとくんですか。

041A : ンート、 アノ タ ウエネデ。 (C えーえー) んー。  
ええと、 あの 田 植えないで。 うん。

042C : で、そこで、田植え用の苗を

043A : ツクッテ。  
作って。

044C : そ 作るところなんですね。

045A : ンーンー。 シター アノー (C 3月) ヨク オボイテンダケッドモ  
うんうん。 そして あのう よく 覚えてるんだけども

ウジデモ カシテダカラ。 タネモミ イット マグトキニワー (C えー)  
家でも 貸してたから。 種粃 一斗 撒く時には

ア コメ ハクマイデー イット カイスノ、 コサクトシテ。 (C えー)  
ああ 米 白米で 一斗 返すの、 小作として。

アー。  
ああ。

046C : 白米の 一斗のほうが、 量が、 もとが 多いじゃないですか。

047A : イヤ カリタッ カリチンダ。 コサクノ (C へー) ブンダカラ。  
いや 借りた 借り賃だ。 小作の 分だから。

(C えー) アー。 タネモミ イット マグトキニワ ハクマイ コサクカ°  
ああ。 種粃 一斗 撒く時には 白米 小作が

(C 一斗) イット。 (C 一斗) ンー、 コメ ハクマイデ イット。  
一斗。 うん、 米 白米で 一斗。

ソ ソレワ オボイテンダヨ。 {笑}

× それは 覚えているんだよ。 {笑}

048 C : はー。それは小作の人が、あの地主さんのところに、あの

049 A : ンー カリタ シトントコイ ヤルノ。  
うん 借りた 人のところに やるの。

050 C : へー。 そすと その えーと い いな 苗代は

051 A : んー。  
うん。

052 C : 小作の人は、作ないんですか、 昔は。

053 A : イヤ、 コサクテ、 ジブンノー ナワシロ ツクットコ ナイ シトワ ホレ  
いや、 小作って、 自分の 苗代 作るところ ない 人は そら  
  
カリッカラ、 ンー。  
借りるから、 うん。

054 C : えー、苗代作り のために

055 A : ダカー ン ソー。  
だから ん そう。

056 C : 借りるんですか。

057 A : ソー。 ナエー、 アノ オモニ サ サワノヨナトコサ ミズ カケンノニ  
そう。 苗[を]、 あの 主に × 沢のようなところに 水 掛けるのに

イーカラ。 タンボ チーサイノ アッタンダヨナ。 (C んー) デ、  
いいから。 田んぼ 小さいの あったんだよな。 で、

ソコデ タ ウイチャウト ヤセツチャウカラ タ ウイネーデ  
そこで 田 植えちゃうと [土地が]やせちゃうから 田 植えないで

(C あーっ) イチネンチャー ミズ ハッテオクノ。  
一年中 水 張っておくの。



058C : えーえー。 あー いい苗作るために

059A : ソーソー。 ン。  
そうそう。 ん。

060C : で、 小作の人は いい苗 作る その苗代の 土地が も もったいないから  
そこも全部 い…

061A : シー、 アンマリ アノ タイラナトコサワ ミズー カケランネカラ  
うん、 あんまり あの 平らなところへは 水[を] 掛けられないから

イ ツ克蘭ネーカラ。 サワノヨナトコダラ イズモ アノ ヤマノミズ  
× 作られないから。 沢のようなところなら いつも あの 山の水

(C えーえー) ナカ° ッチェッカラ ソレオ (C えー) イレテー  
流れてるから それを 入れて

062C : すと、凍んないんですかねー。

063A : コールヨ。 コーッテ アシーニ ヨグ バーチャラ マッカニシテ  
凍るよ。 凍って 足に よく 婆ちゃんら 真っ赤にして

タネマキシテタ。 タ  
種まきしてた。 ×

064C : そーですよ、 3月だと まだ 凍りますもんね、 時々。

065A : シー、 シカ° ツ (C 3月) シカ° ツ ハナミコロ、 タネマキ  
うん、 4月 4月 花見の頃、 種まき

シタンダナー。  
したんだなあ。

066C : 寒い日は、その頃だつてー

067A : シー、 コーッテイタヨ。  
うん、 凍っていたよ。

068C : 凍ったりとか、 ねー。 桜…

069A : シー、 ソノ ウイ、 タネマイタ ウイ コーッカラ ダイジョブヨ。  
ん、 その 上、 種まいた 上[が] 凍るから 大丈夫よ。

(C んー) シー ホシテー ゴカ° ツー  
うん そして 5月

070C : ひと月ぐらいですか、種まきしてから。

071A : ンー、 ハヤーックタッテ ゴカ° ツ スエッコロダ、 ミンナワ ハー  
うん、 早くったって 5月 末頃だ、 みんなは もう

イカケ° ツクレ ヨーテ ヤッテ ジングリジングリ アレー  
一か月くらい 結 (=共同作業) で やって 順繰り順繰り あれ

(C は一) タ ウエテ アルッタガンナー、 ミンナデ。  
田 植えて 歩いたからなあ。 みんなで。

072C : じゃ、 ハロウカケしてから、 <sup>ふたつき</sup>二月か<sup>みつ</sup>三月ぐらい おいてっから、

073A : ンー  
うん

074C : あの まん 代掻きですか。

075A : コンダ ハローカキシテ タイヒ、 ホンナニワ オガナケットモ、 ンー  
今度は ハロウかけして 堆肥、 そんなには おかないけれども、 うん

ニバンオコシツツター、 (C えー) ハローカキシテ タイヒ イレテ  
二番起こしっていつて、 ハロウかけして 堆肥 入れて

モーイッカイ ウナウ。 (C えー) ナッ、 ニバン ニ ニバンオコシデ、  
もう一回 うなう。 なっ、 二番 × 二番起こしで、

(C 二番起こし) タイヒド マゼルヨーニ。 (C えー) んー。  
堆肥と 混ぜるように。 うん。

076C : それ、堆肥を 入れるのは、 この ハロウカケの日ではないんですか。

077A : ハロー カケタ アト。  
ハロウ かけた 後。

078C : 後。 すぐにその日のうちに。

079A : イヤ ソーンナニワ デキネワ。 {笑} {C笑}  
いや そんなに [早く] は できないわ。 {笑}

080C : 次の日とか。

081A : ンー、 イヤー  
うん、 いやあ

082C : も ちっと

083A : ナンニチモ ヤッパシ カカルモノ。 ンー。 (C はー) ムカシワ  
何日も やっぱり かかるもの。 うん。 昔は

キカイデネーカラ、 (C あー) あー。  
機械でないから、 ああ。

084C : じゃ、いく 幾か所も、 あのー 田んぼがあると、 ハロウカケだけでも、  
何日も かかって

085A : タイヘンダヨ。 ンー、 ソレカ° シケテタリナンカシット クズレネベシナー。  
大変だよ。 うん、 それが 湿気てたりなんかすると 崩れないだろうよ。

(C んー) シミタリシット ホレ コー ツジ コーレバ  
凍みたりすると ほら こう 土 凍れば

クズレッカラナー。 テンキノ イー シニ  
崩れるからなあ。 天気の いい 日に

086C : じゃあ、 大分、 何日も、 あの 馬だとか牛で やったんですね。

087A : ノーサギョー ヤッテタンダヨ、 ン。  
農作業 やってたんだよ、 ん。

---

《注》

(1) タネマキウサキ° 福島の高校生の朗読グループ「たねまきうさぎ」の、東日本大震災や原発事故、放射能汚染を考える活動を追ったドキュメンタリー映画。なお、「種まきうさぎ」は、福島県の吾妻小富士の山腹に春になるとみられるうさぎの形をした残雪。

(2) ハロー 田起こしの道具。牛や馬にひかせて使う。

### 【3】稲穂餅、神棚と仏壇の話

収録時間 4分13秒

#### 話し手

- (A 女性 1932(昭和7)年 (収録時84歳) 農業)  
(B 女性 1935(昭和10)年 (収録時81歳) 農業)  
(C 女(調査員))

001B : コレ ヤッパリ キノ コ キルト、 (C えー) コノ ネッコガラ  
これ やっぱり 木の こう 切ると、 この 根っこから

デンノ、 シンメ。 (C えー) ソレオ トツテクンノ。 (C えー)  
出るの、 新芽。 それを 取って来るの。

ソースト イダ イダ イロイロ アンノヨ。 (C あー) イッパイ  
そうすると 枝 枝 いろいろ あるのよ。 いっぱい

アンノガラ チーサイノガラナ。 (C えー) デ、 シトツダケ  
あるのから 小さいのからな。 で、 一つだけ

カザンジャーネーガラ、 ウチデ ホラ。 カミサマノシタ イッコ、  
飾るんじゃないから、 家で ほら。 神様の下[に] 一個、

(C えー) イマ イッコ、 ダインドコロト、 (C そーなんですか)  
居間[に] 一個、 台所と、

サンカショグレ ソー。  
三か所ぐらい そう。

002C : 神様に、 かみ

003B : カミサマノシタニ サケ°ルノ、 コノ ウイカラ。 カミサマノ ウイカラ。  
神様の下に 下げるの、 この 上から。 神様の 上から。

クキ° ブツンダヨ。 (C んー) ヤッテ。 ソラ イチバン  
釘[を] 打つんだよ。 やって。 それは 一番

オーキーノ。 ソノツキ° イマ。 イマダラ テレビノウイダネ。  
大きい。 その次 居間。 今なら テレビの上だね。

(C えー) ソコニ コー チョット チーサイ。 アド ダイドコロニ  
そこに こう ちょっと 小さい。 あと 台所に

チーサイノト。 サンボンワ ツケタナー。  
小さいのと。 三本は 付けたなあ。

004C : い 居間は、 今だと こ こーゆとこだと思いますけれども。

005B : テレビノウイノヨーナトコナ。 シ シ ソ。  
テレビの上のようなところな。 ん ん そう。

006C : 昔だったら、何があったとこですか。

007B : ヤッパリ テレビダナ、 (C は一) アタシラ オボエテ カラワ。 ナガ  
やっぱり テレビだな、 あたし等 覚えて からは。 ××

ナクテモイーカラ ソントキワ ソーユー スミ。 (C えー) シ。  
無くてもいいから その時は そういう 隅。 ん。

イマノ スミダナ。 コッチ ゲンカン コー ハイッテクレバー、  
居間の 隅だな。 こっち 玄関、 こう 入ってくれば、

(C えー) ヤッパリ ココ<sup>(1)</sup>ダナ。  
やっぱり ここ (=部屋の隅) だな。

008C : 玄関 とは、 こ あの、 反対側。

009B : シ。  
ん。

010C : じゃ、 外側じゃなくって、 こっち (=窓側) よりも こっち (=奥側) のほうが  
いいってことですね。

011B : ソ、 シ。 ヤ ソリヤ ソノウジ ソノウジノ シト。 シ。  
そう、 ん。 いや そりゃ その家 その家の 人。 ん。

(C は一) デモ、 カドニ ツケンノワ フツー ダナ。 デモ  
でも、 角に 付けるのは ふつう だな。 でも

ダイドコロワ カズデワナイ、 ナカ° シノウエ。  
台所は 角ではない、 流しの上。

012C : 台所は、流しの？

013B : コンロノウエアタリニ。 (C ふーん) ヤッパリ ハシラノ アットコダガラ  
コンロの上あたりに。 やっぱり 柱の ある所だから

ソンナニ ソンナニ キマッテナイ。  
そんなに そんなに 決まってない。

014C : \_\_\_\_\_の柱か。 柱に付ける時は、どうやって付けるんですか。

015B : ヤッパリ アノ クキ° オ ウツノ。  
やっぱり あの 釘を 打つの。

016C : 釘を う 打って。

017B : クキ° ウッテ ソ  
釘 打って そう

018C : 神 神棚も 釘を打って。

019B : ン。 アノ カミダナノ シタントコロネ。 (C えー) シタニ カミダナ  
ん。 あの 神棚の 下のところね。 下に 神棚

アッタラ ウイニ アルデショ。 (C えー) ソノ クキ° オ ウッテ  
あったら 上に あるでしょ。 その 釘を 打って

ハシラ、 カナラズ ハシラ アッカラ、 (C えー) ソコニ クキ° オ  
柱、 必ず 柱 あるから、 そこに 釘を

ウッテ。 (C えー) デ、 ユワイタカナンカ シタンダッタカナ。  
打って。 で、 結わえたかなんか したのだったかな。

(C あー) ソユノワ ミンナ オトコノシタチノ シコ° トダカンネ。  
そういうのは みんな 男の人たちの 仕事だからね。

(C えー) ン。  
ん。

020C : 神棚は、あの ここの壁から壁までですか。

021B : イヤ、 ウチデワー ハンブンカ。  
いや、 家では 半分か。

022C : 半分ぐらい。

023B : ダカラ イッケンダナ。 ニケン、 フツ ニケンマ。 ニケンノウイ  
だから 一間だな。 二間、 ふつう 二間間。 二間の上

アッタケド  
あったけど

024C : と、2 メーターぐらい。

025B : ニメ タ  
2 メーター

026C : 2 メーターあるかないか。

027B : ニメーター ワ アル。  
2 メーターは ある。

028C : ねー。 結構、大っきいですよ。

029B : ニメーターデ ナイ、 シ。 ソコナカ ホレ チーサー カミサマ  
2 メーターで、 ん。 その中 ほれ 小さい 神様

アルンダカラ。 (C えー) カミサマナ。 ソスト ソノ ソコニ  
あるんだから。 神様な。 そうすると その そこに

ダルマオ カザッター、 (C えー) イロンナ アレ、 コーユモノ  
だるまを 飾ったり、 いろんな あれ、 こういうもの

モラッタノ (C えー) カザッター シテ。  
もらったの 飾ったりして。

030C : えー、お札 貰ってきて置いたり

031B : オフダ ソー ンー。 アノ カミダナ、 カミダナモ チャント シメテワ  
お札 そう そう。 あの 神棚、 神棚も ちゃんと 閉めては

キダケド (C えー) アケテミタコトナイ。  
来たけど 開けてみたことない。

032C : あっ、戸が ついてるんですね。

033B : ト、 シ。 ホコマデ ト。 トガ ツイテル。  
戸、 ん。 そこまで 戸。 戸が ついてる。

034C : うちのなんか、戸がついてないので

035B : ナンカ オソシキヤナンカ アットキワ ホ ト シメテル。 ホトケサマモ  
なんか お葬式やなんか ある時は × 戸 閉めてる。 仏様も

イッショ。 (C えーえーえーえー) アレカ° ナニカ アットキワ  
いっしょ。 あれが なにか ある時は

シメテナ。

閉めてな。

036 C : あー、 そうですね。 おめでたい時、 じゃ、 婚礼の時なんかは、 仏壇は  
閉めるんですか。

037 B : シメルネ フツ。 (C ほおー) トー ナガッタラ アレ ショージカ° ミ、  
閉めるね ふつう。 戸 無かったら あれ 障子紙、

(C んー) アレデ。 (C あー、なるほど) シ。  
あれで。 ん。

038 C : じゃあ、 仏の時は 神棚のほうを 閉めて、 で、 お祝いごとの時には、  
大概、 仏壇のほうを 閉めて。

039 B : ブツダンノホーネ。 トーカ° ナカッタラバ (C えー) カミ、  
仏壇のほうね。 戸が なかったらば 紙、

040 C : えー。 あとは、あのう

041 B : ケーシキデ イーカラネ。  
形式で いいからね。

042 C : あと お盆の、 あの、 <sup>にいぼん</sup>新盆ですか、 初の お盆の時なんかは、 神棚 あの  
仏壇は 閉めますか。

043 B : シメナイヨー。 ダッテ ブツダンノマイニ タイカ° イ カザルンダモノ。  
閉めないよ。 だって 仏壇の前に 大概 飾るんだもの。

(C あー) アノ サンダンカザリ ~~~~~ココニ モッテテ  
あの 三段飾り ~~~~~ここに 持っていて

(C えー えー) シャシン カザッタリネ。 ブツダン ジャナイ、 デモ  
写真 飾ったりね。 仏壇 じゃない、 でも

ソーシキニ ブツダン シメル シトモ イルンダヨネ。  
葬式に 仏壇 閉める 人も いるんだよね。

044 C : そー 葬式の時は その 死んだ人のためだけに やるので、 先祖のほうは  
閉めちゃーかもしれないですね。

045 B : シ、 ソー。 シメ シメ ソーソー。 ソーユノモ キーテル。  
ん、 そう。 閉め 閉め そうそう。 そういうのも 聞いている。



046 C : でも、 今、 うちで やんなくなっちゃったので、 そーゆ 習慣がね、

047 B : ダカ ソーユノワ モー ワカナインダネ。 ンーンー。  
だから そういふのは もう わからないんだね。 うんうん。

048 C : わかんなくなっちゃいましたよねー。

049 B : ムカシワ オソーシキニワ シメタナ。 シメナクタッテ、  
昔は お葬式には 閉めたな。 閉めなくたって、

ナイカッタラ、 カミ コー ハッタダケデイーノ。 ケーシキダヨナ。  
[戸が] なかったら、 紙 こう 貼っただけでいいの。 形式だよな。

---

《注》

(1) ココ 玄関から入ってすぐではなく、遠いほうの奥寄りの隅を指しながらの発話。

## 【1】方言の話 1

話し手

C 女（調査員）

- 42 -

005 A : ンダ、 ハナニ ホラ コ ハナカン トシテー タケ ツケテ、 ソレ  
そうだ、 鼻に ほら こう 鼻環 通して 竹 付けて、 それ

トルカラー アタシラ ハナドリ シタモノダ。 アノ アノ タンボノ。  
取るから あたしら 鼻取り したものだ。 あの あの 田んぼの。

B サンラ、 ヤンネベー。  
B さんら、 やらないだろう。

006 B : ノーカジャナイ。  
農家じゃない。

007 A : ノーカジャーガラ。 アタシラ ハナドリ ガッコ ヤスンデ ヤラセラッチャ。  
農家じゃないから。 あたしら 鼻取り 学校 休んで やらせられた。

008 B : タウエ \_\_\_\_\_  
田植え \_\_\_\_\_

009 A : ン。 ダッテ、 カーチャンワー タウエ ドッカ アノ イグベシ、  
うん。 だって、 母ちゃんは 田植え どこか あの 行くだろう、

オヤジワ シトンジワ ヤラネシ。 ンダガラ、  
親父は 一人では やらないし。 だから、

010 B : 「ヒトンジ」 {笑}  
「ヒトンジ」 {笑}

011 A : ヒトンジ ヤラネーガラ アタシゴト ツカーッキリ ネーワイナー。 ダ  
一人で やらないから あたしを 使うきり ないわいなあ。 だから

シコ° トシタ。  
仕事した。

## 【2】方言の話2

収録時間 3分45秒

### 話し手

- A 女性 1947（昭和22）年（収録時69歳）  
B 女性 1941（昭和16）年（収録時75歳）  
C 女（調査員）

001A：ガオッタッテユー コトバワ、 ヒナンシテカラ シーート ツカウ コトバ。  
ガオッタっていう ことばは、 避難してから うーんと 使う ことば。

ダッテサー、 ガオッタッテノカ° イチバン ワカンダヨネ、 ミンナノ  
だってさあ、 ガオッタっていうのが 一番 わかるんだよね、 みんなの

アレ。 「イヤ マイッチマッタナー」 ドガナ、 （B ツカレタ） 「ヤー  
あれ。 「いや 参ってしまったなあ」とかね、 （B 疲れた） 「やあ

ヨワッチマッター」 ドガ デワ ナイノ。 「イヤ ガオッタナー」  
弱ってしまったなあ」とか では ないの。 「いや ガオッタなあ」

「ミンナ ガオンネガ」。 「ガオッター」 ッテユーノカ° イチバーン  
「みんな ガオンないか」。 「ガオッター」 っていうのが 一番

ツージル、 アタシラノ ナカデワ、 シー。 ガオッタッテユー コトバワ。  
通じる、 あたし等の 中では、 うん。 ガオッタっていう ことばは。

002C：どんな時に よく 使いますか。

003A：ンダ、 ホイワ シー ト ヒナンシテー、 コアッテ ツカレテ ハー  
そうだ、 それは んーと 避難して、 こうやって 疲れて もう

モ シンシントモニ ハー ツカレタトキナンカワ、 「アー ガオッタナー」  
もう 心身ともに もう 疲れた時なんかは、 「あー ガオッタなあ」

004C：ただ、「疲れた」じゃ ちょっと 表せない

005A：ンダナ、 ン。 ホノー トーキョーベンデー、 ヒョージンコ° デ  
そうだな、 ん。 そのう 東京弁で、 標準語で

「ツカレター」 トカ、 「ドー、 マイッテルー？」 トカデワ ナインダナ。  
「疲れたー」とか、 「どう、 参ってる？」 とかでは ないんだな。

「ガオッタ」 ッテ。 「ガーオ、 イヤ、 ガオッチマー」。 ガオッタデモ、  
「ガオッタ」 って。 「×××、 いや、 ガオッテしまう」。 ガオッタでも、

イロイロ ユイカタ アッカラ。 (B シー) 「ガオッテルー?」「シー、  
いろいろ 言い方 あるから。 (B うん) 「ガオッテル?」「ううん、

ガオッテネー」、 「ナンダ ガオッタカオ シテッペシサー」、 「イーヤ、  
ガオッテない」、 「なんだ ガオッタ顔 してるじゃない」、 「いいや、

ガオッテネー」。 テュー {笑} {B 笑} ネー。 ソレデ ツージテグ、  
ガオッテない」。 {笑} {B 笑} ねえ。 それで 通じていく、

ズーット。 ンダー  
ずーっと。 そうだ。

006 B : ムカーシ トーキョーニ イッテ、 イチバン コー アノ イナカベン  
萱 東京に 行って、 一番 こう あの 田舎弁

デテシマウノカ°、 アノー 「アー コワイ」 「コエー コエー」ッテ。  
出てしまうのが、 あのう 「あー コワイ」 「コエー コエー」って。

アノー  
あのう

007 A : コエ コエ、 ネット。 「コワイ」 デナイ 「コエ」。 (B コエー)  
コエ コエ、 ねっ。 「コワイ」 でない 「コエ」。 (B コエー)

「アー コエ コエ コエ」。  
「あー コエ コエ コエ」

008 B : ツ ツカレテ ン。 (A シー) 「ナーニ コワイノ」ッテ ユワレタノ。  
× 疲れて ん。 (A んー) 「何 怖い」って 言われたの。

ハットシ ネット、 コレ チカ° ウンダッテ。  
ハッとシ [た] ねっ、 これ 違うんだって。

009 A : ダー、 ウチノ ムスメモー ダイカ° ク イッタトキー、 (C えー)  
だから、 うちの 娘も 大学 行かった時に、

イロイロ ナンカ ヤッタアトー、 「ネー ミンナ、 ガオラナイー?」ッテ  
いろいろ なんか やった後、 「ねえ みんな、 ガオラナイ?」って

ユッタッテ。 ジブンモ 「アタシ ガオッチャッタ」ツッタ。 「ナーニー、  
言ったって。 自分も 「あたし ガオッチャッタ」て言った。 「なーに、

ソレ」ッテ ユッテ。 ソレデ、 アッ 「ガオッタ」ワ ヒョージュンコ°  
それ」って 言って。 それで、 あっ 「ガオッタ」は 標準語

ジャナインダッテ オモッタッテ、 ヨーク ユーヨ、 ソノ  
じゃないんだって [標準語だと] 思ったって、 よく 言うよ、 その

010 B : ネー、 フダーン ツカーッテルモンネ、 「コエー コエー」 ッテネ。  
ねえ、 ふだん 使ってるもんね、 「コエー コエー」 ってね。

011 A : フダン ツカ、 ダッテ ガオッタカ° イチバンネー。 (B ー)  
ふだん 使、 だって ガオッタが 一番ねえ。 (B うん)

アンマリ ハー ハネスキ° テ アー ガオッターッテワ ウンドーカイノ  
あんまり もう 走りすぎて あー ガオッターとは 運動会の

レンシュウ シスキ° テ ガオッテルートガ、 キョーワ イネカリシテ  
練習 しすぎて ガオッテルとか、 今日は 稲刈りして

ガオッタートガナー。 ナニカニツケテ ガオッタワ ユーガラ。  
ガオッタとかなあ。 何かにつけて ガオッタは 言うから。

(C んーん) ア、 ビョーキデ ネテル シトゴトモー、 (B ー)  
あ、 病気で 寝てる 人にも、 (B うん)

「ナnder、 ガオッテンノガー」 ッテナー。 (C えーえー)  
「なんだあ、 ガオッてるのか」 ってなあ。

「ダメナノガー」 ナンテ、 アレ 「ガオリ スキ° ダガラ ダメダナーッテ。  
「だめなのか」 なんて、 あれ 「ガオリ スギだから だめだなー」 って。

012 B : チョット フツーノ ツカレタトワ チョット チカ° ンダナー。  
ちょっと ふつうの 疲れたとは ちょっと 違うんだなあ。

013 A : チカ° ウ。 ンダ、 ダ コノ ニュワンスワ ゼットイ  
違う。 そうだ。 だ [から] この ニュアンスは 絶対

マネデキナイヨネ。 ンダカ ハー、 「ンダー」 ダッテ ヒャクモ  
真似できないよね。 んだから もう、 「ンダー」 だって 百も

アルッテ ユーノ、 ワタシ。 ネーッ。 ダッテ、  
あるって 言うの、 私。 ねーっ。 だって、

「ンダンダンダンダンダー」、 ヨロコンデンデショー。  
「ンダンダンダンダンダー」、 喜んでるでしょう。

「ンダーア」 ッテ ユートキワ コマッテンデショー。 「ンダガー？」 ッテ  
「ンダーア」 って 言う時は 困ってるんでしょう。 「ンダガー？」 って

ユートキア 「ソーオ？」ッテ キクシ。 ダカラ アノー アタシノ センセ、  
言う時は 「そおお？」って 聞くし。 だから あのう あたしの 先生、

コクコ° ノ センセ、 ヒナンシテル シトカ°、 ヒョー コノ  
国語の 先生、 避難してる 人が、 ××× この

ホーケ° ンワー アノー クケ° コトバニモ ツージルッテ、 ヨーク ユーノ。  
方言は あのう 公家言葉にも 通じるって、 よく 言うの。

イマ トーキョーニ アイニグトー。 (C えー) デ、  
今 東京に 会いに行くと、 [それ]で、

「オヘラッタ」ッテユーノワネ、 アノー 「オヒサマカ° ヤマニ  
「オヘラッタ」って言うのはね、 あのう 「お日様が 山に

オハイリニナッタ」ッテユーコト。 (C んーん) アタシラワ ハー、  
お入りになった」って言うこと。 あたし等は もう、

イマー ネー、 「オヘラッタラ カエッテコーヨー」ッテ (C えー)  
今は ねえ、 「オヘラッタラ 帰ってこいよ」って

ユワレテ ネーッ、 ヒカ° シズンダラ カエッテコーヨ。 (C えー)  
言われて ねえっ、 日が 沈んだら 帰ってこいよ。

イマワ オヘラッタナンテワ ユワネワナー。 ヒー クレダラドガ。  
今は オヘラッタなんては 言わないわなあ。 日 [が] 暮れたらとか。

アト スイショ<sup>(1)</sup>トカ。 オフロ。 「スイショ モセ ハヤグー」ナンテ。  
あと スイショとか。 お風呂。 「スイショ 燃せ 早く」なんて。

(B アー) ワカンナイ？

(B ああ) わかんない？

014B : ワカンナイ。 スイショ？  
わかんない。 スイショ？

015A : ンー。  
うん。

016C : み 「水」に 場所の「所」でしょうね、書けばね。

017A : ンー。 「スイショ」ワ オフロバ。 ホイデ、 ユモミトカワ。 「ユモミ」  
うん。 「スイショ」は お風呂場。 それで、 ユモミとかは。 「ユモミ」

ナンテワ ヨク ユワナイト オモーヨネ。 アタシラワ スイショッテ  
なんてのは よく 言わないと 思うよね。 あたし等は スイショって

ユッテル。 オバーサンワ ユッタ、 ヨク スイショッテ。  
言ってる。 おばあさんは 言った、 よく スイショって。

018C : ユモ 「ユモミ」もお風呂場のことですか。

019A : ンーン、 ユモミワ オフロデ ツカウ テヌク° イ。 (C あー)  
ううん、 ゆもみは お風呂で 使う 手拭い。

020B : アー ユモミネ。  
ああ ユモミね。

021A : ンー。 「ユモミ モッテ、 ユモミ モッテ、 ハイク スイショサ ンケ° ー、  
うん。 「ユモミ 持って、 ユモミ 持って、 早く 風呂場に 行け、

ホレー」ナンテ。 (C へー) {笑} フロダッテ イ イエノナガニ  
ほれ」なんて。 {笑} 風呂だって × 家の中に

ナイガラネー。 (C えーえー) ソトダガラネー。 「ジャー、 アカシ  
無いからねえ。 外だからねえ。 「じゃあ、 灯り

ツケテ ンゲー、 ホレ」ナンテ。 ダ、 アカシワ ローソクニ  
点けて 行け、 ほれ」なんて。 だ[から]、 灯りは ローソクに

ヒー ツケテ。 キノ アカシッテ キーテ ア ンダー、 アダシモ フンナノ  
火 点けて。 昨日 灯りって 聞いて × そうだ、 あたしも そんなの

ワスレテンノ アルワイナ、 ナンボシタッテ。 ダカ アタシカ° ズット  
忘れてるの あるわいな、 どうしたって。 だから あたしが ずっと

ハナシタラ、 ダレモ ワガンナイ。  
話したら、 誰も わからない。

---

《注》

- (1) スイショ 風呂。『福島県方言辞典』を見ると、「スイッショ」「スイシロ」の項目に  
「風呂(据風呂)」とある。



## 第三部 方言による昔話の会

### 第三部 方言による昔話の会

本章では、平成 28（2016）年 12 月 10 日（土）に、茨城大学図書館と連携して「茨城大学図書館土曜アカデミー」として開催した、被災地方言による昔話の会「聞いてみっぺ・語ってみっぺ・方言昔話」（茨城県教育委員会後援）の実施概要、方言昔話（会での語りの文字化）、来場者アンケート結果について述べる。

#### I 「聞いてみっぺ・語ってみっぺ・方言昔話」の実施概要

- (1) 名称 「聞いてみっぺ・語ってみっぺ・方言昔話」
- (2) 主催者等  
主催…平成 28 年度文化庁委託事業・被災地における方言の活性化支援事業「被災地方言で語る生活文化の再発見と継承：茨城と福島浜通りの方言を中心に」（茨城大学・代表責任者 杉本妙子）ならびに茨城大学図書館  
後援…茨城県教育委員会
- (3) 実施の目的  
茨城方言を中心に被災地方言による昔話の語りの会を開催し、方言をとおして地域への愛着や自信を深める。
- (4) 実施日時 平成 28 年 12 月 10 日（土） 14：00～16：00
- (5) 実施場所 茨城大学図書館本館 3 階ライブラリーホール（水戸キャンパス）
- (6) 来場者数 120 人超（ライブラリーホールの座席数 120＋追加席）
- (7) プログラム
  - ①開会のあいさつ・会の趣旨説明
  - ②方言昔話の聞き比べ～同じ昔話を共通語と方言で違いを楽しむ～
    - ・お話「きゅう太と蛙」
    - ・語りの方言…共通語、群馬方言、徳島方言、茨城方言
  - ③東北方言で昔話（その一）
    - ～青森の方言による語りで昔話とことばを楽しむ～
    - ・南部弁のお話「舌切り雀」、他
    - ・津軽弁のお話「飴コ買いに來た幽霊」、他
    - （ 休 憩 ）
  - ④東北方言で昔話（その二）
    - ～福島の方言による語りで昔話とことばを楽しむ～
    - ・中通り方言のお話「馬鹿嫁話」「雪の夜ばなし」
    - ・浜通り方言のお話「大悲山大蛇物語」
  - ⑤茨城方言の昔話
    - ・聞きなれた茨城方言の良さ・おもしろさを再発見する
    - ・お話「カッパレ餅」、「ほおどしの頭」、額田のたっさい話「欲がない」、「大晦日ならジャーボでもよい」
  - ⑥おわりのあいさつ
- (8) その他
  - ・当日配布資料として、B5 版 14 ページ（表紙・裏表紙を除く）の冊子状の資料とアンケート調査用紙、チラシを配布。

- ・会場（ライブラリーホール）外に、昔話や地域の民俗に関連する資料展示としてポスターを掲示。取り上げたのは、「カッパレ餅」、「つと豆腐」、南相馬市小高区の大悲山について、等。
- ・「カッパレ餅」に代表される 12 月 1 日の行事、「シモツカレ」に代表される初午の食べ物についての文献調査をまとめた資料の展示。



## Ⅱ 方言昔話

本節では、「聞いてみっぺ・語ってみっぺ・方言昔話」(2016年12月10日開催)において語られた昔話のうち、茨城弁、福島弁、南部弁、津軽弁での語りを示す。なお、「きゅう太と蛙」については、昔話の会において共通語や他方言と比較した昔話であったので、共通語版も参考として示す。

以下に示す昔話では、実際の語りの際に、昔話に関係する事柄や方言の説明を話の前後に語り手が加えた部分について、適宜、【 】中にその一部を示した。また、昔話の中の方言についても、適宜、注を付した。なお、以下に示す方言昔話は、会当日の語りの映像をDVDに編集し、本報告書に添付したので、併せてご覧いただきたい。なお、昔話は同じ語り手による同じ話でも、語る度が変わるものであるので、本節では「聞いてみっぺ・語ってみっぺ・方言昔話」での語りをもとに文字化してある。

文字化の示し方は、おおむね以下のとおりであるが、昔話によって示し方が違う場合がある。また、適宜、方言の語に注を付したが、注の付け方・多寡についても昔話によって異なる。

### 〔方言昔話の文字化の示し方〕

- ・原則として、語りの発音どおりの平仮名・漢字交じり文で表す。複数の読み方ができる漢字には、適宜、振り仮名を付した。
- ・語と語、あるいはまとまった意味の文節・句と文節・句の間を一字あけにするとともに、適宜、句読点を付けた。
- ・助詞「ハ・ヘ・ヲ」(発音は「ワ・エ・オ」)は「は・へ・を」で、ガ行鼻濁音(少し鼻にかかったガ行の発音)はカタカナのガ行で、長音(伸ばす音)は主にカタカナ「ー」または小さい「あ、え」などで表す。なお、ガ行鼻濁音を区別せず、ガ行濁音で表記した昔話もある。
- ・標準語と異なる方言の発音や語形は、かな漢字表記にルビを付して表す。
- ・適宜、発話には出てこない助詞や語の一部を〔 〕で補う。
- ・わかりにくい表現や発音については、その直後に( )中で意味を示す。

---

### (1) 茨城弁(茨城町)「きゅう太と蛙」※

【では、今っから<sup>いばらぎべん</sup>茨城弁で「きゅう太と蛙<sup>けえ</sup>」つつう話をすっかんなあ。みんな、聞いてくろなあ。】

むがし、ある村に きゅう太つつう、下手な<sup>へだ</sup> 博打<sup>ばぐち</sup>ぶぢガ いたんだと。毎朝、博打<sup>ばぐち</sup>に 行くっちゅうと <sup>かなら</sup>必ず 負けて <sup>けえ</sup>帰ってくんだと。田んぼ道 通って帰<sup>けえ</sup>っと、そこに 一ぴきの <sup>けえ</sup>蛙<sup>め</sup><sup>(1)</sup>がいた。

「負けたか バガバガ、負けたか バガバガ」って、毎日 <sup>ゆ</sup>言うんだと。

だげんど きゅう太は、(蛙<sup>けえ</sup>めが <sup>ゆ</sup>言<sup>え</sup>ってんのを) ひとつつも 気がつか<sup>え</sup>なかつたんだ。

ある日のごと、負げるにも 負げるにも 大負けして、あんまり いじやげだ<sup>(2)</sup>が  
ら、そこで しょんべん たれべえと思って、田んぼ道で しょんべん たれはじま  
った。

そおすつと、蛙<sup>けえる</sup>めガ、

「負けたか バガバガ、負けたか バガバガ」って言った。

「おめえ、そんなごど 言<sup>ゆ</sup>ってんのが。(今 はじめで 気がついた。) おれガ 毎日  
博打に 負けて帰<sup>けえ</sup>ってくつから、『負けたか バガバガ、負けたか バガバガ』って、  
ふてえ 畜<sup>ちきしょう</sup>生めだ」

きゅう太は、そこに あった 棒<sup>ぼう</sup>さい<sup>(3)</sup>で、蛙<sup>けえる</sup>めの背中<sup>せな</sup> ひとつ 叩<sup>はた</sup>いたんだっち  
け<sup>(4)</sup>。

そうすつと 蛙<sup>けえる</sup>めガ、

「キューター」って、名前を 言<sup>ゆ</sup>ったんだと。

きゅう太は、

「この 畜<sup>ちきしょう</sup>生めが、人の名前まで 知ってて、おれのこと ばかにしやがったな」

まだ、叩<sup>はた</sup>いてやっぺえ と思って 棒 振り上げつと、蛙<sup>けえる</sup>めガ、

「きゅう太、痛<sup>い</sup>えじゃねえか」って、田んぼん もぐっちまったんで、今度は、叩<sup>はた</sup>か  
んねえちゃったって<sup>(5)</sup>。

こんじ、おしめえ

#### 《注》

(1) 蛙<sup>けえる</sup>め 蛙。メは動物名の後につく接尾辞。

(2) いじやげだ 腹がたった。いらだった。イジャケル、イジャゲルなどとも。

(3) 棒<sup>ぼう</sup>さい 棒きれ。

(4) 叩<sup>はた</sup>いたんだちけ たた 叩いたんだそうだ。叩いたんだという。

(5) 叩<sup>はた</sup>かんねえちゃったって 叩けないでいたって。叩くことができなかったって。

《参考：共通語版「きゅう太と蛙」》※

むかし、ある村に、きゅう太という、下手な博打打  
ちがいました。毎朝、博打に行くのですが、必ず負け  
て帰ってきました。きゅう太が、田んぼ道を通ると、  
そこに一匹の蛙がいました。蛙は、いつも、

「負けたか バカバカ、負けたか バカバカ」と言っ  
ていました。けれども、きゅう太は、そのことに全然  
気がつきませんでした。

ある日のこと、きゅう太は、負けるも負けるも大負  
けして、いつもの田んぼ道を帰ってきました。きゅう  
太は、あんまり腹が立つので、そこで小便でもしてや  
ろうと、し始めました。すると、蛙が、

「負けたか バカバカ、負けたか バカバカ」と言いました。きゅう太は、それを聞くと



言いました。

「おまえ、そんなこと言ってたのか。今初めて気がついた。おれが毎日博打に負けてくるからって、『負けたか バカバカ、負けたか バカバカ』って、とんでもない畜生だ」

きゅう太は、そこにあった棒きれで、蛙の背中を一発叩きました。すると、蛙が、「キューター」と叫びました。きゅう太は、「こいつめ、俺の名前まで知ってたのか。散々バカにしやがって」と言って、また棒を振り上げました。けれども、蛙は、「きゅう太、痛いじゃないか」と言うと、泥の中にもぐってしまいました。それで、もう、叩くことはできませんでした。おしまい

※鶴尾能子編（一九七五）『茨城の昔話』（三弥井書店）所収の「きゅう太と蛙」をもとに七絃の会が茨城町方言ならびに共通語で再話したもの。

## （２）南部弁「舌切り雀」

【おら、住んでる五戸ではだす、昔かたりは夜語るもので、昼、語れば、ネズミに笑われるってへって、昼、語る時は、ネズミを追っ払ってから語ったもんだずよお。こつたらにきれいな図書館には、ネズミはおりゃあせんべども、ネズミを追っ払ってから語ります。

んだら、追っ払うよ。 「ニャ〜オ、ニャ〜オ、ニャ〜オ」 これで、ネズミはいなくなりやんした。へだら、あださんがだが よーぐ覚えてる「舌切り雀」の話。】

むが〜し、あつたずオン。爺<sup>じじ</sup>と 婆<sup>ばば</sup>ど あつたずオンな。爺<sup>じ</sup>ア 山さ 薪<sup>たきぎ</sup> 取りね行<sup>い</sup>ったず。したきゃ、雀<sup>すずめ</sup>こア 一匹<sup>いっぴき</sup> 居<sup>い</sup>だずオン。それよ(を) 捕<sup>と</sup>て 家<sup>え</sup>さ 戻<sup>もど</sup>て来たずオンな。

「婆<sup>ばば</sup>ア、婆<sup>ばば</sup>ア、雀<sup>すずめ</sup>こ 捕<sup>と</sup>てきたでア。」

て言<sup>へ</sup>て、な<sup>な</sup>ンもかも め<sup>め</sup>ごがていだずオン<sup>(1)</sup>。

ある日、爺<sup>じ</sup>ア まだ(また) 山さ 行<sup>い</sup>て いねエずね、雀<sup>すずめ</sup>ア 婆<sup>ばば</sup>の 糊<sup>のりがえ</sup>替<sup>か</sup>こすィ糊<sup>のり</sup>こ<sup>(2)</sup>よ、みんな 飲<sup>の</sup>んでしまったずオン。婆<sup>ばば</sup>ア ふ<sup>ふ</sup>んどぐ きもやいで<sup>(3)</sup>、

「いやいや、この腐<sup>くさ</sup>れ雀<sup>すずめ</sup>こア、これア。」

て言<sup>へ</sup>て、鉄<sup>はさみ</sup>こ 持<sup>も</sup>ってきて、チョキンと 舌<sup>し</sup>こ 切<sup>き</sup>って 飛<sup>と</sup>ばしてやたずオン。

爺<sup>じ</sup>ア 山がら 戻<sup>もど</sup>って来て、その話よ 聞<sup>き</sup>いで、なんもかも 口<sup>く</sup>惜<sup>や</sup>しがて、

「いやいや、罪<sup>つみ</sup>つくりだごど<sup>(4)</sup> したもんだ。」

て言<sup>へ</sup>て、雀<sup>すずめ</sup>こよ たねね<sup>(5)</sup> 山の方<sup>ほ</sup>さ 行<sup>い</sup>ったずオン。そやて<sup>(6)</sup>、

ゝす〜ずめど〜な〜 雀<sup>すずめ</sup>ど〜な

お宿<sup>やど</sup>こア ど〜ごでゴンゼア

て呼<sup>よ</sup>ばりながら、村<sup>むら</sup>の 外<sup>はず</sup>れこのほうさ 行<sup>い</sup>たずオン。行<sup>い</sup>たきゃ行<sup>い</sup>たきゃ<sup>(7)</sup> 笹<sup>ささ</sup>原<sup>はら</sup>ア

あつて、雀<sup>すずめ</sup>どア<sup>(8)</sup> えっペア いだずオン。へだへで 爺<sup>じ</sup>ア 一段と 声<sup>こゑ</sup> 高<sup>たか</sup>くして、

ゝす〜ずめど〜な〜 雀<sup>すずめ</sup>ど〜な

お宿<sup>やど</sup>こァ ど〜ごで gonzeァ

て呼ばったんずォん。したきァ、

ゝさ〜さわら〜の〜

か〜げで gonzeァ ちゅんちゅん

て、雀ァ 鳴いだずォんな。爺<sup>じ</sup>ァ 喜んで ささわら<sup>ささわら</sup>かげ<sup>かげ</sup> 行って見だっけァ、爺<sup>じ</sup>のあ  
ずがった<sup>(9)</sup> 雀こァ、綺麗だ<sup>めい</sup> 前<sup>めい</sup>だれこ<sup>(10)</sup> 当<sup>で</sup>で 出<sup>で</sup>はて来て、

「爺<sup>じ</sup>様、爺<sup>じ</sup>様、よぐ お出<sup>で</sup>アッタごど。さあさあ おはエられ。」

て言<sup>い</sup>て、一杯<sup>いっぺ</sup> 御馳走したずォん。

まんち、金の膳こさ 金の椀こ、金の箸こ 付けで、御馳走したンだしけァ、爺<sup>じ</sup>ァ、  
はァ、おもしろくて<sup>(11)</sup>、一杯<sup>いっぺ</sup> よばれで、

「雀こェ、雀こェ、まだ 来るしけァ、はァ 戻るァね。」

て 言<sup>い</sup>たずォん。したけァ 雀こァ、

「爺<sup>じ</sup>様、爺<sup>じ</sup>様、お土産<sup>みやげ</sup>ね 葛籠<sup>つづら</sup>ァ あげるどもねァす、軽い<sup>かる</sup> 葛籠<sup>ほ</sup> 欲しがえ、重<sup>おも</sup>  
ェ 葛籠<sup>つづら</sup>ァ 欲しがえ。」

て 聞<sup>き</sup>いだずォん。爺<sup>じ</sup>ァ、

「吾<sup>わ</sup>ァはァ、年<sup>とし</sup> 取<sup>と</sup>てるだへで、軽い<sup>かる</sup> 葛籠<sup>け</sup>こ 呉<sup>く</sup>ろ。」

て言<sup>い</sup>て、軽い<sup>かる</sup> 葛籠<sup>みおぐ</sup>ァ もらって、雀こね(雀に) 見送り<sup>みおぐ</sup>されて 来たずォんな。

家<sup>え</sup>さ 戻<sup>もど</sup>ってから、もらってきた 葛籠<sup>おろ</sup>よ 下<sup>あ</sup>して 開<sup>あ</sup>げで 見<sup>み</sup>だけァ、中<sup>なか</sup>さ 小袖<sup>こそで</sup>  
だの 銭<sup>ぜに</sup>だの 何<sup>なん</sup>だので、宝<sup>たがらもの</sup>物<sup>もの</sup>どァ ずっぱど<sup>(12)</sup> 入<sup>はい</sup>って<sup>はい</sup>いだったずォん。爺<sup>じ</sup>ァ 雀  
の お蔭<sup>え</sup>だて 言<sup>い</sup>て 喜<sup>よろこ</sup>んだずば<sup>(13)</sup>、婆<sup>ばば</sup>ァも 羨<sup>うらや</sup>ましぐな<sup>うらや</sup>ったずォんな。

婆<sup>ばば</sup>ァ、舌<sup>しほ</sup>よ 切<sup>き</sup>って 飛<sup>と</sup>ばしてや<sup>や</sup>ったごどば 忘<sup>わす</sup>れで、

「おらも 雀このどごさ 行<sup>い</sup>てくるべ。」

て言<sup>い</sup>て、宿<sup>やど</sup>こ たねね 行<sup>い</sup>ったァずォん。そやて、

ゝ雀<sup>すんずめ</sup> どな、雀<sup>すんずめ</sup> どな、

お宿<sup>やど</sup>こァ ど〜ごで gonzeァ

て呼<sup>よ</sup>ばりながら、村<sup>むら</sup>の 端<sup>はす</sup>れこのほうさ 行<sup>い</sup>ったずォん。したきァ、

ゝ笹原<sup>ささわら</sup>の かげで gonzeァ ちゅんちゅん

雀ァ 鳴<sup>な</sup>ぎながら 出<sup>で</sup>はて来て、婆<sup>ばば</sup>ァよ、雀の 家<sup>え</sup>さ へで行<sup>い</sup>ったずォん。

そやて、雀ァ、婆<sup>ばば</sup>ァねば(には) 猫<sup>ねこ</sup>の膳<sup>ねご</sup>ね(に)、猫<sup>ねこ</sup>の椀<sup>ねご</sup>、猫<sup>ねこ</sup>の箸<sup>ねご</sup><sup>(14)</sup>よ 付けで、栗<sup>あわ</sup>  
飯<sup>まんま</sup>さ 干菜汁<sup>ほしなじる</sup><sup>(15)</sup>で 食<sup>か</sup>へだずォん。[それがら] 婆<sup>ばば</sup>ァ、

「戻る。」

て言<sup>い</sup>たけァ、

「婆<sup>ばば</sup>様、婆<sup>ばば</sup>様、お土産<sup>みやげ</sup>ね 葛籠<sup>つづら</sup>ァ あげるどもねァす、軽い<sup>かる</sup> 葛籠<sup>ほ</sup> 欲しがえ、重<sup>おも</sup>だエ  
葛籠<sup>つづら</sup>ァ 欲しがえ。」

て聞いだずば、婆<sup>ばば</sup>ア 欲<sup>よぐ</sup>たげで<sup>(16)</sup>、

「吾<sup>わ</sup>ア 重<sup>おも</sup>でア 葛籠<sup>おも</sup> 欲<sup>よぐ</sup>しやね。」

て言<sup>へ</sup>て、重<sup>おも</sup>でア 葛籠<sup>おも</sup>ア もらて 背負<sup>しよ</sup>てきたずィ。爺<sup>じ</sup>ア 軽<sup>かろ</sup>いの もらても、あつただね<sup>(17)</sup> 良<sup>よ</sup>いものばり 入<sup>はい</sup>っていだのね、まして こつたら<sup>(18)</sup> 重<sup>おも</sup>だエのさば、どつたら<sup>(19)</sup> 良<sup>よ</sup>いのア 入<sup>はい</sup>っているのだがど 思<sup>おも</sup>て 背負<sup>しよ</sup>ってきたずォん。

途<sup>とちゆう</sup>中<sup>ちゆう</sup>まで 来<sup>き</sup>たけや、重<sup>おも</sup>だくて 仕<sup>しかた</sup>方<sup>な</sup>なエだし、ヘィば<sup>(20)</sup> 見<sup>み</sup>たぐなつただしけや、下<sup>おろ</sup>して 開<sup>あ</sup>げで 見<sup>み</sup>だずォん。

したけや、中<sup>なが</sup>さ 化<sup>ばけもの</sup>物<sup>なん</sup>だの、蛇<sup>なん</sup>だの、何<sup>なん</sup>だのて、きたねエ 物<sup>なん</sup>ばり ずっぱど 入<sup>はい</sup>っていだつたずィ。

あまり 婆<sup>ばば</sup>ア 欲<sup>よぐ</sup>張<sup>ば</sup>て 人<sup>ひと</sup>まねした<sup>ただ</sup>へで、おおみず くらたずィ<sup>(21)</sup>。

へで<sup>(22)</sup>、人<sup>ひと</sup>まね するもんで なエずィ。

どつとはれエ

#### 《注》

(1) めごがて 可愛<sup>めご</sup>がって。

(2) 糊<sup>のりがえ</sup>替<sup>のり</sup>こすィ 糊<sup>のり</sup>こ 洗<sup>あら</sup>い張<sup>は</sup>り用<sup>よう</sup>の糊<sup>のり</sup>。

(3) ふんどぐ きもやいで ひどく肝<sup>かん</sup>を焼<sup>や</sup>いて。ひどく怒<sup>いか</sup>って。

(4) 罪<sup>つみ</sup>つくりだごど かわいそうなこと。

(5) たねね たずねに。

(6) そやて そうして。

(7) 行<sup>い</sup>たきや行<sup>い</sup>たきや どんどん行<sup>い</sup>つたら。

(8) 雀<sup>すずめ</sup>どア 雀<sup>すずめ</sup>どもが。

(9) あずがった 育<sup>そだ</sup>てた。

(10) 前<sup>め</sup>だれこ 前<sup>め</sup>かけ。

(11) おもしろくて よろこんで。

(12) ずっぱど たくさん。

(13) 喜<sup>よろこ</sup>んだずば 喜<sup>よろこ</sup>んだそうなので。

(14) 猫<sup>ねこ</sup>の椀<sup>わん</sup>、猫<sup>ねこ</sup>の箸<sup>しゆ</sup> いずれも不潔<sup>ふけつ</sup>な食膳<sup>しょくぜん</sup>の代<sup>しろ</sup>表的<sup>てき</sup>な言<sup>こと</sup>い草<sup>くさ</sup>。

(15) 干<sup>ほし</sup>菜<sup>な</sup>汁<sup>じる</sup> 干<sup>ほし</sup>した大根<sup>だいこん</sup>の葉<sup>は</sup>を入<sup>い</sup>れた味噌<sup>みそ</sup>汁<sup>じゆ</sup>。干<sup>ほし</sup>菜<sup>な</sup>は、晩秋<sup>ばんしゅう</sup>から冬<sup>ふゆ</sup>に作<sup>つく</sup>る。『聞<sup>き</sup>き書<sup>き</sup> 青森<sup>あおもり</sup>の食<sup>しょく</sup>事<sup>じ</sup>』には、「干<sup>ほし</sup>菜<sup>な</sup>は、大根<sup>だいこん</sup>を収<sup>と</sup>穫<sup>と</sup>したときに葉<sup>は</sup>を切<sup>き</sup>り落<sup>お</sup>とし、そ  
れを縄<sup>なわ</sup>で編<sup>あ</sup>んで軒<sup>のき</sup>下<sup>した</sup>などにつるして干<sup>ほし</sup>したものである。(中略)食<sup>しょく</sup>べるときは  
一<sup>いっ</sup>度<sup>ど</sup>ゆでたものを汁<sup>じゆ</sup>に入<sup>い</sup>れる。」とある。(p. 241)

(16) 欲<sup>よぐ</sup>たげで 欲<sup>よぐ</sup>ばって。

(17) あつただね あんなに。

(18) こつたら こんなに。

(19) どつたら どんなに。



(20) ヘィば 大変。

(21) おおみず くらたずィ 大水食らったんだ。大失敗したことの喩え。

(22) へで それだから。

### (3) 津軽弁「飴コ買いに来た幽霊」

【青森は、津軽弁と南部弁って、ふたつつ分かれてるんです。今の話は南部弁、生粋の南部弁。で、私は津軽弁で話コさせてもらいます。】

むがし、ある門前町の ズーっと はずれコさ、わんつかだ 三文店コ あてあたど。

そごの爺サマ、ある晩げ、もう 寝るがなあと 思て、店の戸コ 閉めで、寝床さ 入って 間も無ぐ、トントントン、トントントン、戸コ 叩ぐ音コ したと。

「あれァ、誰だべな、こう 遅くなつてがら」そう思て、爺サマ 店の戸コごどば、わんつか 開げで 見だきや、そこさ、きれな ただ 若げ女ゴ 立ってあつたど。

「おらさ 飴コ 売ってけへ」そして、しゃべって、手さ ぎりっと 握ってら 一文銭ごとば 爺サマさ 渡したど。

爺サマ、割箸さ 水飴ごとば、ぐるぐると 巻いで、その女ゴさ 持だへでやった。

次の日も、その 次の日も、そのまた 次の日も、晩げになれば その若げ 女ゴ、一文 持って 飴コ 買いに来たど。六日目の 晩げに、「これで 飴コ 買うのも 終りだ」って しゃべっていたどごで、爺サマ、そのことば 気になって、女ゴの 後コ つけで行った。

門前町 ズーッと 過ぎて、何軒目がの 大き お寺の門ごどば 入ってって、そのお寺の うしろの方さ ある 墓所のとごまで 行ったきや、若げ女ゴの その姿コ、スーッと 消えたんだと。

「ありゃー、この辺まで いだど 思ったけど、どこさ 行たべな」そう思て、爺サマ、辺りコごどば 見てらっきや、「オギャー オギャー オギャー」風コさ 乗って、赤ゴの 泣き声 聞こえて来たど。

爺サマ、恐ねぐて 恐ねぐて、走けで 走けで 走けで 逃げで、家さ 行って、頭から 布団 かぶて、朝ままで ガタガタガタと 震えていだど。

朝まになって、そごの お寺さ 爺サマ 行って、和尚様さ 今までの事、みんな 話ししだぎや。そごの 和尚様、思い当たる事 あつたがさ、寺男ごどば 呼ばって、無縁墓ごどば 掘らへだ。早桶の フタごどば 開げで 見たきや、そごさ 若げ 女ゴ いで、その 女ゴの 横で 生いだばしの 赤子コ、飴コ なめて いてあたど。その 赤子の まわりさ、割箸、五本 散らばって あつたんだど。

その女<sup>おな</sup>ゴ、十日<sup>まい</sup>ばし 前に、ケガジ坂<sup>とこ</sup>の所で 行き倒れで あったのごどば、誰<sup>だん</sup>も ひぎとってける 人、いねはんでって、和尚<sup>おしよさま</sup>様、六文 持だへで、その 無縁墓<sup>もん</sup>さ 埋めてけら者<sup>もん</sup>で あったど。六文<sup>じえん</sup>てす 銭コ、地獄、餓鬼、畜生、阿修羅、人間、天上てす、六道の道の その 渡す(衆生<sup>じえん</sup>ば 救うために 持だへる)、地獄の 渡し賃<sup>し</sup>で あったんだど。

のお、親<sup>かな</sup>ズもの、哀<sup>かな</sup>しもんでねが。自分で 死んでも まだ、自分の 童<sup>わらし</sup> ごとば、一日でも 長ぐ 生きさへてど 思<sup>も</sup>って、和尚<sup>おしよさま</sup>様、せっかく 地獄の 渡し賃<sup>し</sup>だで 持だへでけだ その 六文で、毎日、幽霊<sup>おしよさま</sup>になって 飴<sup>お</sup>コ 買って、その 童<sup>わらし</sup> コさ 食<sup>か</sup>へでいだんだびょん。

和尚<sup>おしよさま</sup>様、その 赤<sup>さか</sup>ゴごとば ひぎとって、お寺<sup>お</sup>で 育<sup>ご</sup>でる事に したばって、その 童<sup>わらし</sup> コが なん<sup>お</sup>もかも 賢<sup>さか</sup>し 童<sup>わらし</sup> で 大き<sup>お</sup>くな<sup>お</sup>ったきや、立派<sup>おしよさま</sup>だ 和尚<sup>おしよさま</sup>様に な<sup>お</sup>ったてす 話<sup>わ</sup>コてす。

とっちばれ。

【「終わり」のことを津軽では「とっちばれ」ってゆうんです。南部のほうでは「どっとはれ」。それで、福島<sup>ふくしま</sup>のほうでは「めでたし、めでたし」って言うとかって聞きましたけど、どうでしょうね。この「終わり」のことは結構おもしろいので、皆さん、興味があつたら調べてみてください。

(司会：今のお話、赤ちゃんが登場するお話でしたね。私の出身の群馬だと「あかっこ」と言うんですけれども、津軽ではいかがですか。)

生まれたばっかしの赤ちゃんのことを「びっき」って言うんです。それこそほんとに生まれたばっかし、生まれた日とか、二～三日のうちは「びっき まいた」(赤ん坊 生まれた)とかって(高齢<sup>こうれい</sup>の人は)言うんです。で、産婦人科<sup>さんぶにんか</sup>で今は生まれますよね。家さ帰る頃には「あがごっこ」(赤子<sup>あかこ</sup>っこ)になるんです。だいたい「あがご 連れて 戻<sup>かえ</sup>ってきた」って言うんですね。して、「あがご」がもう少し太<sup>ふ</sup>つき<sup>つき</sup>くなって幼稚園<sup>幼稚園</sup>さ行くようになれば「もっけ」になるんです。で、「もっけ」がら、今度、小学校<sup>小学校</sup>もだいたい「もっけ」って言いますけども、小学校<sup>小学校</sup>の高学年<sup>こうがくねん</sup>がら中学校<sup>中学校</sup>さ行くようになれば、「わらし」(童<sup>わらし</sup>)になるんです。「あそこの わらしこ なんぼ いいわらしっこだかさあ」って言うんです。で、高等学校<sup>高等学校</sup>さ入るようんなれば、「わらし」でなくて、人格<sup>じんかく</sup>もちゃんとしてきますので、「わけもの」(若者<sup>わかし</sup>)になるんです。「あそこのわけもの、いいわけものだ。」そう言います。】

#### (4) 福島中<sup>ふくしま</sup>通り方言「雪の夜<sup>ゆき</sup>ばなし」

雪<sup>ゆき</sup>やあ、のんのん 降<sup>ふ</sup>る 晩<sup>ばん</sup>ゲ、男<sup>おとこ</sup>ガ 童<sup>わらし</sup>コ 一人 連れて、山<sup>やま</sup>越<sup>こ</sup>ししていたと。昔<sup>むかし</sup>むかしの こんだわ はあ。遠<sup>とほ</sup>い 遠<sup>とほ</sup>い 国<sup>くに</sup>の 話<sup>わ</sup>だと。

雪<sup>ゆき</sup> のんのん 降<sup>ふ</sup>る 晩<sup>ばん</sup>ゲ、なんの用<sup>よう</sup>だか 知<sup>し</sup>んねえガ、童<sup>わらし</sup>コ 連れ<sup>とつ</sup>れた 父<sup>ちち</sup>つあまガ 山<sup>やま</sup>越<sup>こ</sup>ししていたと。

雪は、道も 林も なんもかんも 見えねえほど 降った。目じるしの 木も 石も みんな 雪かぶって 平らなるほど 吹き降りガ ひどくって、父つあまは 道に 迷ってしまった。

父つあまは、童コだけでも 助けべえと 思って、我ガの 着ていた 半纏 脱いで 着せ、やぶの 陰に 身い 寄せて、童コ 懷に 抱いて、吹雪に 背え 向けて、風の おそ止みになんのを 待っていた。

童は 眠くてなんね。

父つあまの 懷ん中で、すーっと 引っこまれるみてえに 眠たくなった。そんな時、ふっと 人影ガ さして、童コの 顔 のぞく者ガ いたと。そりゃあ なんと 美しい 姉さまだったとよ。姉さまは、真っ白な とろりと 光った 着物 着て、どこから 見ても 姿かたちの 良い 姉さまだった。

その 姉さま、童コ 懷に 抱えて 背中 丸めて 眠っている 男に 顔を 寄せると、ふっと 白い 息を ふっかけだ。

すると 男は、たちまち 真っ白に 凍みちまった。

真っ白に 凍みて 動かねなくなった 男の 懷に 抱かれたまんま、ぼおっと 見ている 童に 向かって、その 姉さま、

「おめえは めんごい 童だから、助けておくべ。したガ、この場で 見たことは、この後、決して ひとに 語るでねえぞ。語ったら 命は ねえ」

そう 言うのと、吹雪の 渦の中に 引っこまれるように 雪と いっしょに どっかに 行っちまった。

童は、夢見たように ぼーっとしたまんま 眠っちまった。

次の朝、童は 捜しに来た 村人たちに 眠ったまんま 背負われて、村に 帰っていった。父つあまは、童コ 助けべとして、着ていたもの みな 脱いで、童を 抱いていたもんで、真っ白に 凍みて 死んでいたガ、童は なんともなくて 助かった。親じゃあ ありがてえもんだと、みんな 語ったそうだ。

それから 何年か 経って、やっぱし 雪 のんのん 降る 晩ゲ、表戸 トントントン たたく 音ガする。

今は はあ、いい若い者に なった 息子ガ、おっか様と 二人で 囲炉裏端で 夜業をしていたガ、何だべえと 思って 戸を 開けてみたれば、真っ白に 雪 かぶった 若い女ゴガ 立っていて、

「道に 迷って、夜になってしまった。 どっか 庭の 隅にでも、泊めてもらうわけには いくめえか」

と、心細ゲに 親子に 尋ねたと。

おっか様も 息子も、わガ親父さまのこと、吹雪で 亡くしていたもんだで、他人事

ではねえ。ほれ、寒がったべ、早く家<sup>え</sup>さあがれ。火にあたれ。腹もへって  
るべと、粥ぬくめて食わせたり、乾いたもの着せて、寝床に休ませてやっ  
たと。

次の日も吹雪、その次の日も吹雪。こだな吹雪では、山越<sup>やまご</sup>しは無理だと  
止められて、女ゴは、ただ泊めてもらっては申し訳ガねえと、おっか様の肩も  
んだり、針仕事<sup>はりしごと</sup>だーの水仕事<sup>みずしごと</sup>だーの手伝っていた。

その仕事<sup>しごと</sup>ガ、また、手早くて良い仕事<sup>しごと</sup>をする。おっか様は、こだな姉さまガ  
うちの息子の嫁<sup>おな</sup>になってくれればと思<sup>なによ</sup>って、女ゴに聞いてみた。何<sup>なによ</sup>用で、どこ  
まで行くんだ。

すると、女ゴは、親たちに死なれて、知り人<sup>びと</sup>もいなくなり、遠い北の国まで  
昔の人を尋ねて行くところだと語った。おっか様は、「ほんではなんでかんで  
急いで行かねばならねってこともなかんべから、ましては北の国ではなおの  
こと、雪も深い。せめて雪消<sup>ゆき</sup>の春<sup>はる</sup>まで、この家で手伝<sup>いえ</sup>っててくれ」と頼  
んだ。

春になって、女ゴは北の国には行かず、その家<sup>いえ</sup>の嫁になった。

その嫁は、たいそうな働きもので、朝は暗いうちから飯を炊き、畑に出  
て耕<sup>たがや</sup>し、暇には機<sup>はた</sup>も織<sup>はた</sup>ったし、息子といっしょんなって馬も引いたし、  
木も伐<sup>き</sup>った。

何年か経つうちに、めんゴい童<sup>わらし</sup>も二人、三人と生<sup>な</sup>して、ほんに幸せであ  
ったと。したガ、ただ一つ不思議なことは、その嫁は、何年経っても、どだな荒<sup>あら</sup>  
仕事<sup>しごと</sup>しても、嫁に來た時のまんま、若い美しい姿<sup>すがた</sup>かたちで、顔にしわ一本よ  
るでなし、手なんと細くていつまでも脂ガのついていて美しい。

ある冬の晩、やっぱし雪のんのん降る晩<sup>とつ</sup>ゲ、外は吹雪。今は父<sup>とつ</sup>あ  
まになった息子ガ、炉で火にあたりながら、我<sup>か</sup>ガ嬬<sup>か</sup>のこと見ておった。

「お雪、お前<sup>めえ</sup>はいつまでたっても、何人赤子<sup>けしやう</sup>生<sup>な</sup>しても、[嫁に]來た時のまんま  
だな。まるで、化生<sup>けしやう</sup>のものみてえだなあ」

本気で言ったわけではねえ。嬬<sup>か</sup>は、灯のそばで仕事<sup>しごと</sup>をしておったガ、その美  
しい横顔<sup>よこがお</sup>を見せながら、聞かぬふりをして、仕事<sup>しごと</sup>を続けておった。

外は吹雪だガ、家の中は温<sup>い</sup>い。囲炉裏にはおきガいっぺえあって、ぽこ  
ぽこと太い割り木ガ燃えている。炉端では、腹いっぱい飯を食<sup>わらし</sup>って、童  
どもガ寝ている。

男はほんに幸せであったんだな。吹雪の音を聞きながら、なつかし氣<sup>げ</sup>に昔  
のことを思い出しておった。

「おらガ童<sup>わらし</sup>だった頃」

語りはじめた。

嬢の<sup>かか</sup> 眼ガ<sup>まなこ</sup> ちらりと 光って、男を 見た。だガ 男は、何にも<sup>なん</sup> 何心なく<sup>なにごころ</sup> なつかしように 昔のことを 語っていた。

「おらガ 子どもの頃、亡くなった<sup>とつ</sup> 父つあまと 二人で<sup>やま</sup> 山越ししたことガ あった。ちょうど こだな 吹雪の 晩だった。そんな時、美しい 姉さまガ<sup>とつ</sup> 来て、父つあまに 息 ふっかけたら、父つあまは 真っ白になって 死んじまっただガ、おらは<sup>わらし</sup> 童だったし、まるで 夢みたように 思ってた、わかんねガったんだガ、今<sup>かんガ</sup> 考えてみると、あれガ<sup>ゆきじょうろ</sup> 雪女郎と いうもんなんだべな。美しい<sup>おな</sup> 女ゴだった。ほんとに美しい<sup>おな</sup> 女ゴだった」

男ガ ひょいと<sup>かか</sup> 嬢を 見て、

「お雪、そういえば、お前に<sup>めえ</sup> 似ていたな」

男は、アッと 小さく 口の中で 叫ぶと、すーっと 顔から 血の氣が<sup>け</sup> 失せていった。

「なして 語った…」

お雪は ずっと 立ち上がると、縫いかけの 布ガ 落ちて、肩から はらりと半纏ガ<sup>はんてん</sup> 落ちた。下は 真っ白な<sup>ながいしょう</sup> 長衣裳だった。

「あれほど 語るなと 言うておいたに、なして 語った」

お雪は 恨めし氣に<sup>ゲ</sup> 言いながら、一足<sup>ひとあし</sup> 一足、男に 近づいた。髪の毛は、いつの間にか ほどけて、黒く ざらりと 肩に かかり、一足 一足、男に 近づいた。

雪女郎になってしまった<sup>おな</sup> 女ゴは、両手を 肩のほうに 出して、男の肩を<sup>つか</sup> 掴むと、顔を よせて、ふっと 息を 吹っかけべえとしては 横を 向き、吹っかけべえとしては 下を 向き、<sup>ろ</sup> 炉のところで 眠っている<sup>や</sup> 赤子たちを 見返っては、切な氣に<sup>ゲ</sup> 男を 見やった。男のほうは、お雪に されるガままに ぐらり ぐらりと 体を<sup>うづ</sup> 動かしておったガ、ふっと 何に 驚いたか、<sup>や</sup> 赤子ガ<sup>や</sup> 泣き声を 上げた。女ゴは ふいっと 男の肩を 離すと、<sup>や</sup> 赤子を 抱きあげて、だまって<sup>なに</sup> 何も 言わず、外に 出ていった。ぴゅーっと 雪ガ 吹っこんできて、男は はっと 夢から 覚めたように 立ちあがると、後を 追って 外に 出てみた。しかし、外は ただ 降る 雪ばかり。女ゴの<sup>おな</sup> 姿も<sup>すがた</sup> なく、<sup>や</sup> 赤子の 声も 聞こえなかったと。

それからというもの、そのあたりでは、雪女郎ガ 出ると 言われるようになっておった。今でも、そのあたりを 雪道を 歩いていく 人には、<sup>や</sup> 赤子を 抱いて、白い<sup>きもの</sup> 衣裳の すそを 引いた 女の姿や、<sup>すがた</sup> 去っていく 女の姿、誰も いない 雪の原の 中で、<sup>や</sup> 赤子の 泣き声を 聞くことも あるとよ。

かわいそうな 話よな。まことの人かも 知れぬものを。

(5) 福島浜通り方言「大悲山大蛇物語」※

※大悲山があるのは、南相馬市小高区（旧相馬郡小高町）。

今っから、九百年ぐれえ<sup>めえ</sup>前の<sup>なんぼくちょう</sup>南北朝時代、小高<sup>おだか</sup><sup>(1)</sup>を<sup>そう</sup>治めていた<sup>ま</sup>相馬<sup>みつねこう</sup>光胤公の時代の<sup>話</sup>である。

寒くて<sup>ふぶき</sup>吹雪の<sup>ふ</sup>吹いでる<sup>おだか</sup>小高の里さ、<sup>まなぐ</sup>眼の<sup>めえね</sup>めえね<sup>ぼう</sup>坊さんと<sup>ははおや</sup>母親<sup>ふたんじえ</sup>ガ<sup>ある</sup>二人で<sup>ある</sup>歩ってだど。

吹雪<sup>ふぶき</sup>強<sup>つよ</sup>ぐなって、こえくて<sup>(2)</sup>、こえくて、歩<sup>たお</sup>がんにやぐなって<sup>はあ、</sup>はあ、<sup>え</sup>しゃあねえ、<sup>め</sup>家んの<sup>たお</sup>前で<sup>たお</sup>倒っちまっただど。ふっと<sup>き</sup>氣い<sup>つくど、</sup>つくど、<sup>え</sup>ほの<sup>したち</sup>家の<sup>したち</sup>人達が、「さすけねーが<sup>(3)</sup>あ<sup>(3)</sup>」って<sup>しんべえ</sup>心配<sup>しんべえ</sup>そうに<sup>見</sup>見でだど。

坊さんの<sup>たまいつ</sup>名前は<sup>たまいつ</sup>玉都<sup>たまいつ</sup>って<sup>ゆ</sup>言<sup>ゆ</sup>っただど。

「わしは<sup>ふたんじえ</sup>岩手の出だ<sup>ふたんじえ</sup>がら、母親と<sup>ふたんじえ</sup>二人で<sup>ふたんじえ</sup>大悲山<sup>ふたんじえ</sup>さ<sup>ん</sup>行<sup>ん</sup>ぐべど<sup>ん</sup>思<sup>ん</sup>って<sup>りやく</sup>来<sup>りやく</sup>たんだけんじょ、大悲山の<sup>だいしさま</sup>大師<sup>まなぐ</sup>様は<sup>みみ</sup>眼<sup>みみ</sup>ど<sup>りやく</sup>耳<sup>りやく</sup>さ<sup>りやく</sup>ご<sup>りやく</sup>利益<sup>りやく</sup>ガ<sup>りやく</sup>ある<sup>りやく</sup>って<sup>き</sup>聞<sup>き</sup>いたげんちょ、大悲山は<sup>き</sup>ど<sup>き</sup>ごさ<sup>き</sup>あ<sup>き</sup>んだ<sup>き</sup>べ<sup>き</sup>」と<sup>したち</sup>村の<sup>したち</sup>人<sup>したち</sup>達<sup>したち</sup>さ<sup>したち</sup>聞<sup>したち</sup>いた<sup>したち</sup>だ<sup>したち</sup>ご、「こ<sup>よしな</sup>ごは<sup>さど</sup>吉<sup>さど</sup>名の<sup>さど</sup>里<sup>さど</sup>で、小高<sup>おだか</sup>だ<sup>おだか</sup>あ<sup>おだか</sup>」って<sup>おせ</sup>教<sup>おせ</sup>で<sup>おせ</sup>く<sup>おせ</sup>ち<sup>おせ</sup>ゃ<sup>おせ</sup>だ<sup>おせ</sup>ど。「あ<sup>おせ</sup>あ、<sup>おせ</sup>大悲山<sup>おせ</sup>は<sup>おせ</sup>あ<sup>おせ</sup>そ<sup>おせ</sup>ご<sup>おせ</sup>の<sup>おせ</sup>ち<sup>おせ</sup>ん<sup>おせ</sup>ち<sup>おせ</sup>」<sup>(4)</sup>と<sup>おせ</sup>っ<sup>おせ</sup>こ<sup>おせ</sup>し<sup>おせ</sup>て<sup>おせ</sup>」<sup>(5)</sup>、杉山<sup>すぎやま</sup>ん<sup>すぎやま</sup>と<sup>すぎやま</sup>ご<sup>すぎやま</sup>さ<sup>すぎやま</sup>行<sup>すぎやま</sup>ぐ<sup>すぎやま</sup>ど<sup>すぎやま</sup>あ<sup>すぎやま</sup>ん<sup>すぎやま</sup>だ<sup>すぎやま</sup>あ<sup>すぎやま</sup>」って<sup>おせ</sup>教<sup>おせ</sup>で<sup>おせ</sup>く<sup>おせ</sup>ち<sup>おせ</sup>ゃ<sup>おせ</sup>だ<sup>おせ</sup>ど。

ほうして、玉都<sup>たまいつ</sup>の<sup>たまいつ</sup>話<sup>たまいつ</sup>を<sup>たまいつ</sup>聞<sup>たまいつ</sup>いだ<sup>たまいつ</sup>吉<sup>よしな</sup>名<sup>よしな</sup>の<sup>よしな</sup>人<sup>よしな</sup>達<sup>よしな</sup>は、「ぼ<sup>したち</sup>っ<sup>したち</sup>こ<sup>したち</sup>ち<sup>したち</sup>で<sup>したち</sup>だ<sup>したち</sup>」<sup>(6)</sup>お<sup>したち</sup>堂<sup>したち</sup>な<sup>したち</sup>お<sup>したち</sup>し<sup>したち</sup>て<sup>したち</sup>く<sup>したち</sup>い<sup>したち</sup>っ<sup>したち</sup>か<sup>したち</sup>ら<sup>したち</sup>、ほ<sup>ふたんじえ</sup>ご<sup>ふたんじえ</sup>さ<sup>ふたんじえ</sup>二<sup>ふたんじえ</sup>人<sup>ふたんじえ</sup>で<sup>ふたんじえ</sup>住<sup>ふたんじえ</sup>ん<sup>ふたんじえ</sup>だ<sup>ふたんじえ</sup>ら<sup>ふたんじえ</sup>い<sup>ふたんじえ</sup>い<sup>ふたんじえ</sup>べ<sup>ふたんじえ</sup>」って<sup>ゆ</sup>言<sup>ゆ</sup>って<sup>ゆ</sup>く<sup>ゆ</sup>ち<sup>ゆ</sup>ゃ<sup>ゆ</sup>だ<sup>ゆ</sup>ど。

ほ<sup>たまいつ</sup>れ<sup>たまいつ</sup>が<sup>たまいつ</sup>ら<sup>たまいつ</sup>、玉都<sup>たまいつ</sup>は<sup>たまいつ</sup>二<sup>ふたんじえ</sup>人<sup>ふたんじえ</sup>で<sup>ふたんじえ</sup>、母<sup>ふたんじえ</sup>親<sup>ふたんじえ</sup>と<sup>ふたんじえ</sup>二<sup>ふたんじえ</sup>人<sup>ふたんじえ</sup>で<sup>ふたんじえ</sup>ほ<sup>ふたんじえ</sup>ご<sup>ふたんじえ</sup>さ<sup>ふたんじえ</sup>住<sup>ふたんじえ</sup>ん<sup>ふたんじえ</sup>で<sup>ふたんじえ</sup>、晩<sup>ばん</sup>方<sup>かた</sup>お<sup>ばんかた</sup>へ<sup>ばんかた</sup>ら<sup>ばんかた</sup>っ<sup>ばんかた</sup>て<sup>ばんかた</sup>が<sup>ばんかた</sup>ら<sup>ばんかた</sup>」<sup>(7)</sup>、琵琶<sup>つづみ</sup>持<sup>つづみ</sup>っ<sup>つづみ</sup>て<sup>つづみ</sup>、山<sup>つづみ</sup>と<sup>つづみ</sup>っ<sup>つづみ</sup>こ<sup>つづみ</sup>し<sup>つづみ</sup>て<sup>つづみ</sup>、大<sup>だい</sup>悲<sup>ひ</sup>山<sup>さん</sup>さ<sup>さん</sup>行<sup>さん</sup>っ<sup>さん</sup>て<sup>さん</sup>、堤<sup>つづみ</sup>の<sup>つづみ</sup>わ<sup>つづみ</sup>き<sup>つづみ</sup>で<sup>つづみ</sup>、ベ<sup>べ</sup>ベン<sup>べん</sup>、ベ<sup>べ</sup>ベン<sup>べん</sup>ベ<sup>べ</sup>ン<sup>べん</sup>と<sup>べん</sup>琵琶<sup>ひ</sup>弾<sup>ひ</sup>ぎ<sup>ひ</sup>な<sup>ひ</sup>が<sup>ひ</sup>ら<sup>ひ</sup>、「眼<sup>まなぐ</sup>治<sup>まなぐ</sup>し<sup>まなぐ</sup>て<sup>まなぐ</sup>く<sup>まなぐ</sup>い<sup>まなぐ</sup>ろ<sup>まなぐ</sup>、早<sup>まなぐ</sup>ぐ<sup>まなぐ</sup>眼<sup>まなぐ</sup>治<sup>まなぐ</sup>る<sup>まなぐ</sup>よ<sup>まなぐ</sup>う<sup>まなぐ</sup>に<sup>まなぐ</sup>し<sup>まなぐ</sup>て<sup>まなぐ</sup>く<sup>まなぐ</sup>い<sup>まなぐ</sup>ろ<sup>まなぐ</sup>」と<sup>がん</sup>願<sup>がん</sup>か<sup>がん</sup>け<sup>がん</sup>で<sup>がん</sup>だ<sup>がん</sup>ど。

ほうして<sup>なんにち</sup>何<sup>なんにち</sup>日<sup>なんにち</sup>も<sup>なんにち</sup>何<sup>なんにち</sup>日<sup>なんにち</sup>も<sup>なんにち</sup>た<sup>なんにち</sup>っ<sup>なんにち</sup>て<sup>なんにち</sup>、い<sup>まん</sup>よ<sup>まん</sup>い<sup>まん</sup>よ<sup>まん</sup>満<sup>まん</sup>願<sup>がん</sup>の<sup>まん</sup>日<sup>がん</sup>が<sup>まん</sup>来<sup>まん</sup>た<sup>まん</sup>。

玉都<sup>たまいつ</sup>は、「は<sup>たまいつ</sup>一<sup>たまいつ</sup>で<sup>たまいつ</sup>一<sup>たまいつ</sup>、帰<sup>けえ</sup>っ<sup>けえ</sup>か<sup>けえ</sup>な<sup>けえ</sup>」ど<sup>けえ</sup>立<sup>たまいつ</sup>っ<sup>たまいつ</sup>た<sup>たまいつ</sup>ど<sup>たまいつ</sup>ぎ<sup>たまいつ</sup>、ど<sup>たまいつ</sup>ご<sup>たまいつ</sup>が<sup>たまいつ</sup>ら<sup>たまいつ</sup>が<sup>たまいつ</sup>す<sup>たまいつ</sup>一<sup>たまいつ</sup>と<sup>たまいつ</sup>若<sup>わけ</sup>え<sup>わけ</sup>侍<sup>わけ</sup>出<sup>わけ</sup>で<sup>わけ</sup>き<sup>わけ</sup>て、「こ<sup>まい</sup>れ<sup>まい</sup>、お<sup>まい</sup>坊<sup>まい</sup>、毎<sup>まい</sup>晩<sup>ばん</sup>方<sup>かた</sup>、い<sup>まい</sup>い<sup>まい</sup>音<sup>ね</sup>色<sup>いろ</sup>の<sup>ねいろ</sup>琵琶<sup>ねいろ</sup>聞<sup>ねいろ</sup>か<sup>ねいろ</sup>せ<sup>ねいろ</sup>て<sup>ねいろ</sup>も<sup>ねいろ</sup>ら<sup>ねいろ</sup>っ<sup>ねいろ</sup>て<sup>ねいろ</sup>だ<sup>ねいろ</sup>げ<sup>ねいろ</sup>ん<sup>ねいろ</sup>ち<sup>ねいろ</sup>ょ、あ<sup>めえ</sup>し<sup>めえ</sup>た<sup>めえ</sup>が<sup>めえ</sup>ら<sup>めえ</sup>聞<sup>めえ</sup>が<sup>めえ</sup>ん<sup>めえ</sup>に<sup>めえ</sup>や<sup>めえ</sup>ぐ<sup>めえ</sup>な<sup>めえ</sup>っ<sup>めえ</sup>た<sup>めえ</sup>ら、寂<sup>めえ</sup>し<sup>めえ</sup>な<sup>めえ</sup>一<sup>めえ</sup>。お<sup>めえ</sup>前<sup>めえ</sup>さ<sup>めえ</sup>え<sup>めえ</sup>か<sup>めえ</sup>ま<sup>めえ</sup>あ<sup>めえ</sup>ね<sup>めえ</sup>が<sup>めえ</sup>っ<sup>めえ</sup>た<sup>めえ</sup>ら、あ<sup>めえ</sup>ど<sup>めえ</sup>一<sup>めえ</sup>回<sup>めえ</sup>聞<sup>めえ</sup>か<sup>めえ</sup>せ<sup>めえ</sup>て<sup>めえ</sup>く<sup>めえ</sup>ん<sup>めえ</sup>に<sup>めえ</sup>え<sup>めえ</sup>が<sup>めえ</sup>」って<sup>ゆ</sup>言<sup>ゆ</sup>っ<sup>ゆ</sup>た<sup>ゆ</sup>だ<sup>ゆ</sup>ど。

玉都<sup>たまいつ</sup>は、「ほ<sup>たまいつ</sup>ん<sup>たまいつ</sup>な<sup>たまいつ</sup>ご<sup>たまいつ</sup>ど<sup>たまいつ</sup>し<sup>たまいつ</sup>っ<sup>たまいつ</sup>ち<sup>たまいつ</sup>ゃ<sup>たまいつ</sup>も<sup>たまいつ</sup>ん<sup>たまいつ</sup>だ<sup>たまいつ</sup>」<sup>(8)</sup>、待<sup>ま</sup>っ<sup>ま</sup>ち<sup>ま</sup>ろ<sup>ま</sup>」って<sup>ゆ</sup>言<sup>ゆ</sup>っ<sup>ゆ</sup>て<sup>ゆ</sup>、ま<sup>たまいつ</sup>だ<sup>たまいつ</sup>堤<sup>つづみ</sup>さ<sup>つづみ</sup>座<sup>つづみ</sup>っ<sup>つづみ</sup>て<sup>つづみ</sup>琵琶<sup>つづみ</sup>弾<sup>つづみ</sup>い<sup>つづみ</sup>だ<sup>つづみ</sup>ど。

侍<sup>れい</sup>は、「い<sup>れい</sup>や<sup>れい</sup>ー、い<sup>れい</sup>が<sup>れい</sup>っ<sup>れい</sup>た<sup>れい</sup>、い<sup>れい</sup>が<sup>れい</sup>っ<sup>れい</sup>た<sup>れい</sup>、大<sup>れい</sup>し<sup>れい</sup>た<sup>れい</sup>も<sup>れい</sup>ん<sup>れい</sup>だ<sup>れい</sup>。ち<sup>れい</sup>ん<sup>れい</sup>と<sup>れい</sup>礼<sup>れい</sup>し<sup>れい</sup>なん<sup>れい</sup>ね<sup>れい</sup>ば<sup>れい</sup>なん<sup>れい</sup>ね<sup>れい</sup>げ<sup>れい</sup>ん<sup>れい</sup>ち<sup>れい</sup>ょ、わ<sup>れい</sup>し<sup>れい</sup>は<sup>れい</sup>な<sup>れい</sup>あ、今<sup>れい</sup>、人<sup>れい</sup>間<sup>れい</sup>に<sup>れい</sup>化<sup>れい</sup>け<sup>れい</sup>で<sup>れい</sup>ん<sup>れい</sup>だ<sup>れい</sup>け<sup>れい</sup>ん<sup>れい</sup>ち<sup>れい</sup>ょ

も、実は <sup>じつ</sup> ことの <sup>つづみ</sup> 堤さ <sup>だいいじゃ</sup> いる 大蛇だ」って <sup>ゆ</sup> 言ったど。玉都は <sup>たまいつ</sup> もうぶったまげだ。

「わしは <sup>ふたば</sup> 昔、双葉の <sup>ちゅうぜんじ</sup> 仲禅寺<sup>(9)</sup> の <sup>つづみ</sup> 堤がら、<sup>がが</sup> 嬢と <sup>ふたんじえ</sup> 二人で <sup>ゆ</sup> 来て、この <sup>つづみ</sup> 堤さ <sup>からだ</sup> いだげんちょ、体が <sup>な</sup> ずんなぐ<sup>(10)</sup> なりすぎて、いらんにえぐなっただ <sup>な</sup> は一。んじゃがら、あしたがら <sup>なのかなのぼん</sup> 七日七晩 <sup>おだか</sup> 雨 <sup>おだか</sup> 降らせで、小高の <sup>ななりしほう</sup> 七里四方 <sup>どろつづみ</sup> みんな 泥堤にしっかりと <sup>ゆ</sup> 思ってた。んだげんちょ、お坊には <sup>な</sup> 毎晩 <sup>な</sup> 琵琶 <sup>な</sup> 聞かせてもらって <sup>ゆ</sup> 助けっから」って <sup>ゆ</sup> 言ったど。  
「だがな、このごどは、誰さも <sup>ゆ</sup> 言うなよ。もしかして <sup>ゆ</sup> 言ったら、ほんどぎは <sup>や</sup> 八つ裂きにして <sup>ぎ</sup> 殺すど。ほうして <sup>おだか</sup> 小高ガ <sup>どろつづみ</sup> 泥堤になっただぎは、お坊の <sup>まなぐ</sup> 眼も <sup>め</sup> 見えるように <sup>おだか</sup> してやるし、小高の <sup>おだか</sup> 殿様に <sup>つづみ</sup> してくいっから」て <sup>ゆ</sup> 言って、ザザー、ズブズブズブズブド <sup>つづみ</sup> 堤さ <sup>ゆ</sup> むぐって <sup>ゆ</sup> ったど。

<sup>たまいつ</sup> 玉都は、「大蛇も <sup>な</sup> おっかねがったげんちょ、こいつも <sup>な</sup> 大悲山の <sup>な</sup> 薬師様の <sup>りやく</sup> ご利益に <sup>まなぐ</sup> ちゲえねえ。眼 <sup>な</sup> 治って、殿様に <sup>な</sup> ならっちやらいいなー」って <sup>な</sup> 喜んだ。ほんどぎだった。どっからが、<sup>にお</sup> いい匂いして <sup>おなご</sup> 女の声ガ <sup>な</sup> 聞こえだ。

「ほごで、二人で <sup>ふたんじえ</sup> 話していんの <sup>つづみ</sup> 聞いたげんちょ、堤になったら <sup>おだか</sup> 小高の <sup>したち</sup> 人達は <sup>な</sup> なじよになんだ<sup>(11)</sup>」って <sup>ゆ</sup> 言われた。

<sup>たまいつ</sup> 玉都は <sup>な</sup> はっと <sup>わたし</sup> 我に <sup>おだか</sup> 返って、「私は <sup>したち</sup> 小高の <sup>したち</sup> 人達に <sup>な</sup> 助けってもらったのに、<sup>わあ</sup> 我のごどしか <sup>かんげ</sup> 考えねえで、<sup>ほどげ</sup> 仏の道に <sup>はず</sup> 外れる」って <sup>ゆ</sup> 言ったど。<sup>おなご</sup> 女は、「<sup>ほどげ</sup> ほんじこそ <sup>つか</sup> 仏に <sup>ぼう</sup> 仕える <sup>おだか</sup> お坊じゃ。小高の <sup>したち</sup> 人達のごとを <sup>かんが</sup> 考えんなら、あの <sup>わり</sup> 悪い <sup>だいいじゃ</sup> 大蛇を <sup>な</sup> やっつけろ。蛇は <sup>な</sup> 鉄ガ <sup>な</sup> だいきしえだがら、堤の <sup>つづみ</sup> ぐるりもつけ<sup>(12)</sup> に <sup>くぎ</sup> 鉄の釘 <sup>ぶ</sup> 打で」って <sup>ゆ</sup> 言った。

<sup>たまいつ</sup> 玉都は、「<sup>まなぐ</sup> 眼 <sup>な</sup> 治って <sup>な</sup> 殿様に <sup>な</sup> ならいるなんて、なんで <sup>な</sup> しょうしい<sup>(13)</sup> こと <sup>かんが</sup> 考えでたんだべ。わしが <sup>おなご</sup> 犠牲になれば <sup>な</sup> いいんだべ」って <sup>ゆ</sup> 言った途端、女は <sup>な</sup> すーっと <sup>な</sup> いなくなっただ。

「今の人 <sup>な</sup> は <sup>な</sup> 薬師様の <sup>かんが</sup> 観音様に <sup>な</sup> ちゲえねえ。なんと <sup>な</sup> わしは <sup>な</sup> しょうしいごどを <sup>かんが</sup> 考えでだんだべ。こいつは <sup>な</sup> 大したことに <sup>な</sup> なっちまった。  
<sup>はい</sup> 早く <sup>な</sup> 城さ <sup>な</sup> 行って、殿様に <sup>な</sup> 知らせねばなんね」って <sup>ゆ</sup> 言って、城さは <sup>な</sup> ねだ<sup>(14)</sup> ど。城さ <sup>な</sup> 着いで、殿様さ <sup>な</sup> 今までの <sup>な</sup> わげ <sup>な</sup> 話して、「<sup>はい</sup> 早く、大悲山さ <sup>な</sup> 行ってくいろ」って <sup>ゆ</sup> 言ったど。「<sup>な</sup> ほんじねっか、泥の <sup>つづみ</sup> 堤に <sup>な</sup> なっちまあ」

殿様は、「<sup>な</sup> なに <sup>な</sup> へでなし<sup>(15)</sup>、かだってんだ。ほだごと、誰も <sup>な</sup> ほんにしねえ<sup>(16)</sup> わ。気でも <sup>な</sup> 狂ったのが」って <sup>ゆ</sup> 言った。<sup>たまいつ</sup> 玉都は、「わしは、こ

のごど 喋<sup>しゃべ</sup>ったどぎ、ただちに 八<sup>や</sup>つ裂<sup>さ</sup>きにされて 大蛇に 殺されっち  
まあ」ど、ほんこな 顔して 言<sup>ゆ</sup>ったもんだがら、ほごで 殿様は、「こ  
れは 大したごどに なっちまった」

家来ら みんな 呼<sup>よ</sup>ばって、「お前<sup>めえ</sup>ら、小高<sup>おだかじゅう</sup>中の 鍛冶屋<sup>んま</sup>さ 行<sup>ん</sup>って、  
鉄<sup>くぎ</sup>の釘<sup>つづみ</sup> 作<sup>つく</sup>らせろ」ど 命<sup>めい</sup>令<sup>れい</sup>した。「あどの 家来<sup>んま</sup>は 馬<sup>うま</sup>さ 乗<sup>のり</sup>って、大  
悲山<sup>たいまいつ</sup>さ、早<sup>はや</sup>ぐ 行<sup>い</sup>げ」って 言<sup>ゆ</sup>ったど。ほれを 見<sup>み</sup>だ 玉都<sup>たまいつ</sup>は、「あー い  
がった いがった。何<sup>なん</sup>と わしは 浅<sup>あ</sup>はかだつたんだ。今まで 生<sup>な</sup>まっち  
えきで このがだ、こんな いい気持ちに なったごとは ねえがった」  
って 思<sup>おも</sup>いながら 城<sup>で</sup> 出<sup>で</sup>で、小高<sup>おだか</sup>川の 橋<sup>が</sup>まで 来<sup>あ</sup>たどぎ、空<sup>そら</sup>ガ 真<sup>ま</sup>っ  
黒<sup>くろ</sup>に なったど思<sup>おも</sup>ったら、ザザザザザー、ギーッ と 竜<sup>りゅう</sup> 出<sup>で</sup>てきたど。  
玉都<sup>たまいつ</sup>を 空<sup>そら</sup>さ せでって<sup>(17)</sup>、ただきのめした。玉都<sup>たまいつ</sup>は のだばっだ<sup>(18)</sup> ま  
んま 死<sup>し</sup>んじまって、琵琶<sup>ひば</sup>は ばらばらに ぼっこちまっだど。

ほれ 見<sup>み</sup>でだ 殿様<sup>だいさま</sup>らは、「早<sup>はや</sup>ぐ 大<sup>だい</sup>悲山<sup>ひ</sup>さ 行<sup>い</sup>ぐべ」って 馬<sup>うま</sup> 走<sup>はし</sup>ら  
せだど。家来<sup>けらい</sup>らは、鍛冶屋<sup>かじや</sup>ガ いぎなし<sup>(19)</sup> 作<sup>つく</sup>ってきた 鉄<sup>くぎ</sup>の釘<sup>つづみ</sup>を 家  
来<sup>けらい</sup>らに 持<sup>も</sup>ってったど。ほうして 家来<sup>けらい</sup>らは、堤<sup>つづみ</sup>の ぐるりもっけに バ  
ンバン 鉄<sup>くぎ</sup>の釘<sup>つづみ</sup> ぶっでっだ。ぶち終わ<sup>おわり</sup>ったどぎ、いなぴかりガして、雷<sup>らい</sup>様<sup>さま</sup>  
ゴロゴローツと 鳴<sup>なり</sup>ったど 思<sup>おも</sup>ったら、ザバーっと いぎなり ずんねー  
竜<sup>りゅう</sup> 出<sup>で</sup>できて、「にしゃら<sup>(20)</sup>、なに か<sup>か</sup>す語<sup>かた</sup>ってんだー<sup>(21)</sup>、にしゃらの  
命<sup>いのち</sup>は ねえどー」って 向<sup>むか</sup>がってきた。家来<sup>けらい</sup>らは 弓矢<sup>きうし</sup> ぶったしたり、  
刀<sup>かたな</sup>で 切<sup>き</sup>ったりしたただげんちょ、ながなが 倒<sup>たお</sup>んにがった。

だげんちょも、ほのうち だんだん 鉄<sup>くぎ</sup>の毒<sup>どく</sup> まあって、がおって<sup>(22)</sup>  
きた。ほんどぎ、「背<sup>せ</sup>中<sup>な</sup>さ のっこいろー<sup>(23)</sup>」ど 言<sup>ゆ</sup>って、きしゃ きい  
た<sup>(24)</sup> 家来<sup>けらい</sup>らは 頭<sup>あたま</sup>さ 上<sup>あ</sup>って 角<sup>つの</sup> ぶった切<sup>き</sup>ったど。

ほうして、耳<sup>みみ</sup>ど 歯<sup>は</sup>も ぶった切<sup>き</sup>った。あとの 人<sup>ひと</sup>達<sup>たち</sup>は 刀<sup>かたな</sup> ぶったし  
たど。竜<sup>りゅう</sup>は いきなし がおってきて、やっどごさつとご 天<sup>のぼ</sup>さ 上<sup>のぼ</sup>って  
った。ほんどぎ、まだ ずんねー 竜<sup>りゅう</sup>ガ ザバーっと 出<sup>で</sup>てきて、あど 追<sup>お</sup>  
って、二人<sup>ふたに</sup>で 天<sup>のぼ</sup>さ 昇<sup>のぼ</sup>ってったど。家来<sup>けらい</sup>ら、「あいやー、二匹<sup>にひき</sup>も いだ  
のか はあ」と たまげだど はあ。

殿様<sup>だいさま</sup>は、「玉都<sup>たまいつ</sup>の おかゲで、小高<sup>おだか</sup>の 里<sup>さと</sup>ど 小高<sup>おだか</sup>の 人<sup>ひと</sup>達<sup>たち</sup>を 守<sup>まも</sup>るご  
どガできた。いがった、いがった」と 言<sup>ゆ</sup>って、吉名<sup>よしな</sup>の里<sup>さと</sup>に 玉都<sup>たまいつ</sup>塚<sup>づか</sup>とゆ  
う お墓<sup>はか</sup>を 作<sup>つく</sup>って、小高<sup>おだか</sup>の 人<sup>ひと</sup>達<sup>たち</sup>は みんな お参<sup>まゐ</sup>りして、天<sup>のぼ</sup>さ 向<sup>むか</sup>  
って 手<sup>て</sup>え 合<sup>あ</sup>わせだど。

角<sup>つの</sup> ほろった<sup>(25)</sup> どごガ 「角部内<sup>かくぶない</sup>」(つのぼうじ)、耳<sup>みみ</sup> ほろったどごガ  
「耳谷<sup>みみげ</sup>」(みみげえ)、歯<sup>は</sup> ほろったどごガ 「女場<sup>おなば</sup>」(おなば)、と 言<sup>い</sup>う



部落名で 今も 残ってるし、琵琶 ぼっこちゃどごガ 「琵琶橋」として、今も 小高川に 残ってんだあ。

こんじえ、おしめえ

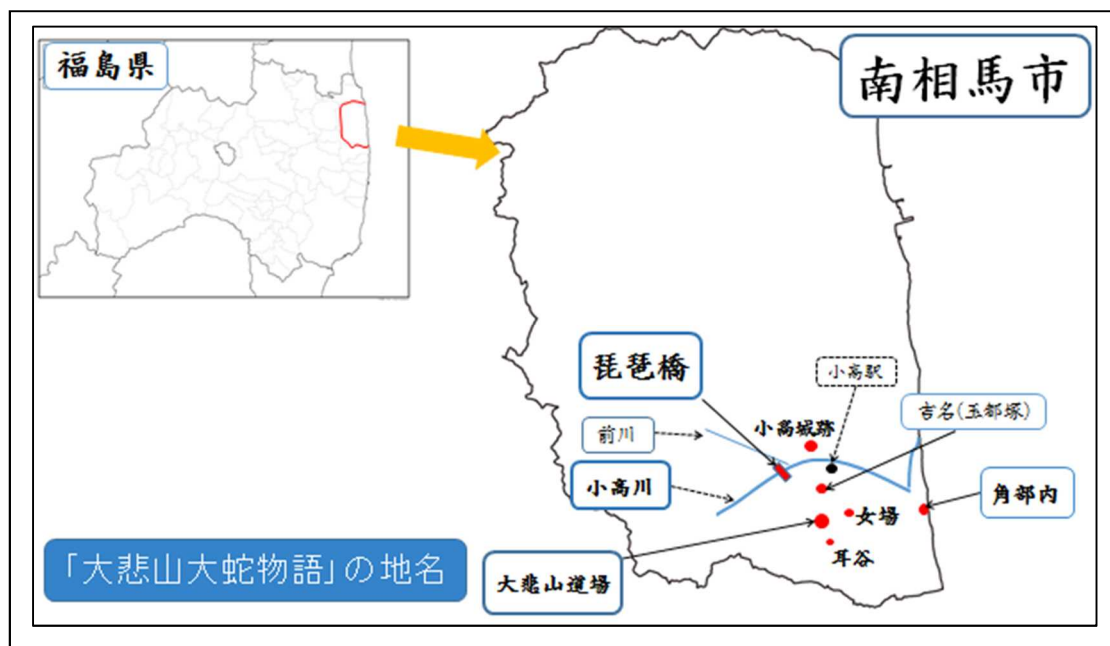
《注》

- (1)小高(おだか) 福島県南相馬市(旧相馬郡)の地名。
- (2)こえくて 疲れて。
- (3)さすけねーがあ 差支えないか。大丈夫か。
- (4)ちんち 小さい。
- (5)とっこして 越して。通り越して。
- (6)ぼっこちでだ 壊れていた。
- (7)おへらってがら 陽が沈んでから。
- (8)しっちゃもんだ たやすいことだ。それほどのことではない。たかが知れたことだ。
- (9)仲禅寺(ちゅうぜんじ) 福島県双葉郡浪江町にある曹洞宗の寺院。近くに池がある。
- (10)ずんなぐ 大きく。『相馬方言考 改訂版』には、「ヅネエー」の見出しで、次のように意味・説明が載っている。  
ヅネエー(形) 大きい。農村語。中村ではオッケー、オッキー(大きい)。  
「ヅ」は図太い、図抜けるの「図」と同じか。親をとほ(貫)した親不孝松もみんな一しょにヅナクなる。(民謡) (同書 一三七ページ)
- (11)なじょになんだ どのようになるのだ。どうなるのだ。
- (12)ぐるりもつけ 堤(池)の周囲。堤の周囲の土手。
- (13)しょうしい 恥ずかしい。
- (14)はねだ 駆けた。走って行った。
- (15)へでなし たわけ。阿呆。
- (16)ほんにしねえ 本気にする。信じる。
- (17)せでって 連れてって。
- (18)のだばっだ 転がって横たわった。腹を地につけて伏す。
- (19)いぎなし とてもたくさん。
- (20)にしゃら お前(ら)。貴様(ら)。『相馬方言考』(新妻三男著、p.146)によれば、「ニシラの「ら」は必ずしも複数をささず。」とある。
- (21)かす語(かだ)ってんだー 小癪なことを言っているのだ。つまらないことを言っているのだ。
- (22)がおって 弱って横になる。へこたれて横になる。
- (23)のっこいろー 「のっこいる」(乗り越える)の命令形。ここでは、「乗れ」の意。

(24) きしゃ きいた 気が回る。注意が行き届いた。

(25) ほろった 落ちた。落っこちた。

《参考》「大悲山大蛇物語」ゆかりの場所



(6) 茨城弁 (茨城町) 「カップレ餅」※

【地元、茨城町に伝わる、飯沼地区に伝わるお話なんですが、地元の方から聞き書きしたお話です。】

むかし、<sup>ひぬまがわ</sup>潤沼川<sup>(1)</sup>にかかる <sup>いいぬま</sup>飯沼橋の近くに、<sup>かしまや</sup>鹿島屋つつう 造り酒屋、あったんだと。

ここいらでは、[十二月の] <sup>ついたち</sup>一日んなるつつうと <sup>もち</sup>餅を搗くつつう 慣わしが あったんだ。

ある年、とても ひどい日照りで、畑のもんも 田んぼのもんも、ろくに とんにやかった<sup>(2)</sup>んだと。んでも、旧暦の十二月一日に なるつつうと、鹿島屋では どうか 餅つき やつことができたんだと。

土間で 男ていら<sup>(3)</sup>が 餅 ついてっと、いづのまにか やせっこけた ちんちええ 河童 やってきて、臼の周り ぐるぐるぐるぐる、回ってんだと。餅つく <sup>もち</sup>男ていら、河童が じゃまで じゃまで、しかたがながったんだと。そんで、番頭さん いじやけて、

「じゃまだ、じゃまだ。いしやれ<sup>(4)</sup>」っ言っても、河童 いっこうに いしやんね

えんだと。

んで、だんなさん、

「ほうだ、餅<sup>もち</sup>やれば 帰<sup>けえ</sup>っぺ。餅<sup>もち</sup>やれ」 って言<sup>ゆ</sup>ったと。 こんで、男ていら、  
搗きあがったばかりの餅<sup>もち</sup>、河童に やっと、河童 喜んで 帰<sup>けえ</sup>ってったと。

いぐ日<sup>にち</sup>がたった ある日、河童のおとつあま やって来<sup>き</sup>っつと、頭<sup>あだま</sup> さげて、  
「そのお、この寒さで みんな 霜<sup>しも</sup>げで<sup>(5)</sup>、なんにも 食<sup>く</sup>うもんが ねえ時に、餅<sup>もち</sup>  
恵<sup>めぐ</sup>んでいただいて、ほんとに ありがたかった。河童の身<sup>み</sup>なんで 何<sup>なん</sup>にも お礼<sup>れい</sup> で  
きねえけど、これから ここいらのていらが、水難に 遭<sup>あ</sup>わねえようにつてから 必<sup>かならず</sup>  
ず お守<sup>まも</sup>りします」 そう言<sup>ゆ</sup>うと、帰<sup>けえ</sup>ってったんだと。

それから ここいらでは、川さ つっぺえって<sup>(6)</sup> おぼれることも ねえくなくて、  
(河童の 言<sup>い</sup>ったとおりの) 水難に 遭<sup>あ</sup>うことが なかったんだと。

こんで、だんなさん、

「こりゃあ、この間の河童<sup>こないだ</sup>が ここの村<sup>むら</sup>のていら 守<sup>まも</sup>ってくれてんだ。 そうだ あ  
の河童のこと、お祀<sup>まつ</sup>りすっぺ」 っ言<sup>い</sup>って、伏見<sup>ふしみ</sup>の お稲荷<sup>いなり</sup>さんから 河童稲荷<sup>かどういなり</sup>つつ  
う お札<sup>ふだ</sup> 迎<sup>むか</sup>えて、祀<sup>まつ</sup>りこんだんだと。

今<sup>いま</sup>でも (旧暦<sup>きうれき</sup>の) 十二月<sup>じふにがつ</sup>の一日<sup>いちにち</sup>にはなあ、餅<sup>もち</sup> 搗<sup>う</sup>いて、餅<sup>もち</sup> 川<sup>かわ</sup>さ ポイッ<sup>ぽい</sup>と か  
っぽって<sup>(7)</sup>、水難に 遭<sup>あ</sup>わねえようにつて、お供<sup>とも</sup>えすんだ。

んで、河童にあげる 餅<sup>もち</sup>だから、カッパレ餅<sup>もち</sup>って 言<sup>い</sup>うんだと。

おしめえ。

#### 《注》

(1) 涸沼川 茨城県笠間市から茨城町を流れ、涸沼に流れ込む川。

(2) とんにやかった 取れなかった。

(3) 男ていら 男の人たち。男の人。

(4) いしやれ どけ。どいている。

(5) 霜<sup>しも</sup>げちゃって 霜<sup>しも</sup>が降<sup>ふ</sup>って作物<sup>さくはく</sup>がだめになってしまって。

(6) つっぺえって 落<sup>お</sup>ちて。入<sup>い</sup>って。

(7) かっぽって ほうり投<sup>な</sup>げて。投<sup>な</sup>げて。

※七絃<sup>しちげん</sup>の会<sup>かい</sup>が、茨城県東茨城郡茨城町の東ヶ崎<sup>あづまがさき</sup>家の伝承<sup>でんしょう</sup>(採訪<sup>さいほう</sup>日、2014年3月9日)をもち  
とに再話<sup>さいわ</sup>したもの。なお、カッパレ餅<sup>もち</sup>の行事<sup>こうじ</sup>については、「第四部 茨城の民俗」を参照  
されたい。

#### (7) 茨城弁(茨城町)「ほおどしの頭」

むかし、お公家<sup>くげ</sup>さまが 死<sup>し</sup>んちゃって、おつかさまと たった一人<sup>ひとり</sup>の 娘<sup>むすめ</sup>が 残<sup>のこ</sup>さ

れたんだと。そのうち、なんもかんも なくしちゃって、どうしようもなくなって、ある殿さまのところに 親子して 奉公することに なったんだと。奉公しているうちに、おっかさまも 死んちゃった。おっかさま 死ぐときに、娘に 桐の箱に 入れた 金銀づくりの 宝もん 渡して、

「これは、おとつあまの 遺言の 宝もんだあ。どんなことが あっても 放しては なんねえ。お前が 人になつとき<sup>(1)</sup>、持っていぐんだよ」って言ったと。

娘のまわりには、下働きだの 番頭だの 何人も 働いてたんだと。桐の箱など お置いとくどこ どこにも ねえんだと。それで 娘は 仕方なくて 流しっぱた<sup>(2)</sup>の 柱の元 穴 掘って、そこに 桐の箱 のめといたんだと<sup>(3)</sup>。

それから、娘は 毎日 すっかり かきまし<sup>(4)</sup>して、膳だて 椀だて<sup>(5)</sup>して、殿さまや 奉公人に 食べらせたんだと。それから 顔 洗って、柱さ 手 合わせて、毎日毎日、揉んでいたんだと。

奉公人ら それ見て、

「あの 飯炊き娘、毎日 柱の元さ 手 合わせて 揉んでんだけど、何か 祀ってあんのかな。娘が いねえときに、掘ってみっぺ」つつって、その柱の元を 掘ってみたんだと。すると、桐の箱が 出てきて、その中から 金銀づくりの 宝物が 入っていたんだと。奉公人ら、

「この 宝もん、売っちゃまうべ」って、みんなで その 宝もん 売っぱらって、山分けして 使っちゃったんだと。流しのところに ほおどしの頭が あったんで、それ 桐の箱に 入れて、また もとどおり のめといたんだと。

娘 それ 知らねえから、相変わらず 一所懸命 柱に 手 合わせて、揉んでいたんだ。それから 何年も何年も 揉んでいたんだと。奉公人ら それ 見て、くすくす 笑ってたんだ。

娘、流しのところに 小皿 下げといて、流れてくる食べもん ためといたんだと。それ きれえに 洗って、食べ食べしたんだ。

ある日 それを 見て 殿さまが、

「はあ、たいした 女中だ。いつまで 使っても けむてえ顔 ひとつ したことねえ。棄てるもんも 拾って 食べて、おこうこは きっぱち<sup>(6)</sup>しか 食べねんだちから、こりゃ、息子の嫁にしても さしつかえねえ」つうわけで、娘ごと、息子の 嫁にしたんだと。

娘は、死んだ おっかさまに、「人になつとき 持ってぐんだよ」って言われたんで、柱の元 掘って、桐の箱 開けてみたんだと。そしたら そこには ほおどしの頭しか 入ってなかったんだ。それから、その 流しの元 掘ったの、だれが 掘ったんだ かれが 掘ったんだって 大さわぎになって、殿さま、宝もん 売って 使っ

ちまった 奉公人らこと、首にしちまったんだと。

娘は それから、奥<sup>おく</sup>さまに おさまって いつまでも しあわせに 暮<sup>く</sup>らしたということだ。

こんじ、おしめえ

《注》

- (1) 人になつとき 嫁にいくとき。
- (2) 流しっぱた【流しっ端】 台所。井戸端。
- (3) のめといたんだと 埋めておいたんだと。
- (4) かきまし【掻き回し】 お勝手仕事。炊事。
- (5) 膳だて椀だて (客を招いた時の) 食事の準備。
- (6) きっぱち 切れ端。ここでは、漬物の切れ端

【「ほおどし」というのは、茨城<sup>かた</sup>の方はわかると思うんですけど、イワシを干したもののなんですね。それで、よくお店にワラでつながって売ってると思うんですけど、目を刺したものが「めざし」で、エラのところを刺したのが「ほおどし」、頬を刺すので「ほおどし」と言うそうです。】

(8) 茨城弁(那珂市)「額田のたつつあい話 欲<sup>よぐ</sup>がねえ」

【那珂市には、「額田のたつつあい話」というお話がたくさんあります。これは、おどけ者話とかほら吹き話、あるいはあわて者話などと言われるお話です。同じようなお話は全国に25以上はあると言われているんですが、豊後の「きつちょむさん」、肥後の「彦一話」などが、この類の話としては広く知られたものです。これらのお話は、ことば遊びのような駄洒落とか、軽いうそ、とんちなどを交えたお話で、大金持ちとか権力者などを懲らしめるようなお話が多いことから、一般庶民にとっては痛快な話として大変親しまれていたようです。

「たつつあい話」について申しますと、額田というところは棚倉街道の宿場町です。中央に十字路があり、そこが物流の要所であったために、人の交流も盛んだったろうと思われます。当然のように、そこには問屋の役人とか、寺の学僧とか、寺子屋の師匠とか、あるいは町医者、庄屋さんといった人が多く住むようになります。「たつつあい」もその中の一人だったと言われているんですね。一説には、お医者さんだったとも言われています。額田のお寺にあるお墓に、「たつつあいの墓」という五輪の塔が祀られているんですが、大変古くて、本当に「たつつあい」のものなのか、文献も残されていないのでわかりません。実在の人物かどうかはわかりませんが、地元ではこれだけたくさんのお話が残されているんだから、実在の人だと確信しているんですね。この「たつつあい話」は、たつつあいが大変働き者だったというお話がたくさんありますが、その一方で、あまり労働仕事は好きではなかったというお話もあるんですね。そのために、「陸にジシバリ、田にヒルモ<sup>(注)</sup>」、額田にたつつあい、なけりゃいい」というような陰口もささやかれていたとか言われています。でも、うそとかとんちなどを使いながら農民の悩み事、困り事を解決することに関

わっていたということで、農民からは大変慕われていたようです。「たつつあい」のモデルになった人はいるだろうと、私は思うんですね。では、ここで、「たつつあい話」を聴いてください。（注）ジシバリもヒルモも、畑や田に生えなければいい雑草の類。】

昔、<sup>むかし</sup>額田村<sup>ぬかだむら</sup>に たつつあいという ちぐぬぎの 名人<sup>めいじん</sup>が いだんだと。

その たつつあい<sup>たつ</sup>が 住んでる 隣の村に、 とでも 欲<sup>よぐ</sup>が深く、 人<sup>ひと</sup>使え<sup>つけ</sup>の 荒え<sup>あれ</sup> 大金持ち<sup>おおいけ</sup>が 住んでだど。 大<sup>お</sup> 百姓<sup>ひやくしやう</sup> なんだが、 なにしろ 人<sup>ひと</sup>使え<sup>つけ</sup>が 荒え<sup>あれ</sup>でもんで、 奉公人<sup>ほうこうにん</sup> 頼んでも、 ながなが 来てくれる人<sup>ひと</sup>が いなくて、 農作業<sup>のうぎぎやう</sup>も 手遅れ<sup>ておぐ</sup>んなって 困っていたと。 そごさ、 たつつあい<sup>たつ</sup>が、 とでも 働<sup>はたら</sup>ぎもんだっちゅう 話 聞いて、 早速<sup>さつそく</sup>、 頼みにやってきた。

「たつつあいさんよ、 ひどづ 家<sup>うち</sup>の 仕事<sup>しごと</sup> 手伝<sup>てつだ</sup>ってもらえねえがなあ」  
って言うと、 たつつあいは、 二づ返事<sup>ねんぼうこう</sup>で 引き受けだど。 そんで、 年奉公<sup>ねんぼうこう</sup> なんぼにしっぺちゅ 話しになった。 たつつあいは、

「だんな、 あっしやあ 働<sup>はたら</sup>がしてもらあだけで ようがんす」  
って言うと、 欲深え<sup>よぐふけ</sup>金持ち<sup>かねもち</sup>やあ、

「まさか、 そうも いぎゃんすめえ」

「そんじやあ 旦那、 あっしやあ 欲<sup>よぐ</sup>はかぎやあんせんから、 ほんの 少<sup>すこ</sup>しで 結構<sup>けつこう</sup> ですよ。 玄米<sup>げんめい</sup>を 一日目<sup>いちにちめ</sup>に 一粒<sup>ひとつぶ</sup>、 二日目<sup>ふつ かめ</sup>に 二粒<sup>ふたつぶ</sup>、 三日目<sup>よつつぶ</sup>に 四粒<sup>よつつぶ</sup>と、 倍々<sup>べえべえ</sup>に しながら、 一年分<sup>いちねんぶん</sup>でようがんす」

これを 聞いた 欲深え<sup>よぐふけ</sup>金持ち<sup>かねもち</sup>やあ、 こうだ 人一倍<sup>ひといちべえ</sup>の 働<sup>はたら</sup>ぎもんを、 こんてな 安い給金<sup>な</sup>で 雇えるなんて、 なんちまあ 運<sup>はたら</sup>がええんだっぺえと 腹<sup>はら</sup>ん中で 思ったど。

「やあ、 そうゆう 条件<sup>けんけん</sup>だら、 明日<sup>あした</sup>からでも 来<sup>き</sup>てもらいんすべえ」

「はあ、 明日<sup>あした</sup>からでも 来<sup>き</sup>やんすべが、 なんぼ 雇<sup>やど</sup>い人<sup>にん</sup>でも、 契約<sup>けいぎ</sup>ちのは （口約<sup>くやく</sup> 束<sup>たば</sup>だけでえ） 後<sup>あと</sup>で ごだごだしても なんでやんすから、 証文<sup>しょうもん</sup>にしておくんなんしよ」

「あっ、 そうか。 いやあ 堅<sup>かた</sup>えこった。 わがりやんした、 書<sup>か</sup>ぎやんすべ」  
と云<sup>い</sup>って、 欲深え<sup>よぐふけ</sup>金持ち<sup>かねもち</sup>は 証文<sup>しょうもん</sup>を 書<sup>か</sup>えで たつつあいに 渡<sup>わだ</sup>したと。

で、 たつつあいは 次の日<sup>はたら</sup>がら 働<sup>はたら</sup>ぎはじめだ。

夏<sup>なつ</sup>の 暑<sup>あつ</sup>い時<sup>とき</sup>も、 秋<sup>あき</sup>の 穫<sup>と</sup>り入れ<sup>いれ</sup>で 忙<sup>えそが</sup>しい時<sup>とき</sup>も、 陰日向<sup>かげひ</sup>なく 一<sup>いっ</sup>生<sup>しょう</sup>懸命<sup>けんめい</sup> 働<sup>はたら</sup>えだんで、 欲深え<sup>よぐふけ</sup>金持ち<sup>かねもち</sup>は 大喜<sup>き</sup>びだつたど。

とうとう 一年<sup>いちねん</sup>が 過<sup>か</sup>ぎで、 年<sup>とし</sup>の暮<sup>くれ</sup>の 節句<sup>せきぐ</sup>勘定<sup>かんてい</sup>になったんだが、 欲深え<sup>よぐふけ</sup>金持ち<sup>かねもち</sup> あ たつつあいの 年奉公<sup>ねんぼうこう</sup>を どうやって 計算<sup>けいさん</sup>したらいいんだが わがんねえもんで、 村<sup>むら</sup>の 年貢<sup>ねんこう</sup>計算<sup>けいさん</sup>に 来<sup>き</sup>た 「てんざん師<sup>し</sup>」<sup>(1)</sup>に 計算<sup>けいさん</sup>を 頼<sup>たの</sup>んだど。 てんざん師<sup>し</sup>が 計算<sup>けいさん</sup>した 米粒<sup>りつぶ</sup>の 数<sup>かず</sup>は、 なんと 五億<sup>ごい</sup>三六<sup>さんりく</sup>八七<sup>はちしち</sup>万<sup>まん</sup>余<sup>あまり</sup>粒<sup>つぶ</sup>となつたと。 一升<sup>いっしょう</sup>を 六万<sup>ろくまん</sup>

粒として 計算しっと、八九石四斗<sup>こくと</sup>となったんだと。この計算を 聞いた 欲<sup>よぐ</sup>深<sup>ふけ</sup>え金持ちは、はあ たまげだのなんの、年貢米<sup>めえ</sup>も 払えねえどごでねえ。その他の<sup>ほか</sup>奉公人<sup>ほうこうにん</sup>らにも 支払<sup>しはれ</sup>えが できなくなっちゃって、（頭 かげえっちゃったど。どうにもなんなぐなっちゃって、 たつつあいに）現物での 支払<sup>しはれ</sup>えは 延ばしてくんちよって 頼んじやったんだと。そんだが、たつつあいの 男<sup>おどこ</sup>と男<sup>おどこ</sup>の 約束だ、それを 反故<sup>ほご</sup>にするなんちゃ、人間の 風上にも 置いとげねえ と言<sup>ゆ</sup>って 責めたでだんで、半分の 四五石<sup>ごく</sup>は 払<sup>はら</sup>あが、あどは 年賦<sup>ねんぶ</sup>で 勘弁してくんちよって 謝<sup>あやま</sup>っちゃったんだと。

あんまり 欲<sup>よぐ</sup>かぐもんだねえよねえ。

おしめえ

《注》

(1)てんざん師 点竄師か。江戸時代後半の「点竄術<sup>てんざんじゆつ</sup>」という代数演算の方法を使った計算ができる役人のことか。

(9) 茨城弁（茨城町）「大晦日ならジャーボでもよい」

【最後のお話になりました。「ジャーボ」ってゆうのは、わかりますか、皆さん。（会場：わがんね。） 「わがんね」、そうだよな、わがんねよね。ジャーボってゆうのは、葬式、そう、葬式のこと。そのお話、しますね。】

むかし、姑<sup>しゅうとめ</sup>さまが 嫁<sup>よめ</sup> いじって<sup>(1)</sup>、追ん出すべに かかった<sup>(2)</sup>んだと。ところが、その嫁さまちゃ、なかなかの 利口<sup>りこう</sup>で、ああすれば こうする、こうすれば そうする、おっかさまの 気嫌<sup>きげん</sup>もとって、なんとも、追ん出す かど<sup>(3)</sup>が ねえんだちゅうんだ。

このうちでは、大歳<sup>おおとし</sup>の三十一日<sup>(4)</sup>に、囲炉裏の火 消さねえで 火留<sup>ひどめ</sup><sup>(5)</sup>して、あしたん朝だち<sup>(6)</sup>、その火留さ 火 くっ付けて、お祝<sup>いわ</sup>いするつつう、習わしが あったんだと。

そんで 姑さま、嫁さまに、

「いいか、囲炉裏の火 消さねえで 火留<sup>ひどめ</sup>して 大事<sup>でえじ</sup>に とっとけ」って言<sup>ゆ</sup>った。嫁さま そう 言<sup>ゆ</sup>われて、火留<sup>ひどめ</sup>の火 大事<sup>でえじ</sup>に とっとくべと、ひとつつも 寝<sup>ね</sup>ねえで いたんだちど。

ほうしたところが、夜中<sup>よなか</sup>の うしの刻<sup>こく</sup><sup>(7)</sup>になっと、うちん中で、ものすげえ 音がしたんだと。嫁さま、何ごとだっぺ って 思っていたちゅうんだなあ。

ほうしたらば、六道<sup>ろくどう</sup><sup>(8)</sup>が六人で ジャーボ<sup>(9)</sup>のお棺<sup>かん</sup> 担<sup>かつ</sup>いで、提灯<sup>ちようちん</sup>持ち 二人<sup>ふたあり</sup> 先<sup>ま</sup>なあって 通<sup>と</sup>ってぐんだと。

ずっと 今度は、道案内の六地藏さま<sup>ろくじざう</sup> (10)、あわてて ついてくんだと。道案内  
っちゃ、先 行がねえくちやなんねえのに、ろうそく 消えっちゃって、後<sup>あと</sup>んなっ  
ちやったつうんだ。

それで 六地藏さま、嫁さまに 言<sup>ゆ</sup>ったと。  
「道案内<sup>みちあんない</sup>のろうそく 消えっちゃって、まごとに すまねえけんど、その火 ひと  
つ もらえねえけえ」 嫁さま、

「そうけえ<sup>(11)</sup>、火なら あげっぺ」って、火留<sup>おもて</sup>の火 表さ 持ってって、六地藏  
さまの 六本のろうそくさ 点<sup>つ</sup>けてやったちど。

やっと、道案内の六地藏さま 先になったらば、今度は、ジャーボのお棺<sup>おともし</sup> 後戻  
りしてきた。それで 嫁さまに、

「そっくら<sup>(12)</sup> これ もらってくれ」って言うんだと。嫁さま、  
「はあ、どうしようね。そんなら ちょうだいします」って、それ もらったちど。

ほうして、うちん中さ 入<sup>へ</sup>っぺと、それ よおく 見<sup>かん</sup>つと、棺箱<sup>かんばこ</sup>じゃねえくて、  
中に 金<sup>きん</sup>の小判<sup>こばん</sup>が 入<sup>へ</sup>ってたんだと。

この小判、あんまし 姑さまが 嫁ごと いじんので、ジャーボのお棺中に 入  
って、今 世移<sup>ようつ</sup>り<sup>(13)</sup> すっぺ と思<sup>おも</sup>ってた、金の小判だったんだと。

元日<sup>がんにつ</sup>になっと、嫁さま、姑さまに 言<sup>ゆ</sup>ったと。  
「おっかさま、ゆんべ ジャーボが 通<sup>と</sup>って、火 くろっちゅうから、火 あげた  
ら、こういう 宝<sup>たから</sup>もんを 頂戴<sup>ちやうだい</sup>しました」って、出したんだと。

ほうしたらば、姑さま、  
「おめえ、大<sup>て</sup>したもん もらったなあ。こんでは、おめえごと、追<sup>お</sup>ん出<sup>で</sup>すことは  
できねえ」っちゅうわけで、そんでまあ、それから 二人<sup>ふたあり</sup> 仲良<sup>なが</sup>く 暮<sup>く</sup>らしたんだ  
と。

こんじ、おしめえ

#### 《注》

- (1) いじって いじめて。いびって。基本形はイジル。
- (2) 追<sup>お</sup>ん出<sup>で</sup>すべに かかった 追<sup>お</sup>い出<sup>で</sup>しにかかった。追<sup>お</sup>い出<sup>で</sup>そうとした。
- (3) かど 理由。
- (4) 大歳<sup>おおとし</sup>の三十一日 大晦日<sup>おおみそか</sup>の三十一日。
- (5) 火留<sup>ひどめ</sup> 大晦日あるいは、正月三が日、囲炉裏<sup>いろり</sup>の火を絶<sup>た</sup>やさないこと。
- (6) あしたん朝<sup>あ</sup>だち 明日<sup>あした</sup>の朝方<sup>あさ</sup>。翌日<sup>あした</sup>の朝方<sup>あさ</sup>。ここでは元旦<sup>あした</sup>のこと。
- (7) うしの刻【丑<sup>うし</sup>の刻】 午前二時から四時頃。午前二時前後。
- (8) 六道 葬式<sup>そうしき</sup>で、墓穴<sup>ぼけつ</sup>を掘<sup>ほ</sup>ったり、棺<sup>くわん</sup>をかついだりする人。
- (9) ジャーボ 葬式<sup>そうしき</sup>。



- (10) 六地藏さま 仏教で、六道にあって人々の苦しみを救う六体の<sup>じぞうぼさつ</sup>地藏菩薩。ここでは、葬式の道案内者。なお、茨城の葬礼の民俗として「六地藏」という葬具がある。
- (11) そうけえ そうかい。
- (12) そっくら そっくり。
- (13) 世移り 「家<sup>うち</sup>移り」(＝引越し)のことか。

【ジャーボは、さっきお話して、わかりましたよね。お葬式のことですよ。それで、「六道」もお話の中にもありましたよね。六つの道があるんですね。それで、所によっては、六道様のことを「六尺様」って言う所もあるんです。六尺様っていうのは六道なんですけども、晒、一反の晒を六尺に切るんです。その切ったのを、六道さんがこう結んで（肩から腰のあたりに斜めに渡して腰のあたりで結んで）、その家から「いやあー、お世話になりますね」って、六道様にあげたものを、ここ（腰のあたり）に結っつけるんですね。そして、お棺を担ぐんですけども、そんで「六尺様」っていう所もあります。あとその（晒の）残ったのを、「帷子（かたびら）」って言って、施主様が肩にこの白い晒をかけるんです。そういう風習がある所もあります。

「ジャーボ」っていうのは、何でジャーボっていうのかなあって思いますよね。「ジャンボン」って言うところもあるんです。ジャンボンて言うのは、お隣、栃木県、茨城県のお隣ですね。そのジャーボ・ジャンボンていうのは、お坊様がお経をあげる時に、銅鑼を鳴らすんです。ジャボーンジャボーンジャボーンて鳴らすんですね。あと、所によっては、お葬式が終わってお棺を出すときに、笹がついた竹を3本、組んで、提灯を下げて、その周りをジャボーンをやって、おりん（鈴）をチーンと鳴らしながら、施主様とかが回るんですね。その時に、「撒き銭」を撒くんですね。その撒き銭を拾うのに、さっきのオドメ（赤ちゃん）を背負った嫁様やがぎめら（子どもら）、あと年取った婆様が拾って、その撒き銭というのは、その日のうちに使わないと駄目なんです。それで、女の人には下の物（下着）を買うと病気にならないって言います。がぎめらは、そりゃあ駄菓子に素っ飛びますね。そんなふうにして伝わっている所もありますけども、今では皆さん、斎場になってしまったので、そういう習わしがなくなってしまいましたね。】



### Ⅲ 来場者アンケート結果

本節では、「聞いてみっぺ、語ってみっぺ、方言昔話」来場者のうち、アンケートにご協力くださった 79 名の方々の回答結果について、アンケートの質問項目に沿って述べていく。(アンケート調査票は、後掲の資料編を参照)

アンケート結果の詳細は以下に示していくが、全体としては、おおむね好評だったと言える。そして結果からは、この方言昔話の会について、次のような点が指摘できる。

- ・方言の違いや似ているところを感じつつ、昔話を聞いてもらうことができた。
- ・初めて聞く方言についても、昔話の形で聞くことによって、多くの来場者に楽しんでもらえた。
- ・昔話だけでなく、それぞれの昔話に関する説明・関連情報も好評であった。
- ・特に福島浜通りの語りでは、東日本大震災についての語り手の思いが伝わり、来場者にとっても震災に改めて思いを寄せたり考えたりするきっかけとなったと言える。また、方言そのものに力づけられた来場者もいたことが分かった。
- ・茨城を中心とする民俗については、展示も説明も情報がやや不十分であった。
- ・来場者の年齢層が 60～70 代を中心とする高齢層に偏っている。若い世代の来場者もあったものの少なかったため、若い世代の関心を引くための方策が、今後の課題の一つになるだろう。

以下、アンケート結果を個々の質問項目に沿って示していく。本アンケートでは多くの自由記述の意見を得ることができたが、ここでは紙幅の都合から重複する内容の記述は一部を省略した。また、個々の自由記述については、かなづかいや漢字や文体等の一部を修正して示す一方で、回答者個人に関わる情報（年代や性別等）は除いて紹介していく。

---

### アンケート結果

#### 1. プログラム (2) 「方言昔話の聞き比べ：きゅう太と蛙」についてお聞きします。

##### ①方言の違いはわかりましたか？ (a～e の選択肢から 1 つを選択)

|           |            |
|-----------|------------|
| a よくわかった  | 41 (51.9%) |
| b わかった    | 23 (29.1%) |
| c 少しわかった  | 7 (8.9%)   |
| d わからなかった | 3 (3.8%)   |
| e その他     | 1 (1.3%)   |
| 不明        | 4 (5.1%)   |

②聞き比べ「きゅう太と蛙」のご感想は？（a～eの選択肢から1つを選択、および「具体的には？」に自由記述）

|              |            |
|--------------|------------|
| a 楽しめた       | 60 (75.9%) |
| b まあ楽しめた     | 11 (13.9%) |
| c あまり楽しめなかった | 1 (1.3%)   |
| d 楽しめなかった    | 0 (0%)     |
| e その他        | 0 (0%)     |
| 不明           | 7 (8.9%)   |

具体的には？（自由記述。一部を抜粋）

- ・最初に共通語で紹介されたのでわかり易かった。
- ・共通語は味気がなく、やはり方言は様子が伝わるようで良かった。
- ・方言の意味がわかりおもしろかった。
- ・茨城弁は言葉がきつく、「けんかをしているよう」などと言いますが、ほんとうだなとしみじみ思いました。感じました。
- ・ふだん方言を聞く、話す機会がないので、とても勉強になりました。茨城弁はとくに身近なのに始めて聞いた気がしました。
- ・群馬県を聞いたとき茨城に近いと感じたが、最後に茨城を聞くと「あーやっぱりこれだ!」とほっとしました。徳島のリズムが心地よく、たのしく聞けました。おまけの話も楽しかったです。
- ・異なる話というくらい違い、とても面白く聞けました。
- ・方言によって聞いた時のイメージが違っておもしろかった。
- ・標準語で始め昔話をしてくれたので、内容が分かったので、方言が変化（地方ごと）しても、比べることができ、おもしろかった。
- ・西は軽妙、茨城はなつかしい。
- ・蛙の呼び方の違い、語尾のいいまわしの違いがおもしろい。
- ・方言によって風景というか頭に浮かぶ景色がこんなにちがうかと思った。方言って人間のあたたかさが感じられた。
- ・方言とは地元の言葉と言うように、こんなにも違い、面白いものだと思った。

2. プログラム (3)「東北方言で昔話（その一）」の青森の南部弁と津軽弁の昔話のご感想は？（a～eの選択肢から1つを選択、および「具体的には？」に自由記述）

|              |            |
|--------------|------------|
| a 楽しめた       | 58 (73.4%) |
| b まあ楽しめた     | 14 (17.7%) |
| c あまり楽しめなかった | 1 (1.3%)   |
| d 楽しめなかった    | 1 (1.3%)   |
| e その他        | 0 (0%)     |
| 無回答          | 5 (6.3%)   |

### 具体的には？（一部を抜粋）

- ・ 暖かいニュアンスはかきことばにはあわせないものですね。とても良かったです。
- ・ 同じ県の中でこんなにちがうんですね。とても楽しく聞かせていただき、また字幕がないとわからない言葉もありましたが、それもまた楽しい語りでした。
- ・ 聞き取れない方言もあったが、楽しかったです。
- ・ 南部の言葉はところどころ分からない言葉が出てきましたが、よくわかった話なのでふん囲気は分かり、楽しめました。津軽弁は南部以上に分からない所がありましたが、大体の内容は分かり楽しく聞くことができました。暖かいホノボノふんいきが良かったです。
- ・ 南部ベント津軽弁を生で聞けて良かった。わからない方言が多くあったが、話し方の雰囲気ですれとなく内容を把握することができた。
- ・ 方言、全然わかりませんが、昔話は筋のわかる話だったのでそれを思いながら聞きました。別物のようですね。所変われば！
- ・ 南部と津軽でもけっこう違った部分もあり、驚きました。
- ・ 同じ青森でも、南部と津軽では、だいぶ違っていて、私には、津軽弁の方がわかりやすかった。
- ・ 全然違うのでおどろいた。
- ・ 1つ1つの単語がまるで異なっていて、その成り立ちがどうして生じたかを知りたくなりました。
- ・ やさしい語り口、東北弁の暖かさ。
- ・ 聞きなれない方言だったが、とても楽しくきけました。青森の方言をもっと知りたくなった。
- ・ 青森は津軽の言葉だけだと思っていましたが、南部の言葉は岩手に似て心地よかったです。生の語りを聞けてうれしかった。
- ・ 言葉はわからないところもあったが、全体的にお話の内容は理解できた。茨城弁とはちがうイントネーションや内容も楽しく非常によかった。
- ・ 南部弁と津軽弁がこんなにちがうとは思わなかった。東北弁がわからないと聞いていましたが、納得しました。
- ・ 半分くらいしかわからなかったけど楽しかったです。今からでもぜひ残していただきたいですね。
- ・ 解説がおもしろかった。方言はむずかしかった。
- ・ 子育て幽霊の細部のバリエーションの差。子供の呼び方の変化。
- ・ 話の終わり方にもいろいろある事。

### 3. プログラム（4）「東北方言で昔話（その二）」の福島・中通り方言と浜通り方言の昔話のご感想は？（a～eの選択肢から1つを選択、および「具体的には？」に自由記述）

|              |            |
|--------------|------------|
| a 楽しめた       | 58 (73.4%) |
| b まあ楽しめた     | 14 (17.7%) |
| c あまり楽しめなかった | 1 (1.3%)   |
| d 楽しめなかった    | 1 (1.3%)   |

|       |          |
|-------|----------|
| e その他 | 0 (0%)   |
| 無回答   | 5 (6.3%) |

**具体的には？（一部を抜粋）**

- ・中通りの方言は茨城北部と似たようで、でも浜通りの方言はどちらかというと北の方言に似ているのかなと思いました。
- ・方言の昔話のあとの語り部さんの話は（福島の方）心打たれました。郷里がなくなる気持ちがヒシヒシと伝わりました。
- ・茨城弁に近い感じがした。
- ・実家が福島なのでとてもなつかしかったです。
- ・中通り・浜通りの違いがおもしろかった。
- ・福島弁は会津弁、中通り、浜通りと三つの方言がある話、避難している方の切実な想い。とてもよいお話でした。
- ・福島は茨城に近いせいか内容がわかり良かった。
- ・楽しめた後のお話で、まだまだ震災の爪痕が残る福島の方の前向きな活動を知り、心打たれました。
- ・「～くいろ」とか「ばんげ」は茨城弁でもあり、福島弁はよく茨城弁に近似しています。南東北方言として括られるのでしょうか。
- ・ばか嫁ばなしは最高ですね。とても楽しかったです。
- ・ばか嫁話は言葉が少し分からない所があったが、雪の夜ばなしはほぼ理解できた。大悲山の大蛇もすごく良かったです。
- ・避難されているお話を添えてくださり、改めて原発についても思い起こし、忘れてはならないと民話と同様、「語る」ことは重要と感じました。
- ・茨城に近いので言葉もだいたい理解でき、お話そのものを楽しめた。雪の夜ばなしはすっかり昔話の世界に浸れました。
- ・福島と一くくりにできないんですね。
- ・茨城に近いせいかよくわかりました。
- ・茨城ではほとんど話すことも聞くこともない地元の方言を楽しくなつかしく思い、胸がつまりました。
- ・南相馬の言葉は私のふるさとの言葉なのでなつかしくて聞きました。
- ・福島県の南相馬市小高区に住んでいた私にはなつかしいお話でした。こんな形で茨城県で聞けたこと本当に良かったです。
- ・福島弁は茨城弁に近いと感じる。以前南相馬に行ったときは、茨城にいるのとはほとんど変わらなかった。平将門の一門が相馬に移っていった頃からの影響か？とても語りが上手でした。感激しました。

**4. プログラム (5)「茨城方言の昔話」のご感想は？** （a～e の選択肢から 1 つを選択、および「具体的には？」に自由記述）

|              |            |
|--------------|------------|
| a 楽しめた       | 61 (77.2%) |
| b まあ楽しめた     | 8 (10.1%)  |
| c あまり楽しめなかった | 0 (0%)     |

|           |            |
|-----------|------------|
| d 楽しめなかった | 0 (0%)     |
| e その他     | 0 (0%)     |
| 無回答       | 10 (12.7%) |

#### 具体的には？（一部を抜粋）

- ・茨城の人たちの話し方はなんとなくわかっていたつもりでしたが、知らないのがたくさんあり、いいなと思いました。
- ・那珂市にこのような話があるのがおもしろかった。茨城県はよくわかりました。
- ・茨城弁はやはりいちばん親しみやすかった。
- ・やっぱり、茨城弁が一番なじみがある。茨城の県北の生まれなので、額田のたっさいの言葉はとくになじみが深かった。青森の人は茨城弁をどの位理解するのでしょうか？茨城の私が青森（津軽弁・南部弁）をきく位しかはじめはわからないのでしょうか？
- ・方言をたくさん聞けた、とても楽しい講座でした。これから地方の言葉を大切にしていかなければと思います。
- ・茨城弁もネイティブな私にはよくわからないものなので、興味深かったです。
- ・茨城に住んでいながら、茨城の方言を聞く機会がなく、今回聞くことができて良かった。特に県北方面の話をはじめて聞けて良かった。
- ・知っている言い方が出てきたり、イントネーションがなつかしく楽しかった。祖父母を思い出しました。
- ・地域により、方言のしかたがちがいますが、私の幼少の時に使っていた言葉を聞くことが出来ました。楽しみながら語りついてほしいと思いました。
- ・細かいことですが、「男のてい」「村のてい」ということばで、祖母を思い出しました。
- ・茨城に住んで 30 年になるのですが、なかなか方言を聞く機会が少ない中で、方言がいっぱいの茨城弁をきけ良かった。
- ・言葉とともに風習について説明が聞けて良かった。
- ・私は 73 歳。すべて子供のころ使った。なつかしい。
- ・知らない言葉（方言）の多いことを感じました。
- ・小生も茨城弁に愛着を持っていて、「茨城弁練習帳」と題してプリントをつくりました。郷土の言葉がいつまでも使われるよう「茨城弁を愛する市民の会を」立ち上げて、茨城弁を守る活動を提唱したいと思います。
- ・額田のたっつあい話のお話は茨城弁でも、とてもしっくりと感じられた。日常に話していないと自然に語れない感じもしました。
- ・私は茨城生まれですので、額田のたっさい話を楽しく嬉しく聞かせていただきました。家に戻りましたら、孫たちにも是非今日の楽しさ、方言と言うこと、お話ししたいと思います。有難うございました。
- ・地方の変化（資料 p.11、地図 1）が良かった。たっつあい話の冒頭の解説が良かった。
- ・カップレもちの話、たっさい話は特に楽しめた。

#### 5. 昔話に関わることや地域の民俗について、ホール外に展示しましたが、ご感想は？ （a～e の選択肢から 1 つを選択、および「具体的には？」に自由記述）

|           |            |
|-----------|------------|
| a よくわかった  | 36 (45.6%) |
| b わかった    | 15 (19.1%) |
| c 少しわかった  | 2 (2.5%)   |
| d わからなかった | 0 (0%)     |
| e その他     | 4 (5.1%)   |
| 無回答       | 22 (27.8%) |

具体的には？（一部を抜粋）

- ・ポスター等手づくりの感じが良かった。
- ・本は図書館に行って見たいと思いました。
- ・もう少し物語の展示も。
- ・カップレモチのお話を聞いてよくわかりました。
- ・写真があって分かりやすかった。
- ・時間がなく見られなかった。
- ・皆さん勉強してるなと感心しました。
- ・昔話を聞いたことを見たあとで展示物を見たので、お話と写真、絵などが合わさって、読みなおすときによけいにしたしみやすくなると思います。
- ・説明が少なく、いわれ、背景等がよくわからない部分があった。
- ・スペースもせまく、時間もなかったのでゆっくりみられなかった。

6. 配布資料は、本日の各地の方言昔話を聞いたり、茨城の民俗を知る上で、役に立ちましたか？（a～eの選択肢から1つを選択、および「具体的には？」に自由記述）

|               |            |
|---------------|------------|
| a 役に立った       | 43 (54.4%) |
| b まあ役に立った     | 11 (13.9%) |
| c あまり役に立たなかった | 0 (0%)     |
| d 役に立たなかった    | 0 (0%)     |
| e その他         | 1 (1.3%)   |
| 無回答           | 24 (30.4%) |

具体的には？（一部を抜粋）

- ・小冊子もいただいたので、家でゆっくり読みたいと思います。
- ・読みきかせや語りをしていますので、更に勉強して伝えていきたいです。
- ・安心して聞くことができた。
- ・方言の昔話をはじめて聞いた。また機会があれば聞きたいと思う。
- ・これからも勉強したいと思いました。
- ・「しみじみ 楽しく 茨城のことば」の冊子はいただいてよかったです。勉強の材料にさせていただきます。
- ・鰯の話は勉強になりました。
- ・他の講座にも目を向けたいと思いました。

- ・話の大筋や食べ物がわかってよかった。
- ・お話を家に帰ってからもう一度見るのに役に立った。
- ・お話の背景がよくわかり、それがとてもよかった。
- ・知らない事が多かった。
- ・神栖の談話集がおもしろい。
- ・交流会などで地元トーク方言で笑顔になればと思います。

7. プログラム全体について伺います。「そうだ」と思うもの、いくつでも ○ を付けてください。(複数回答)

|                             |    |                         |    |
|-----------------------------|----|-------------------------|----|
| いろいろな方言の昔話が<br>聞けて良かった      | 52 | もっと多くの方言で<br>昔話が聞きたかった  | 16 |
| 2 地域くらいの方言にした方が<br>よかった     | 2  | 茨城の方言の昔話に<br>限定した方がよかった | 1  |
| 共通語（標準語）の昔話が<br>もっと多い方がよかった | 2  | 方言の説明があったほうがよか<br>った    | 12 |
| 方言がわからないところが<br>あっても楽しめた    | 44 | 方言がわからなくて<br>昔話を楽しめなかった | 2  |
| 方言の良さが感じられた                 | 36 | 方言の良さは感じられなかった          | 1  |
| 昔話を方言で聞くとおもしろい              | 31 | 昔話は方言だとわかりにくい           | 3  |
| 全体的に方言はよくわかった               | 4  | 全体的に方言はまあわかった           | 14 |
| 全体的に方言が難しかった                | 5  | その他                     | 1  |

※無回答を除く

8. プログラム全体のご意見やご感想をお聞かせください。(自由記述。一部を抜粋)

- ・とても楽しく、あっという間に終わってしまいました。もっと聞きたかったです
- ・自分はそれほど方言がない地域で生まれ、育ってきたので、方言に対して、今まで以上にいいなと思うようになりました
- ・方言の昔話は、語り部さんたちの人生を通して語られる為、人がらも語り口も心にしました。
- ・とても良かった。
- ・今後も方言のアカデミーを実施してほしい。時間は短く、あっという間にすぎた感じがした。Very good!
- ・地域と関係した学問は必要と確信します。地道ですが注力してください。
- ・学問としての昔がたりの一面もあり大いに参考になりました。ありがとうございました。
- ・自分もおはなしを図書館などで語っているが、方言で語るのはむずかしいと感じている。できるだけ、茨城の昔話も語っていきたいと思います。
- ・方言の話はおもしろかったが、よくわからないところもあるので、標準語の話も少しはいるとよかったかとも思うが、地元の方が大多数のようなので、これでもいいのかもしれない。共通の理解をどうするかが、問題でしょう。(後略)
- ・本物の東北なまりを聞いたのは大変良かった。次回は又、別の方言の昔話が聞いてみ



たくなりました。

- ・私は関西出身（奈良県）なので、高知の方の「語り」がスーっと入りました。方言はぬくもりがあり、心が伝わると考えていますので、大事にしていきたいと思っています。とても良いプログラムでした。ありがとうございました。
- ・土曜アカデミーもよいのですが、平日にあればもっといいと思いました。
- ・方言についての奥深さに気付いて良かった。
- ・「よかっぺ」は「よがっぺ」が通常口にする言い方でしょう。「いがっぺ」も使いますね。「いじやける」は「いじやげる」「いじゃげる」が。
- ・茨城に住んでいる私にとって、方言は大切な事だと思いました。
- ・音声、ちょっとボリュームを上げてほしかった。
- ・楽しみにしていましたがマイクが後ろの方によく聞こえなくてとても残念でした。また、こういう（方言での昔話）ものがありましたら是非聞きたいと思いました。
- ・茨城の水戸生まれ、水戸育ちの身ですが、日常的に方言に触れることはあまりないのですが、母が生前よく使っていたなーと懐かしく拝聴いたしました。「充分食べられる」ことを「ほげほげ食べられる」と良く言っていたと思いだしました。
- ・言葉だけでなく、イントネーションや身振り手振りも含めての方言というのがわかりました。とても楽しめました。ありがとうございました。
- ・どの話もほのぼのとした話で庶民のレベルまで下げて語り継ぎ、明るい社会づくりに役立っている。
- ・冒頭からの方言が残ることが良い事だという結論ありき。言葉は生き物であり、変化していくのは当然だろう。情報伝達の高速化と広域化が均質化に向かうのは自然な事。下手に子供を方言で育てても、将来、都会に出た時いじめられるだけだと思う。
- ・各地の言葉を聞けてよかったです。次の世代にまで伝承する方法も考えなければいけないと思いました。福島県双葉郡から避難してます。ふるさとは言葉も伝説もなくなってしまい、つらいです。
- ・このような機会をこれからも続けてほしい。

## 9. 地域の方言について、保存・継承していく必要があるとお考えですか？

|           |            |
|-----------|------------|
| a 大いにある   | 49 (62.0%) |
| b ある程度ある  | 9 (11.4%)  |
| c わからない   | 1 (1.3%)   |
| d あまり必要ない | 0 (0%)     |
| e 全く必要ない  | 0 (0%)     |
| 無回答       | 19 (24.1%) |

10. 今日の催しのことを、何で知りましたか？

|                  |            |
|------------------|------------|
| a 新聞             | 9 (11.4%)  |
| b ラジオ            | 0 (0%)     |
| c ポスター・ちらし       | 14 (17.7%) |
| d 土曜アカデミーのパンフレット | 25 (31.6%) |
| e 知人・友人から聞いた     | 21 (26.6%) |
| f その他※           | 3 (3.8%)   |

※「その他」については省略。

11. 最後に、あなたご自身についておたずねします。

性別

|    |            |    |            |    |            |    |           |
|----|------------|----|------------|----|------------|----|-----------|
| 男性 | 23 (29.1%) | 女性 | 40 (50.6%) | 不明 | 16 (20.3%) | 合計 | 79 (100%) |
|----|------------|----|------------|----|------------|----|-----------|

年齢

|    |      |      |      |      |       |       |       |       |       |      |
|----|------|------|------|------|-------|-------|-------|-------|-------|------|
| 年代 | 10代  | 20代  | 30代  | 40代  | 50代   | 60代   | 70代   | 80代以上 | 不明    | 合計   |
| 人数 | 2    | 2    | 1    | 4    | 11    | 26    | 21    | 1     | 11    | 79   |
| %  | 2.5% | 2.5% | 1.3% | 5.1% | 13.9% | 32.9% | 26.6% | 1.3%  | 13.9% | 100% |

お住まい

|                     |      |            |        |     |       |    |           |   |
|---------------------|------|------------|--------|-----|-------|----|-----------|---|
| 県内<br>63<br>(79.7%) | 水戸市  | 26         | ひたちなか市 | 7   | 笠間市   | 5  | 茨城町       | 5 |
|                     | 那珂市  | 4          | 石岡市    | 2   | 小美玉市  | 1  | 下妻市       | 1 |
|                     | 那珂湊市 | 1          | 日立市    | 1   | 常陸太田市 | 1  | 常陸大宮市     | 1 |
|                     | 鉾田市  | 1          | 城里町    | 1   | 東海村   | 1  | 不明        | 5 |
| 県外<br>3 (3.8%)      | 東京都  |            | 1      | 福島県 | 1     | 不明 |           | 1 |
| 不明                  |      | 13 (16.5%) |        | 合計  |       |    | 79 (100%) |   |

## 第四部 茨城の民俗



## 第四部 茨城の民俗

ここでは、茨城の民俗として、東茨城郡茨城町で受け継がれている「カップレ餅」の行事と「シモツカレ（スミツカレ）」類（以下、シモツカレ類とする）を取り上げる。現地調査と文献調査に基づいて説明する。また、「カップレ餅」と「シモツカレ」類については、文献によって広域にその存在が確認できるものであるので、文献調査を一覧表にまとめたものを資料編に示す。

### （１）カップレ餅

#### ①茨城県東茨城郡茨城町の行事

カップレ餅は、12月1日の水難除けの行事である。かつては、旧暦の12月1日に行われていたという。

朝早く、餅を搗いてまるめ、それを涸沼川に投げ入れる。投げ入れた餅は、昔はヤスで突いて取って食べたのだという。少し前までは、涸沼川の川根筋では、盛んに行われていたようだが、今はほとんど行われな。しかし、カップレ餅の謂れが伝わっている茨城町のTさん宅では、今も行っている。そこで、2016年12月1日のTさん宅のカップレ餅の行事を、時間に沿って紹介する。（写真参照）

#### 朝 5 時～5 時半頃、起床

前日に水に浸しておいた新米の糯米を 40 分ほど蒸かし、餅を搗く。今は餅つき機で 10 分ほどで搗きあがるが、以前は臼と杵で暗いうちに餅を搗いていたという。

搗きあがった餅で、まずはお供えを作り、次にカップレ餅で撒く餅、餡餅の順に作る。（→写真）

Tさん宅では餅は、お供えの餅を氏神様に供えてから、川に投げ入れに行く。ふつうの家は、川だけである。（→写真）

例年、餅は二臼、搗く。カップレ餅の行事のための丸餅を作るほかに、餡餅にして近所にも配るためである。家族の人数を考えながらも、縁起よい数の 7 個、または大家族なら 10 個にし、「今日は、もち（餅）搗いたから、よかったら食べらっしょ（食べてください）」と言って配るのだという。



①お供えの餅



②カップレ餅で撒く餅

## 6時半～7時頃

涸沼川に、餅を投げ入れに行く。

餅を投げ入れるのは、Tさん宅の当主の役目である。当主以外の家族も、一緒に投げ入れてもよい。(→写真)

昔は、夜明け（日の出）とともに餅を撒きに行ったという。お天道様、あがったから餅投げに行く、隣で行ったから、行く、というように、早朝に競うように行ったという。



③氏神様に供えた餅



④⑤涸沼川に餅を投げ入れる

餅を川に投げ入れることの謂れはいくつかあるようだが、カップに川に引き込まれないように餅を投げ入れるのだというものが多いようである。だが、Tさん宅には「第三章 方言による昔話の会」に示した「カップレ餅」の昔話にあるように、餅を子どものカップに恵んでくれたことに感謝してカップが人を水難から守るようになったという謂れがある。そして、そのカップのために餅を川に投げ入れるのだという話が伝わっている。そのような謂れが伝わるTさん宅では、伏見稲荷から河童稲荷のお札を下げてきて、そのお札と氏神様にも餅を供えているということである。

## ②「カップレ餅」類の様々な名称と地域の広がり

茨城町の「カップレ餅」と同様に 12月1日に川に餅を投げ入れる行事は、東日本の広域に見られ、その名称も様々である。以下に、様々な名称と文献調査をもとに作図した「カップレ餅」類の行事の分布地図を示す。

### 「カップレ餅」類の様々な名称（語形）

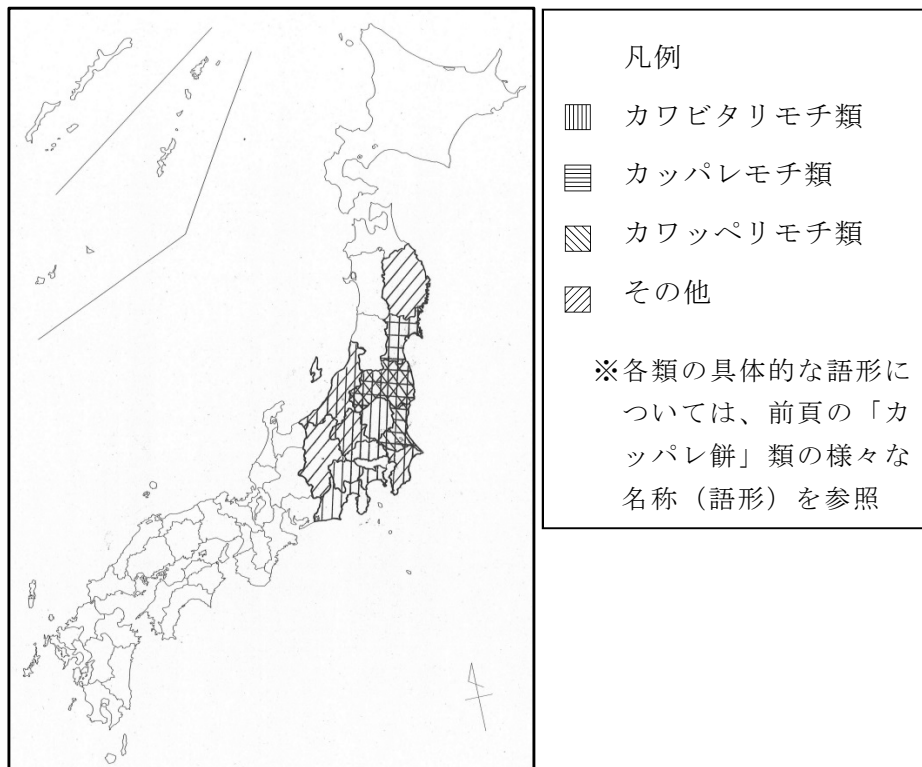
カワビタリモチ類…カワビタリモチ、カワピタリモチ、カービタリモチ、カビタレモチ、  
等

カワッペリモチ類…カワッペリモチ、カアペエリモチ、カーペエリモチ

カップレモチ類…カップレモチ、ケッペレモチ、ケエッペリモチ

その他…カワナガレモチ、カワワタリモチ、等

地図1 東日本各地にみられる「カッパレ餅」(川浸り餅)



[作図に用いた主要参考文献]

池田秀夫他著（一九七五）『関東の歳時習俗』明玄書房

三浦貞栄治他著（一九七五）『東北の歳時習俗』明玄書房

藤本良致他著（一九七五）『北中部の歳時習俗』明玄書房

「日本の食生活全集 茨城」編集委員会（一九八五）『聞き書 茨城の食事』農山漁村文化協会

## （２）初午の食べ物「シモツカレ類」

### ①「シモツカレ（スミツカレ）」類とは

「シモツカレ」と言うと栃木県の伝統食と考えられがちだが、「シモツカレ」「シミツカリ」とも「スミツカレ」「スミツカリ」あるいは「ツモリカイリ」「マナスヅケ」などとも言われ、茨城県内でも初午に欠かせない料理として各地で作られてきたものである。様々な名称があることから、ここではそれらをまとめて「シモツカレ類」とする。

２月の節分の後の初午に欠かせない料理がシモツカレ類である。『聞き書 茨城の食事』（桜井武雄他編、農文協、1985）によると、シモツカレ類の材料は、塩鮭の頭、節分の炒り豆の残り、大根、人参、油揚げ、酒粕である。材料は細かく切ったり、オニオロシで下したりしてから、大鍋に入れてじっくり煮込み、しょう油、砂糖、酢で味付けする、とあ

る。このように酒粕を使って煮て作るものもあるが、茨城県内では火を使わない生の物がある。

## ②茨城の生のシモツカレ類

茨城県内には、煮ない、つまり生のシモツカレ類がある。生のシモツカレ類として、かすみがうら市（旧千代田村）には「ツモチカイリ」が、東茨城郡茨城町には「ナマスヅケ」というものがある。また、取手市でも生のシモツカレ類がある。

### ・旧千代田村の「シモチカイリ」

材料は、大根おろし、焼いた油揚げ、煎った落花生、味付けは、しょう油と酢と砂糖。

この「ツモチカイリ」には「なまぐさ」つまり塩鮭の頭を入れないので、臭くなくて食べやすいという。この「ツモチカイリ」については、方言談話として本報告に収めたので、それをご覧いただきたい。

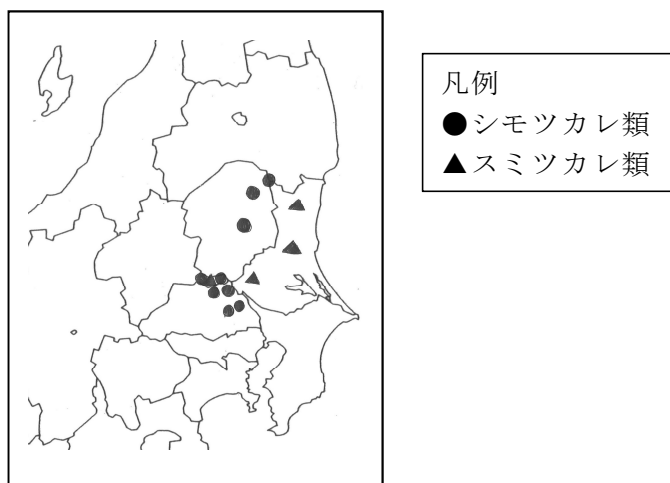
### ・茨城町の「ナマスヅケ」

材料は新巻鮭の頭、節分の残りの豆、大根、人参、油揚げで、味付けは、酢・砂糖・塩。

新巻鮭の頭は、頭の上部等に残っている脂ののったところや軟骨を生のまま豆粒よりも大きいくらいに切り、オニオロシで下した大根・人参とあぶった油揚げの千切りにしたものともまぜて、味を付けたものである。初午に食べるが、正月用に作ることもあるという。

## ③関東に広がるシモツカレ類

地図 2 関東地方に見られるシモツカレ類



### [作図に用いた主要参考文献]

池田秀夫他著（一九七五）『関東の歳時習俗』明玄書房

「日本の食生活全集 茨城」編集委員会（一九八五）『聞き書 茨城の食事』農山漁村文化協会





## 第五部 茨城方言に関する講座

## 第五部 茨城方言に関する講座

文化庁委託事業としての取り組みの成果の公表・社会への還元として、茨城方言に関する二つの講座を実施した。一つは茨城大学の学園祭（2016年11月12日（土））での「茨城祭オープンセミナー」で、実行委員会の求めに応える形で行った。講義題目は「茨城のことばと暮らし」である。もう一つは、取手市老人福祉センターあけぼのの「いきいき講座」（2017年2月17日（金））で、同センターからの依頼に応じて行った。講義題目は「茨城の方言を知る・方言で知る茨城」である。この二つの講座は、重複する内容が多いことから、本報告では外部の講座であり、より講義時間の長かった取手市老人福祉センターの「いきいき講座」について述べる。

### 1. 講座の実施概要

#### (1) 講座名・講義題目

講座名：取手市老人福祉センター「いきいき講座」

講義題目：茨城の方言を知る・方言で知る茨城

#### (2) 依頼先 社会福祉法人 取手市老人福祉協議会

#### (3) 実施日時 平成 29（2017）年 2 月 17 日（金） 10：00～12：00

#### (4) 実施場所 取手市老人福祉センターあけぼの（茨城県取手市寺田 4723）

#### (5) 受講者数 47 名（受講希望者数※）

※実際の受講者数は当日の欠席者があったため、若干少ない。

#### (6) その他 受講者アンケートを実施。回答者数は 37 名。

### 2. 講座の内容

講座は、主にパワーポイントと配布資料を使用しながら行った。パワーポイント資料と配布資料については、「3. 受講者アンケート結果」の後にまとめて示す。なお、実際の講座においては、茨城方言の説明の導入として茨城方言の昔話を聞いてもらったり、茨城方言の特色の説明のために PDF 版の『日本言語地図』『方言文法全国地図』を示したりしながら行った（方言地図は省略）。講義のポイントは以下のとおりである。

- ・方言についての講義だが、楽しく親しめるように講義のポイントに導くために、方言の昔話を聞くことから始める。
- ・昔話の中にも出てくる茨城方言のいくつかを取り上げて、茨城方言の特色と位置づけを、具体的な方言で知るとともに、それらの方言の地域的広がりを方言地図で確認する。具体的な方言として取り上げたのは、意志や推量を表す「ペ・ベ」、方向を表す「サ」、生き物名の後につく接辞「メ」等である。
- ・それらの具体例によって、茨城方言が関東方言としての特色を持ちつつ、関東方言の中では東北方言との共通性が高い方言であることを視覚的に説明する。
- ・同一の昔話を高萩と茨城町の方言で比較することや、接尾辞「メ」の使用範囲を県内数地点の例を示すことで、茨城弁と一言と言っても、地域差があることを指摘する。
- ・方言の特色である関東的と東北との共通性は、茨城の民俗（伝統行事、食文化）においても同様な例を指摘することができる。
- ・方言の良さ、楽しさを感じてもらうことで、方言の保存・継承につなげる。

### 3. 受講者アンケート結果

講義後に行った受講者アンケートの結果を示す。なお、回収できなかったアンケートもあるので、回収数は 37 であった。

アンケート結果をみると、全受講者が 60 代以上である。これは、老人福祉センターで受講者を募集した講座であるからであり、当然の結果である。講義では、昔話から始めたり、地域の民俗と関連付けたりしたが、それらについては多くの受講者が評価していることがわかる。また、受講者の 7 割近くが、方言の講座や昔話の会があったら参加してみたいと回答しており、少なくとも受講者の年齢層に対しては、方言が興味・関心を引く要素となっていることが認められる。また、自由記述からは、さまざまな方言についての関心があることが確認できる。

以下、質問項目に沿って、アンケート結果を示す。回答者数の後に、適宜、割合（％）を示す。自由記述の意見については、かなづかいや漢字表記、文体について若干の修正を行った。なお、各意見の年代と性別は示さない。調査票は、本節末に示す。

---

### いきいき講座「茨城の方言を知る・方言で知る茨城」ミニ・アンケート（集計結果）

#### 0. ご回答者のみなさまについてお教えてください。

- ・全回答者 37 名  
30 代以下(0 名) 40 代(0 名) 50 代(0 名) 60 代(13 名[35.1%])  
70 代以上(23 名[62.2%]) 年代不明(1 名[2.7%])  
内訳
  - ・男性 18 名  
30 代以下(0 名) 40 代(0 名) 50 代(0 名) 60 代(6 名[33.3%])  
70 代以上(12[66.7%]名)
  - ・女性 16 名  
30 代以下(0 名) 40 代(0 名) 50 代(0 名) 60 代(5 名[31.3%])  
70 代以上(10 名[62.5%]) 年代不明(1 名[6.3%])
  - ・性別不明(3 名) \* %は省略  
30 代以下(0 名) 40 代(0 名) 50 代(0 名) 60 代(2 名) 70 代以上(1 名)

#### 1. 今日の講義でおもしろかったところや良かったと思ったところに ○ をつけてください。(複数回答)

- ・「つと豆腐」の紹介 (12 名[32.4%])
- ・昔話を聞いたこと (18 名[48.6%])
- ・昔話の中の方言から茨城方言の特色の説明をしたところ (20 名[54.1%])
- ・方言地図(『日本語地図』他)の紹介と説明 (10 名[27.0%])
- ・茨城の民俗(「スミツカレ・シモツカレ」類、「カップレ餅・川浸り餅」類)の紹介 (13 名[35.1%])
- ・茨城の方言と民俗とを関連付けて説明したところ (21 名[56.8%])

- ・まとめ ( 2 名[5.4%])
  - ・その他 ( 2 名[5.4%])
- (無回答あり)

## 2. 今後、方言についての市民講座や昔話の会などがあったら、行ってみたいですか。

- ・方言の講座（回答者 計 37 名）
  - 行ってみたい ( 25 名[67.6%])
  - 行ってみたたくない ( 1 名[2.7%])
  - どちらともいえない ( 6 名[16.2%])
  - 不明 ( 5 名[13.5%])
- ・方言昔話の会（回答者 計 37 名）
  - 行ってみたい ( 23 名[62.2%])
  - 行ってみたたくない ( 0 名[0%])
  - どちらともいえない ( 8 名[21.6%])
  - 不明 ( 6 名[16.2%])

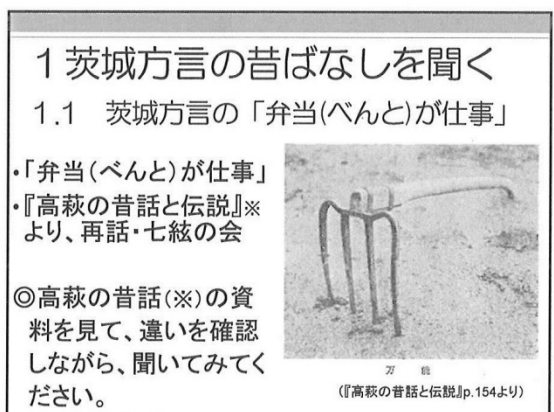
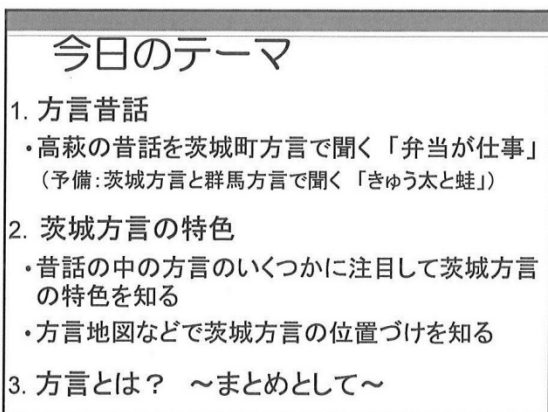
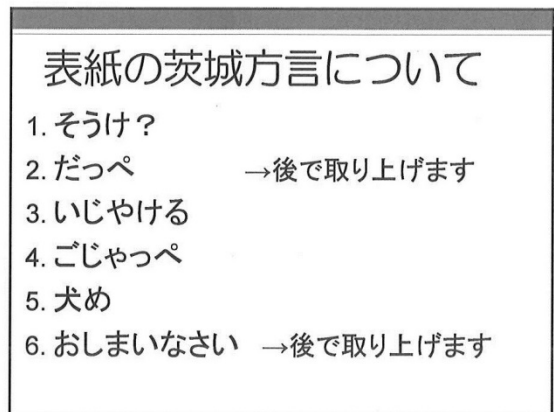
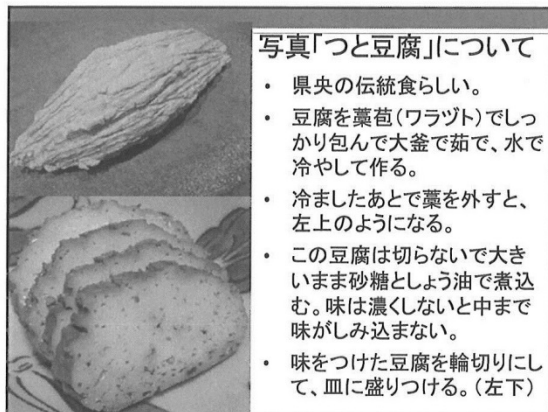
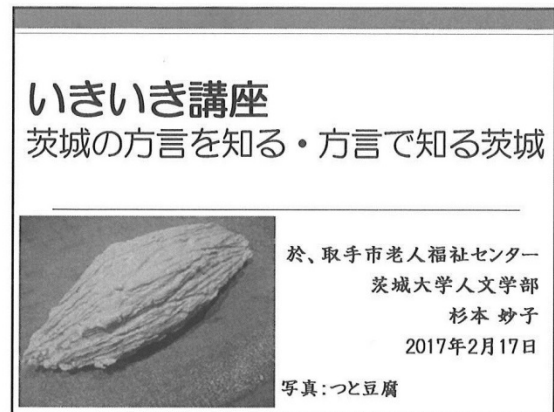
## 3. 今日の講義へのご意見や感想がありましたら、ご自由にお書きください。

自由記述の回答者数 18 名[48.6%]

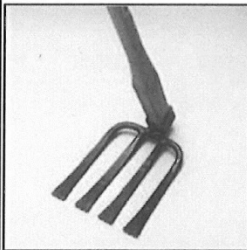
- ・日頃聞いた言葉、使ったことがある言葉、初めて聞く言葉、といろいろあり、面白く楽しい時間でした。
- ・昔話を例にあげて説明があり、具体的で解りやすい。ありがとうございました。
- ・とてもおもしろかった。
- ・茨城人ではないが、長年茨城にいて普段方言を聞くことがなく、本日はそれを聞くことができ、いつまでも方言が残るといいですね!! 今の若い方は昔話を聞いて、子供たちに伝えてもらいたいです。
- ・料理に興味が持てました。作ってみたいと思います。つと豆腐は、人寄せの時、母が作っていました。楽しい時間をありがとうございました。
- ・昔話はおもしろく、楽しく聞きました。方言も聞くと、アクセントもむずかしいと思った。
- ・方言をのこすには？
- ・「スミツカレ・シモツカレ」→福島 of 奥会津地方（南会津町）にも、名称は違うが同じようなものあり。「カップレ餅・川浸り餅」→福島のうち、南会津地方にはこの行事はないと思う。千葉県銚子の方に「イダデイナ」という方言があり。他では使っていないみたい。方言と民俗（暮らし）の共通性について、初めて知ることができ、勉強になった。
- ・取手で生まれ育ち、今も取手に住んでいますが（75 年）、今日の講座で使われているような方言は使ったことがありません（何を言っているのかはわかります）。県南・県北、県西での違いをやってほしかったです。
- ・毎回楽しみに参加しています。私、方言の少ない所の出身なので、おもしろかった。
- ・職業に合った言葉、気づかい（お互い様）等、意味深い内容になるほどと思わされた。
- ・取手の方言を取手市史より調べると良いと思う。
- ・方言の分布は、人の移動によって（転居・結婚）によって、徐々に変化していき保持されるのが困難になると思います。こんな言葉の分布も知りたいです。すける… [例] 行ってすける（一緒に行く） 貸して… [例] そこをかして（その場所をどいて） しんない… [例] そんなことしんない（そのようなことは知らない） 鼻濁音の出来る出来ない地域。
- ・“茨城方言…” についての書籍の紹介、販売を考えていただければ。茨城の方言の独自

性は、筑波新治地方の方言だ。一つも紹介されていないが、この地方の方言の紹介を!!

- ・生活の中に溶け込んでいない為、知らない若人が多い。
- ・昔の人は暮らしの中で使われていたことが少しわかりました。
- ・茨城県取手に住んで約 40 年ですが、関西出身で茨城弁にはなかなか馴染めず、今に至ってます。本日は、方言は暮らしそのものだと講義を聴き、大変興味深く、感銘を受けました。ありがとうございました。
- ・発音が聞き取れなかった。



## 弁当が仕事



↑  
(1)お鉢

←(2)万能(鉈)

(1)お鉢 <http://www1.town.oguchi.aichi.jp>  
(2)万能(鉈) <http://www.takumi-honpo.com>

## ◎ 高萩の昔話と再話を比較する

高萩方言の昔話

再話(茨城町方言)

- |               |                  |
|---------------|------------------|
| ・仕事すんじゃねえですわ  | 仕事しんじゃねえんですわ     |
| ・田 うねえに行ぐんだがら | 田あ うなりさ 行ぐつつうんがら |
| ・屋寝(ひんね)してだって | ひんねこいでたと         |
| ・かんまねえ        | かまね              |
| ・ポツンとぶったして    | ぶつんとおっ立てて        |

➡ 一口に茨城方言と言っても、地域差がある

## 1.2 茨城方言版・群馬方言版の「きゅう太と蛙」

- ・茨城方言版と群馬方言版の「きゅう太と蛙」を見ながらお聞きください。



## ◎ 茨城方言と群馬方言を比較する

茨城方言の昔話

群馬方言の昔話

- |               |                |
|---------------|----------------|
| ・蛙(けえる)め／畜生め  | げえる、げえろ、けえる／畜生 |
| ・あんまり いじやげだ   | おおか けたくそがわりー   |
| ・叩(はだ)いたんだっつけ | 叩(はた)いたんだと     |
| ・はだいてやっぺえ     | はたいてやるぺえ       |
| ・はだかんねえちやった   | はたけなかつたんだと     |
| ・ポツンとぶったして    | ぶつんとおっ立てて      |

- 同じ北関東でも、違うところがけっこうある
- でも、似ているところもある

## 2 茨城方言の特色

◎昔話「弁当が仕事」に出てきた方言に注目

### ① サ

- ・田んぼさ 行つたと。
- ・田あ うなりさ 行ぐ

### ② する・来る

- ・弁当(べんと)ガ 仕事しんですわ \*ガ=ガ行鼻濁音
- ・男(おどこ)ガ 帰(けえ)って来(き)つと

### ③ ペ(ペー)・ベ(ベー)

- ・ひんねこいでっぺ。
- ・きょうは あの割り 終わっちまったっぺ

## 茨城方言の特色 ①サ

- ・「サ」の働き…(1)方向 (2)目的(対象) (3)相手・受け手、などを表す。
- ・「サ」を使う地域…東北6県に広がっていて、まさに東北弁を代表するもの。
- ・東北の広範囲で、方向を表す「へ」・着点を表す「二」、目的や受け手を表す「二」の意味で「サ」が使われている。
- ・関東地方(栃木県北部、西南部を除く茨城県の広範囲、千葉県東北部)にも方向・目的の「サ」が分布している。
- ・茨城県でも、かなり広い範囲で現在でも「サ」がよく使われている。
- ・しかし、「サ」が使える意味の範囲は東北方言より狭い。



## 『日本言語地図』※で 「サ」の地図を見る

- 「東の方へ行く」…方向の「へ」
- 「仕事に行く」…目的の「に」
- 「おれに貸せ」  
…相手・受け手の「に」

※『日本言語地図』国立国語研究所、  
1966-1974年(縮刷版1981-1985)刊、全6巻

## 茨城方言の特色 ②する・来る

- 「する」はサ行変格活用動詞
- 「来る」はカ行変格活用動詞
- 変格活用動詞の一段化傾向…「スル」が「シル」となったり、「クル」が「キル」となる現象
- 茨城方言では、カ変動詞の「来る」とサ変動詞の「する」が上二段活用化する傾向がある。  
→来ル:キナイ、キタ、キル、キル(人)、  
キレバ(「コーバ」の地域も)、コ(一)  
スル:シナイ、シタ、シル、シル(時)、  
シレバ(「シロバ」の地域も)、シロ

## 『日本言語地図』 『方言文法全国地図』※で 一段化傾向を見る

- 「来ない(否定形)」
- 「すれば(仮定形)」

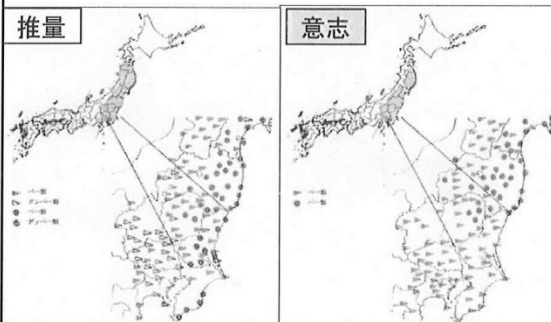
※『方言文法全国地図』国立国語研究所、  
1989-2006年刊、全6巻

## 茨城方言の特色 ③ペ・ベ

- 「ペ・ベ」の意味…推量・意志を表す。
- 「ペ・ベ」は、東日本の広い地域で使われている形
- 茨城方言らしい方言でもある
- 茨城県内でも地域により使われ方が少し違う  
例:イグベ・イグベ(行こう)、インベ(行こう)、クッベ(来るだろう)、シッベ・シベ(しよう)、ナカッベ(無いだろう)、  
ネーベヨ・ナイベヨ(無いだろうよ)、スゴイベ(すごいだろう)
- \* 関東や東北の方言と共通→東日本の代表的な方言

⇒ 方言地図を見てみましょう！

### 方言地図 推量・意志「ペ・ベ」



### 番外:茨城方言の 特色「犬メ」

〈例〉犬メ、馬メ、鳥メ、ヘンメ(蛇メ)、カンメ(蚊メ)  
\*「メ」が、どんな動物名につくかという点では、県内地域差が大きい  
大子:牛、犬、猫、魚、鮎、かじか、  
蛇、虫、カンメ、  
高萩:牛、豚、鳥、カンメ  
水戸:牛、馬、豚、犬、猫、魚、鮎、  
蛙、虫、カンメ × 蛇メ  
大洗:犬、猫、虫、カンメ、鯛、鰯  
神栖:ヘーメ(蠅) × カンメ



### 茨城方言の特色 位置づけ

- ① 方向などを表す「サ」の使用地域の南限  
→ 東北方言との共通性
- ② 変格活用動詞の一段化傾向  
→ 関東方言らしい特徴
- ③ 推量・意志の「ペ・ベ」  
→ 東日本(関東、東北)の方言らしい特徴

茨城方言は関東方言的特色と東北方言的特色の両方の特色を持った方言だと言える。(関東方言と東北方言の中間的方言)

### 3. 関東的と東北的はことばだけのこと?

「スミツカレ・シモツカレ」類

- ・旧暦二月の行事に「初午(はつうま)」がある。
- ・初午の日には、茨城各地で「スミツカレ・シモツカレ」などと言われる伝統的な料理が作られてきた。(今も作る地域もある。)
- ・「スミツカレ・シモツカレ」類のある地域を文献で調べてみると、栃木県を中心に東は茨城県の広範囲に、西は群馬県に初午の料理としてあることがわかる。
- ・変格活用動詞「来る」の一段化が北関東に広がっているのに似ているのでは。

### 3. 関東的と東北的はことばだけのこと?

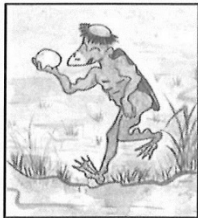
「カッパレ餅・川浸り餅」類

- ・(旧)12月1日の行事に、水難に遭わないように餅を川に投げ入れたり食べたりする行事がある。
- ・「カッパレ餅・川浸り餅」類は、文献によれば茨城県全域に存在する。今でもその行事を行っているところや、子どもの頃、川に投げ入れた餅を取って食べた経験のある人は少なくない。
- ・そして、北は岩手、宮城、福島に、東は栃木、群馬、埼玉、長野などに、南は千葉、神奈川などにも「カッパレ餅・川浸り餅」類がある。
- ・推量・意志の「ペ・ベ」が関東から東北にかけて広範囲に分布しているのに似ているのでは。

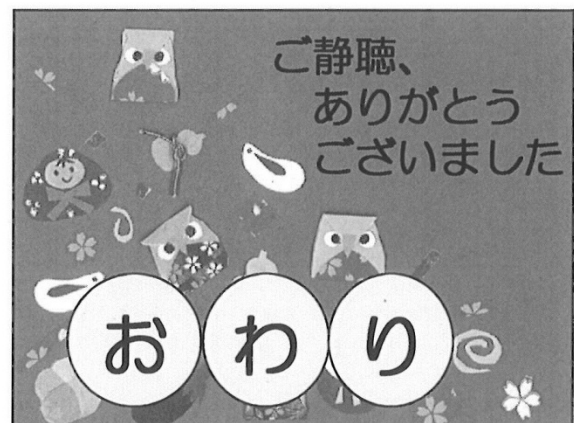
### 4. 方言とは? ～まとめとして～

- ・方言は暮らしとともに育まれ継承されてきたことばであり、地域の民俗を継承してきたのも、方言を受け継いできた地域社会である。
- ・本日の講座では、あまり取り上げられなかったが、人との関わりにおいて欠かせないあいさつや依頼などの表現を見てみると、そこからは人々の暮らし・人との関わり方を知ることができる。例えばモノの貸し借りでは、気さくに付き合える近しい人間関係やお互い様という人間関係が表れている。
- ・また、茨城方言を始めとして、各地の方言での依頼や詫びという言葉行動には、相互に配慮し合う表現を、見ることができる。これは方言でつながる地域社会の人間関係のあたたかさ、お互い様というやさしさの表れだと考えられる。
- ・つまり、方言とは私たちの暮らしを構成する重要なものであり、暮らしそのものだと言ってもいいものだろう。(私の考え)

いきいき講座「茨城の方言を知る・方言で知る茨城」をお聞きくださいまして、ありがとうございます。



本講座は、2016年度文化庁・被災地における方言の活性化支援事業「方言で語る生活文化の再発見と継承：茨城と福島浜通りの方言を中心に」の取り組みの一環として行いました。



いきいき講座「茨城の方言を知る・方言で知る茨城」

茨城大学人文学部 杉本妙子

1. 茨城の昔話 (1)「弁当が仕事」※ ※カタカナ書きのガ行は、ガ行鼻濁音を表す

むがあし、たいそう 大飯食らいで、野良仕事さ 行くのに、お鉢<sup>(1)</sup>さ いっぺえ 飯詰めて 持ってぐ 奉公人の 男ガ いたんだと。

それでも この男、ここいらでは 一日で 田あ 掘っちゃう 「まんにんのう<sup>(2)</sup>」って 言われてる 力持ちだったんだ。

んで、周りのていら<sup>(3)</sup> 男ガ あんまし 野良仕事ガ うまいもんで、うらやましガって、そのうちのおかみさんに 言ったと。

「いやあ おおんとこの 奉公人ちゃ、よおぐ 稼グごどよお」

すつと、おかみさん 言ったって。

「なあに 奉公人ガ 仕事しんじゃねえんですわ。弁当ガ 仕事しんですわ。何しろ お鉢<sup>(1)</sup> しょって 田あ うなり<sup>(4)</sup>さ 行くつうんだがら」

男 おかみさんガ そう言ってるの 聞いちまって、

「なあんだあ おれガ 仕事しんじゃねえのかあ。弁当ガ 仕事しんだっちから、きょうは 万能の先っぺさ お鉢<sup>(1)</sup> 結っつけて、んで ひんねこいでっぺ<sup>(5)</sup>。弁当ガ 仕事しんだ。かあまねえ かまね」って 田んぼさ 行つたと。

んで、万能 田んぼさ ぷつんと おっ立てて、その先っぺ<sup>(6)</sup>さ 弁当のお鉢<sup>(1)</sup> 結っつけて<sup>(7)</sup>、田んぼの縁っこで ひんねこいでたと。日ガ暮れて来つと、お鉢<sup>(1)</sup> 万能さ 結つつけたまんま、ほったらかして 帰ってつたと。

男ガ 帰って来つと、おかみさん、

「きょうは あの割り<sup>(8)</sup> 終わっちゃうたっぺ」って言うので、男 すつとぼけて<sup>(9)</sup>、

「なあに おかみさん、おれガ 仕事しんじゃねえ、弁当ガ 仕事しんだって 言つたっぺ。んだがら、弁当 万能の先っぺさ 結っつけて、田んぼの縁っこで ひんねこいてた。弁当ガ 田あ うなっちゃうたか、おれ 知んねけんど。んだあ、おがみさん、ちょっくら 行つて 見できらっしょ<sup>(10)</sup>」って おかみさんに 言つたって。

んだからなあ、へだげなこと<sup>(11)</sup> 言わねえこつたなあ。 おしまい

《注》(1)お鉢 飯櫃。

(2)まんにんのう 農作業の達人。「万人農」か。

(3)ていら 人たち。人。

(4)うなり うなる(耕す)こと。「うなりさ」は、「耕しに」(「さ」は目的を表す助詞)。

(5)ひんねこいでっぺ 昼寝していよう。「ひんね」は「昼寝」。

(6)先っぺ 先っぽ。先のほう。

(7)結っつけて 縛りつけて。

(8)割り 区画。

(9)すつとぼけて とぼけて。

(10)見できらっしょ 見できなさい。「～らっしょ」は「～なさい」。

(11)へだげなこと いい加減なこと。下手なこと。

※『高萩の昔話と伝説』(高萩市教育委員会編、高萩市、1980年、153・154ページ)の原話「弁当が仕事」をもとに七絃の会(茨城町の再話グループ)が再話。

参考「弁当が仕事」『高萩の昔話と伝説』(高萩市教育委員会編、高萩市、1980年、153-154ページ)

## 85 弁当が仕事

その、野良仕事もすく速者な人がいて、大飯食いで、  
お弁当は、あの<sup>(1)</sup>お鉢を持ってくる人があったんだって。  
それで、あの、よその人は、  
「いや、お宅の奉公人は稼いで良いね。稼いで良いね。」  
って、皆が、その、うらやましがったって。そしたらば、  
その主人(おかみさん)は、  
「なあに、あれは、あの、仕事すんじやねえですわ。弁  
当が仕事すんですわ、お鉢しよって田うねえに行くんだ  
がら。」  
って、その家の主人(おかみさん)が言ったって。  
それ言ってるのを、  
「ああ、俺が仕事すんじやねえ、弁当がすんだつちがら、  
今日は万能の先さお鉢結っつけで、その、寝で帰しま  
しょう。あの、弁当が仕事すんだから、<sup>(2)</sup>かんまねえ。」

って、そして田へ行って、万能ボツンとぶったして、お  
弁当お鉢をそこへくっ付けて、そして、あの、田の縁に  
置架してだつて。

とうとう、そして、お昼食べねえで、その、

「お弁当が仕事すんだから、かんまねえ。今日は仕事し  
ね。」  
田、掘んねがら、食べねえで寝で、日暮れになって帰  
ってったって。

そしたらば、ほら、そういうその、「まんにんのう」  
って言われる力持ちだから、<sup>(3)</sup>一日ですうっと掘  
ちまうんですと。して、

「どうした。今日はあのわり終わったが。」

って。その、帰ったれば、主人(おかみさん)に言われ  
だつて。

「『俺が仕事すんじやねえ、弁当が仕事すんだ。』って、  
おかみさんが言ったがら、今日は、万能の先にお弁当結  
っつけで、置架して、あの、米たがら、田うなつたがど  
うが行って見てきなんしょ。」

って言わつちやつてんだから、その、<sup>(4)</sup>べたげな<sup>(5)</sup>とは言

— 153 —

わんにえって。

注(1)お鉢<sup>(1)</sup> 御

飯を入れ

るに用い

る木製桶

状、蓋付

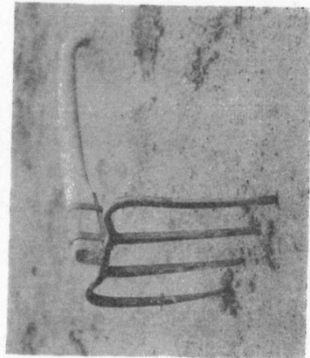
きの入れ

物。

(2)万能<sup>(2)</sup> 田

畑を耕す

農具。



万能

語者 長谷部い 上手編

### 解説

「お弁当お鉢」

高萩地方の農家では、農繁期、特に田植時に、家か  
ら離れている田んぼで、おおぜいで昼食をとると  
き、お鉢に御飯を入れ、別に、おかずや食器を持っ  
ていった。昭和四十年代までは、田植機が普及して  
いなかったで、<sup>(3)</sup>早乙女<sup>(4)</sup>が大勢おった。

## (2)「きゅう太と蛙」

むかし、ある村に きゅう太<sup>けえる</sup>つつう、下手な 博打<sup>ばくち</sup>ぶちが いたんだと。毎朝、博打に行ぐつちゅうと 必ず<sup>かならず</sup> 負けて 帰<sup>かえ</sup>ってくんだと。田んぼ道 通<sup>と</sup>って帰<sup>かえ</sup>つと、そこに一びきの 蛙<sup>かえる</sup>めがいた。

「負けたか バカバカ、負けたか バカバカ」って、毎日 言<sup>い</sup>うんだと。

だけんど きゅう太は、蛙<sup>かえる</sup>めが 言<sup>い</sup>ってんのを、ひとつつも<sup>(1)</sup> 気がつかねえでいた。

ある日のこと、負けるにも 負けるにも 大負けして、あんまり いじやげだ<sup>(2)</sup>から、そこで しょんべん たれべえ と思って、田んぼ道で しょんべん たれはじまった。

そおすつと、蛙<sup>かえる</sup>めが、「負けたか バカバカ、負けたか バカバカ」と言<sup>い</sup>った。

「おめえ、そんなごど 言<sup>い</sup>ってんのが。今 はじめて 気がついた。おれが 博打に 毎日 負けてくつから、『負けたか バカバカ、負けたか バカバカ』って、ふてえ 畜生<sup>ちくしょう</sup>めだ」

きゅう太は、そこに あった 棒<sup>ぼう</sup>さい<sup>(3)</sup>で、蛙<sup>かえる</sup>めの背<sup>せ</sup>中<sup>ちゆう</sup> ひとつ 叩<sup>たた</sup>いたんだちけ<sup>(4)</sup>。そうすつと 蛙<sup>かえる</sup>めが、「キューター」って、名前<sup>なまえ</sup>を 言<sup>い</sup>ったんだと。それで、きゅう太が、「この 畜生<sup>ちくしょう</sup>めが、人の名前<sup>なまえ</sup>まで 知<sup>し</sup>ってて、おれのこと ばかにしやがったな」

また、叩<sup>たた</sup>いてやっぺえ と思って 棒<sup>ぼう</sup> 振り上げつと、蛙<sup>かえる</sup>めが、「きゅう太、痛<sup>いた</sup>えじゃねえか」って、もぐつちまったんで、今度は、叩<sup>たた</sup>かんねえちやつたつて。  
こんじ、おしめえ

《注》(1)ひとつつも 全然。まったく。少しも。

(2)いじやげだ 腹がたった。いらだった。基本形はイジヤゲル。

(3)棒さい 棒きれ。

(4)叩(はた)いたんだちけ 叩(たた)いたんだそうだ。叩いたんだという。動詞ハタク (基本形)は、ハダクとも。

### 【参考：群馬方言「きゅう太と蛙」】

むかしさー、ある村に きゅう太<sup>けえる</sup>つつう、へたついいな 博打<sup>ばくち</sup>ぶちが いたんだと。そのきゅう太、毎朝、博打に 行ぐつちゅうと ひとつも 負けて 帰<sup>かえ</sup>ってくんだと。田んぼ道 通<sup>と</sup>って 帰<sup>かえ</sup>るつつうと、そこい 一びきの ゲーロ<sup>がーろ</sup>がいたんだい。それで、「負けたか バカバカ、負けたか バカバカ」って、毎日 言<sup>い</sup>うんだと。だけんども きゅう太、ゲーロが 言<sup>い</sup>ってんの、ひとつつも 気がつかねえでたんだと。

ある日のこと、負けるにも 負けるにも まーず 大負けして、それで、おーか けたくそが悪いから、から、そこで しょんべんでも するべえ って思って、田んぼ道で しょんべん ひよーぐり始めた。そおすつと、ゲーロが、「負けたか バカバカ、負けたか バカバカ」言<sup>い</sup>ーんだと。

「おい ゲーロ、おめえ、そんな 悪態<sup>あくたい</sup> 言<sup>い</sup>ってたんか。今 はじめて 気い ついた。おれが 毎日 博打に 負けてくんで、『負けたか バカバカ、負けたか バカバカ』って、ふてえ 畜生<sup>ちくしょう</sup>だ」そう言<sup>い</sup>うと きゅう太、そこい あった 棒<sup>ぼう</sup>きれで、ゲーロの背<sup>せ</sup>中<sup>ちゆう</sup> ひとつつ 叩<sup>たた</sup>いたんだと。

そうすつと ゲーロが、「キューター」って、名前<sup>なまえ</sup> 言<sup>い</sup>ったんだと。んだから、きゅう太が、「こーの 畜生<sup>ちくしょう</sup>が、人の名前<sup>なまえ</sup>(なめえ)まで 知<sup>し</sup>ってて、おれのこと ばかにしやがったな」って、また、叩<sup>たた</sup>いてやるべえって思って 棒<sup>ぼう</sup>きれ 振り上げると、ゲーロが、「きゅう太、痛<sup>いた</sup>えじゃねえか」って、土<sup>ど</sup>ん中<sup>ちゆう</sup> つんむぐつちまったんで、今度<sup>こんど</sup>一、叩<sup>たた</sup>けなかつたんだと。  
おしめえ



## 2. 茨城方言の特色

### (1) サ

- ・昔話の中の例…野良仕事さ 行ぐのに、お<sup>お</sup>蘇<sup>そ</sup>さ いっぺえ<sup>い</sup>飯<sup>い</sup>詰<sup>め</sup>めて／田あ うなり<sup>う</sup>さ行ぐ／万能の先っぺ<sup>さ</sup> お蘇<sup>そ</sup> 結<sup>む</sup>っつけて／田んぼ<sup>さ</sup> 行<sup>い</sup>ったと。
- ・「サ」の意味…方向、目的、相手などを表す。
- ・「サ」が使われている地域…東北6県に広がっていて、まさに東北弁を代表するもの。また、東北から茨城・栃木の一部でも使われている。
- ・『日本語地図』の①「東の方へ行く」、②「仕事に行く」、③「おれに貸せ」の地図を見ると、①②の「サ」の地域は茨城・栃木の一部にまで広がっているが、③はほぼ東北に限られる。
- ・茨城県でも、かなり広い範囲で現在でも「サ」がよく使われている。しかし、「サ」が使える意味の範囲は東北方言より狭い。

⇒ 東北方言と共通する特色

### (2) する・来る

- ・昔話の中の例…奉公人ガ 仕事しんじやねえんですわ。弁当（べんと）ガ 仕事しんじすわ。  
日ガ暮れて来っと、／剪<sup>は</sup>ガ 帰<sup>か</sup>って来っと、
- ・「仕事しんです」 ← シル ン デス ← ス ン デス／スル ン デス \*ン=ノ
- ・「帰ってきっと」 ← キルト ← クット／クルト
- ・「シンデス」「帰ってキット」という変化は、変格活用動詞の一段化
- ・茨城方言の一段化傾向の実態  
→ 来ル：キナイ、キタ、キル、キル（人）、キレバ（「コーバ」の地域も）、コ（コー）  
スル：シナイ、シタ、シル、シル（時）、シレバ（「シロバ」の地域も）、シロ
- ・変格活用動詞の一段化傾向の地域…関東地方を中心に一段化傾向が見られる。「来る」の一段化は北関東に、「する」の一段化は関東を中心に北は福島、西は中部地方の広域に広がる。

⇒ 関東らしい方言の特色

### (3) ペ（ペー）・ベ（ベー）

- ・昔話の中の例…ひんねこいでっ<sup>っ</sup>ぺ。／きょうは あの割り 終わ<sup>わ</sup>っちま<sup>ま</sup>ったっ<sup>っ</sup>ぺ。／<sup>あ</sup>弁当ガ仕事し<sup>し</sup>んだ<sup>だ</sup>って言<sup>い</sup>ったっ<sup>っ</sup>ぺ。
- ・「ペ・ベ」の意味…推量、意志・勧誘を表す。
- ・「ペ・ベ」が使われている地域…関東一円から東北の広範囲。
- ・茨城県内でも地域により使われ方が少し違う

例：イグベ・イグベー（行こう）、インペ（行こう）、クッペ（来るだろう）、シッペ・シペー（しょう）、ナカッペ（無いだろう）、ネーベヨ・ナイベヨ（無いだろうよ）、スゴイベ（すごいだろう）

⇒ 関東や東北の方言と共通＝東日本の代表的な方言の特色

《茨城方言の特色から見た位置づけ》

茨城方言は関東方言的特色と東北方言的特色の両方の特色を持った方言だと言える。  
（関東方言と東北方言の中間的方言）

### 3. 関東的と東北的はことばだけのことか？

#### （1）「スミツカレ・シモツカレ」類

旧暦二月の行事に「初午（はつうま）」がある。

初午の日には、茨城各地で「スミツカレ・シモツカレ」などと言われる伝統的な料理が作られてきた。（今も作る地域もある。）

「スミツカレ・シモツカレ」類のある地域を文献で調べてみると、栃木県を中心に東は茨城県の広範囲に、西は群馬県に初午の料理としてあることがわかる。

◎変格活用動詞「来る」の一段化が北関東に広がっているのに似ているのではないか。

#### （2）「カッパレ餅・川浸り餅」類

（旧）12月1日の行事に、水難に遭わないように餅を川に投げ入れたり食べたりする行事がある。

「カッパレ餅・川浸り餅」類は、文献によれば茨城県全域に存在する。今でもその行事を行っているところや、子どもの頃、川に投げ入れた餅を取って食べた経験のある人は少なくない。

そして、北は岩手、宮城、福島に、東は栃木、群馬、埼玉、長野などに、南は千葉、神奈川などにも「カッパレ餅・川浸り餅」類がある。

◎推量・意志の「ペ・ベ」が関東から東北にかけて広範囲に分布しているのに似ているのではないか。

### 4. 方言とは？ ～まとめとして

・方言は暮らしとともに育まれ継承されてきたことばであり、地域の民俗を継承してきたのも、方言を受け継いできた地域社会である。

- ・本日の講座では、あまり取り上げられなかったが、人との関わりにおいて欠かせないあいさつや依頼などの表現を見てみると、そこからは人々の暮らし・人との関わり方を知ることができる。例えばモノの貸し借りでは、気さくに付き合える近しい人間関係やお互い様という人間関係が表れている。
- ・また、茨城方言を始めとして、各地の方言での依頼や詫びという言語行動には、相互に配慮し合う表現を、見ることができる。これは方言でつながる地域社会の人間関係のあたたかさ、お互い様というやさしさの表れだと考えられる。
- ・つまり、方言とは私たちの暮らしを構成する重要なものであり、暮らしそのものだと言ってもいいものだろう。(私の考え)



主要参考文献

- ・『茨城方言民俗語辞典』赤城毅彦編、東京堂出版、1991年
- ・『関東の歳時習俗』池田秀夫他編、明玄書房、1975年
- ・『聞き書 茨城の食事』同編集委員会編、農文協、1985年
- ・『しみじみ楽しく茨城のことば〔改訂版〕』杉本妙子編、茨城大学、2016年
- ・『平成27(2015)年度文化庁委託事業 報告書 被災地方言と方言で語る生活文化の再発見と継承：茨城と福島浜通りの方言に学ぶ取り組み』杉本妙子編、茨城大学、2016年

《方言の説明》

だっぺ…だろう。「ぺ」は、「べし」の変化したもの。茨城方言の代表的なもの。  
いじやける…腹が立つ、いらいらする。共通語に置き換えにくい茨城方言。「いじやける／イジャグ」などとも。  
ごじゃっぺ…わからずや。でたらめ。共通語に置き換えにくい茨城方言。「ごじゃっぺー／ごじゃぺ／ごじゃ」などとも。  
犬め…犬。「メ」は動物名の下につく接辞。茨城のほぼ全域と栃木県東部に分布。幅広くいろいろな動物名に「メ」を付ける地域もあれば、あまりつかない地域もあり、「メ」の付き方には地域差がある。  
おしまいなさい…夕方のあいさつ。農作業の帰りなどに人に会った時に言う。(神栖)

本講座は、2016年度文化庁・被災地における方言の活性化支援事業「方言で語る生活文化の再発見と継承：茨城と福島浜通りの方言を中心に」の取り組みの一環として行いました。



資料3 いきいき講座「茨城の方言を知る・方言で知る茨城」アンケート

いきいき講座「茨城の方言を知る・方言で知る茨城」ミニ・アンケート

本日のいきいき講座について、ご意見をお聞かせください。アンケート結果は、今後の公開講座等の参考にさせていただきたいと思います。ご協力をお願い申し上げます。  
茨城大学人文学部 杉本妙子

0. ご回答者のみなさまについて、お教えてください。

性別： 男性 女性      年代： 30代以下 40代 50代 60代 70代以上

1. 今日の講座でおもしろかったところや良かったと思ったところに ○ を付けてください。

- ・「つと豆腐」の紹介
- ・昔話を聞いたこと
- ・昔話の中の方言から茨城方言の特色の説明をしたところ
- ・方言地図（『日本言語地図』他）の紹介と説明
- ・茨城の民俗（「スミツカレ・シツカレ」類、「カッパレ餅・川浸り餅」類）の紹介
- ・茨城の方言と民俗とを関連付けて説明したところ
- ・まとめ
- ・その他( )

2. 今後、方言についての市民講座や昔話の会などがあったら、行ってみたいですか。

方言の講座： 行ってみたい      行ってみたくない      どちらともいえない  
方言昔話の会： 行ってみたい      行ってみたくない      どちらともいえない

3. 今日の講義へのご意見やご感想がありましたら、ご自由にお書きください。

アンケートへのご協力、ありがとうございました。

# 資 料 編

## 文献調査：茨城の民俗

- 1 「カッパレ餅」類
- 2 「シモツカレ」類

## 各地にみられる「カッパレ餅」類ならびに12月1日の習俗

### 参考文献と表中の省略表記

| 省略表記 | 参考文献(編著者名(発行年)『書名』発行所)                                 |
|------|--------------------------------------------------------|
| 習俗   | 池田秀夫・日向野徳久・平野伸生・高崎繁雄・井上善治郎・宮田登・田中宣一(1975)『関東の歳時習俗』明玄書房 |
| 習俗   | 三浦貞栄治・森口多里・三崎一夫・今村泰子・月光義弘・和田文夫(1975)『東北の歳時習俗』明玄書房      |
| 習俗   | 藤本良致・橋本芳契・漆間元三・佐久間惇一(1975)『北中部の歳時習俗』明玄書房               |
| 習俗   | 小沢秀之・箱山貴太郎・木村博・加藤参郎・河上一雄(1975)『南中部の歳時習俗』明玄書房           |
| 食事   | 「日本の食生活全集 茨城」編集委員会(1985)『聞き書 茨城の食事』農山漁村文化協会            |
| 食事   | 「日本の食生活全集 福島」編集委員会(1987)『聞き書 福島の食事』農山漁村文化協会            |
| 食事   | 「日本の食生活全集 山形」編集委員会(1988)『聞き書 山形の食事』農山漁村文化協会            |
| 食事   | 「日本の食生活全集 栃木」編集委員会(1988)『聞き書 栃木の食事』農山漁村文化協会            |
| 食事   | 「日本の食生活全集 東京」編集委員会(1988)『聞き書 東京の食事』農山漁村文化協会            |
| 食事   | 「日本の食生活全集 千葉」編集委員会(1989)『聞き書 千葉の食事』農山漁村文化協会            |
| 食事   | 「日本の食生活全集 群馬」編集委員会(1990)『聞き書 群馬の食事』農山漁村文化協会            |
| 食事   | 「日本の食生活全集 埼玉」編集委員会(1992)『聞き書 埼玉の食事』農山漁村文化協会            |
| 柳田習俗 | 柳田国男(1975)『歳時習俗語彙』国書刊行会                                |

《カッパレ餅》類

|    | 名称                                 | 時期    | カッパ<br>伝説 | 地域         | 風習、伝承等                                                                             | 出典・備考      |
|----|------------------------------------|-------|-----------|------------|------------------------------------------------------------------------------------|------------|
| 1  | カッパノ餅                              | 12月1日 | ×         | 岩手県雫石町南畑   | 餅を搗き、その餅を小さく切って子どもがカド(流れている用水)に持って行き、オスズサマに上げるといって投げ入れる。                           | 習俗(P129)   |
| 2  | ケツパレ餅                              | 12月1日 | ×         | 宮城県        | 餅を食べないうちは川を渡らないとされている。                                                             | 習俗(P178)   |
| 3  | ミゾコボシノイハヒ<br>(水こぼしの朔日・<br>水こぼしの正月) | 12月1日 | ×         | 宮城県仙台市     | 武家では餅を搗き、小豆きなこの餅を作り、一緒にその日を祝った。爐の四隅に串を刺した生豆腐を立て、それに水をかけて火防の呪いとする風習があった。            | 柳田習俗(P637) |
| 4  | カビダレ餅                              | 12月1日 | ×         | 宮城県刈田郡七ヶ宿町 | 餅を食べないうちは川を渡らないとされている。餅を川に流す。                                                      | 習俗(P178)   |
| 5  | カハバヒリノツイタチ<br>(川入りの朔日)             | 12月1日 | ×         | 宮城県白石市     | この日の餅をカッパイリ餅と言う。                                                                   | 柳田習俗(P628) |
| 6  | カハバヒリノツイタチ<br>(川入りの朔日)             | 12月1日 | ×         | 宮城県栗原市     | 川入りの朔日が訛って、ケアバリの朔日と言う。豆腐を四角に切って、大豆の茎に挿し、爐の四隅に立てて水を注ぎかけ、後で家族全員で食べる。                 | 柳田習俗(P628) |
| 7  | カワヨケノツイタチ                          | 12月1日 | ×         | 宮城県大崎市     | 水こぼしの朔日とも言い、豆腐を長方形に切って串にさし、爐の四隅に立てて、水を注ぐ。                                          | 柳田習俗(P632) |
| 8  | 川浸りの餅                              | 12月1日 | ×         | 秋田県        | 小豆餅を川隈大明神に供え、水難除けを願う。                                                              | 習俗(P228)   |
| 9  | カハバヒリノツイタチ<br>(川入りの朔日)             | 12月1日 | ×         | 秋田県横手市     | 乙子の餅のことをカッパレ餅と言う。小豆餅で神棚・仏壇に供える。この餅を食べると水難を免れると言う。                                  | 柳田習俗(P628) |
| 10 | かあぺえり<br>川びたり<br>かつぱれ<br>かつぱらい     | 12月1日 | ○         | 福島県        | 餅を搗いて川や海に流したり、川端に供えたりする。水難に遭わないためとか、河童に取られないためである。この餅を食べないうちは、橋を渡らない。川に入ると河童に取られる。 | 習俗(P328)   |

《カッパレ餅》類

|    | 名称                          | 時期    | カッパ<br>伝説 | 地域       | 風習、伝承等                                                                                                       | 出典・備考       |
|----|-----------------------------|-------|-----------|----------|--------------------------------------------------------------------------------------------------------------|-------------|
| 11 | ケエツペエリ餅                     | 12月1日 | ×         | 福島県相馬中村  | 塩餡でつくる餅。この餅を買って食べないうちは川へ行くなどといった。秋の屑米で餅を搗く。水神さまに供え、川のなかへも投げ入れる。                                              | 習俗 (P328)   |
| 12 | カビタレ餅                       | 12月1日 | ×         | 福島県南会津大内 | 水難を防ぐため、餅を搗いて、水神さまや川に供える。                                                                                    | 習俗 (P329)   |
| 13 | かわびたれもち                     | 12月1日 | ×         | 福島県会津盆地  | 水の神さまへ感謝をし、水難にあわないように祈る日。粉もちを搗いて水神さまが川にお供えする。                                                                | 食事 (P19)    |
| 14 | かあべい朔日                      | 12月1日 | ×         | 福島県南部    | 餅を搗く。奉公人の入れかわる日で、年季があけて家に帰る人や休みで帰る人に餅を持たせる。                                                                  | 食事 (P177)   |
| 15 | サウダンツイタチ<br>(相談朔日)          | 12月1日 | ×         | 福島県南部    | 川浸りの朔日または出替わりの朔日と言い、この月の境を下男下女の出替り期とする所があった。餅を食ってからでないと橋を渡ってはならぬと言った。                                        | 柳田習俗 (P627) |
| 16 | カビタレモチ<br>(カビタレ餅・<br>カビタリ餅) | 12月1日 | ×         | 福島県会津地方  | 水神の祭とし、餅を川に納める。水車を営業する者が最も盛んに搗く。                                                                             | 柳田習俗 (P630) |
| 17 | カーピタリ餅<br>カーベエリ餅            | 12月1日 | ○         | 茨城県      | 朝餅を搗き、井戸神や水神に供えたり、川などに投げてくる。子供が河童に水に引きこまれぬよう水難除けするところもある。投げた餅を拾ってきて食べると中風にならないとか、風邪を引かないとか、歯が丈夫になるなどといわれている。 | 習俗 (P156)   |
| 18 | かーびたりもち                     | 12月1日 | ×         | 茨城県北部地域  | 餅を搗いて水神に供え、数個の丸め餅を川に投げる。投げた餅を拾ってきて食べると、中気にならないといわれる。                                                         | 食事 (P153)   |
| 19 | 川っぺりもち                      | 12月1日 | ×         | 茨城県県央地域  | 朝、餅を搗き、橋を渡る時に、丸めた餅を川に投げ入れる。子どもの水難を逃れる行事。                                                                     | 食事 (P17)    |

《カッパレ餅》類

|    | 名称                     | 時期    | カッパ<br>伝説 | 地域         | 風習、伝承等                                                                                  | 出典・備考       |
|----|------------------------|-------|-----------|------------|-----------------------------------------------------------------------------------------|-------------|
| 20 | 川びたりもち                 | 12月1日 | ×         | 茨城県南部地域    |                                                                                         | 食事 (P148)   |
| 21 | かわびたり                  | 12月1日 | ○         | 茨城県鹿島灘沿岸地域 | 朝、餅を搗き、小さいお供えをつくり、利根川に入れてくる。水神さま、一名かっぱの神様の祭り。川の安全を祈る。こどもがかっぱにいたずらされないようにとの意味もある。        | 食事 (P230)   |
| 22 | カワビタン<br>(川浸し)         | 12月1日 | ○         | 茨城県土浦市     | 朝、人に見られぬように川行って、尻を水に浸けてくると河童に引かれな<br>いと言った。                                             | 柳田習俗 (P628) |
| 23 | カワビタン<br>(川浸し)         | 12月1日 | ○         | 茨城県行方市     | 餅を搗いて川に投げることを言い、カッパに餅をあげるのだと言ってい<br>た。                                                  | 柳田習俗 (P628) |
| 24 | カワビタリノツイタチ<br>(川浸りの朔日) | 12月1日 | ×         | 茨城県行方市     | この日搗く餅を川びたり餅と言っている。この餅を川に投げ込んで、水神<br>を祭ると言う風習は利根川の両岸にもある。                               | 柳田習俗 (P629) |
| 25 | かびたり餅                  | 12月1日 | ×         | 栃木県        | 餅を搗いたり、米の粉で大きな団子のように丸めて平たく潰したものを餅<br>といい、いつも渡る橋に供えたり、川へ入れたりする。橋を渡る前に食べ<br>ると水難にあわないという。 | 習俗 (P112)   |
| 26 | かびたれ<br>(かびたり)         | 12月1日 | ×         | 栃木県鬼怒川流域   | 家のまわりの川に「水神さまにあげます」といって切りもちを流し、子ども<br>が水難にあわないように願う。                                    | 食事 (P20)    |
| 27 | かわびたり                  | 12月1日 | ×         | 栃木県日光山間    | かわびたりもち(ぼんだいもち)。水神さまの祭り。                                                                | 食事 (P137)   |
| 28 | 川びたり                   | 12月1日 | ×         | 栃木県那須野ヶ原   | 水神さまの祭り。餅を搗いて丸もちをつくり、両手に持って「いい耳聞け<br>悪い耳聞くな」と唱える。このもちを疏水に流して子どもの水難よけとし<br>た。            | 食事 (P145)   |

《カッパレ餅》類

|    | 名称                          | 時期                            | カッパ<br>伝説 | 地域        | 風習、伝承等                                                                                                                                                                                                                    | 出典・備考       |
|----|-----------------------------|-------------------------------|-----------|-----------|---------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|-------------|
| 29 | カビタレモチ<br>(カビタレ餅・<br>カビタリ餅) | 12月1日                         | ○         | 栃木県芳賀郡    | 川浸りの朔日に搗く餅を言う。この餅を川に流して水神を祭り、家の者も食べた。これを食べると水難を免れ、水泳ぎに行っても河童に取られぬと言われた。<br>この餅を川から拾って来て食べると、虫歯にならないまたは治るとも言った。餅で腫物を撫でたり、耳を撫でて「よい耳きけ悪い耳聴くな」と唱えてから、川に投げることもあった。<br>馬を飼っている家では、川から餅を拾って来て馬にも食べさせた。馬の水難予防と食あたりをしをしないまじないと言った。 | 柳田習俗 (P629) |
| 30 | かびたり                        | 12月1日                         | ×         | 栃木県下都賀郡   | 年貢米を船に積んで、古河さまへ納める煮に難破した人々の霊を慰めるため、寒ざらし粉でだんごをつくる。これをかびたりだんごといい、ただ丸くするのではなく、手の平で軽く押しつぶし、少くぼみをつけゆでる。ゆでだんごを四つ切りにした半紙で包み、川端や水神さまに供える。                                                                                         | 食事 (P245)   |
| 31 | 川浸り朔日                       | 12月1日                         | ×         | 群馬県東毛平坦地  | 正月準備の為の物忌みに入る日。川に入って斎戒沐浴をし、水神(田の神)をまつる。この日は小豆飯を食べて祝う。                                                                                                                                                                     | 食事 (P268)   |
| 32 | カビタリ餅                       | 12月1日                         | ○         | 群馬県桐生市山間部 | 川でカッパに引かれないように水神さまにあげる。                                                                                                                                                                                                   | 習俗 (P68)    |
| 33 | カビタリ餅                       | 12月1日                         | ○         | 群馬県伊勢崎市   | 水難のないよう餅を川にぶっこむ。子どもがカッパに襲われないように祈るもので、この餅を舟に乗ってヤスでついてとり、食べると川流れにならないという。                                                                                                                                                  | 習俗 (P68)    |
| 34 | カフビタリノツイタチ<br>(川浸りの朔日)      | 12月1日                         | ×         | 群馬県館林市    | 酒造などの水を多く使う家だけで、カビタリ餅を搗いて水神さまの祭をした。お供えを川に流すところもあり、12月1日ではないところもある。                                                                                                                                                        | 柳田習俗 (P629) |
| 35 | カビタリ餅                       | 12月8日ごろの<br>子の日か、卯の<br>日から一週間 | ×         | 群馬県太田市    | 川神さまにあげる餅とし、気味の悪い娘を持つといわれる明神さまの川つべりで行をする。                                                                                                                                                                                 | 習俗 (P68)    |

《カッパレ餅》類

|    | 名称                     | 時期    | カッパ<br>伝説 | 地域                   | 風習、伝承等                                                                                                     | 出典・備考       |
|----|------------------------|-------|-----------|----------------------|------------------------------------------------------------------------------------------------------------|-------------|
| 36 | 川流れ餅                   | 12月1日 | ×         | 群馬県みどり市              | ボタ餅でも小豆餅でもいいから、とにかく小豆の入ったものを食べる。食べないうちに川を当たってはいけないという。                                                     | 習俗 (P68)    |
| 37 | 川流れ餅                   | 12月1日 | ×         | 群馬県吾妻郡嬬恋村            | 牛馬から鶏にまで食わせた。そして「川よくこせ、川よくこせ」といって、二モチ(ボタ餅)のことで、ナベツコスリモチともいう)を鍋の蓋に載せて馬にくれる。また、この日は馬を休ませる日で、引き出すと怪我をするといわれた。 | 習俗 (P68)    |
| 38 | 川流れ餅                   | 12月1日 | ×         | 群馬県利根郡みなかみ町<br>山間部   | 川流れの人を供養する日とし、「川流れ餅」といって井戸に流したり、馬や牛、猫にも「よく渡れ」といって食べさせる。                                                    | 習俗 (P68)    |
| 39 | カビタリ餅                  | 12月1日 | ×         | 群馬県邑楽郡板倉町            | 給人(奉公人)の縁切り餅、別れ餅といい、奉公人がこの餅を搗いて、それがねればその家にいつくが、離れればいつかないとして、来年いるあてのない若衆には搗かせなかった。                          | 習俗 (P68)    |
| 40 | 川浸り餅                   | 12月1日 | ×         | 埼玉県さいたま市浦和区<br>大久保領家 | 餅を搗いて祝い、これを食べると水難を除けるという。                                                                                  | 習俗 (P282)   |
| 41 | カビタレ<br>カワビタリ          | 12月1日 | ×         | 埼玉県深谷市               | 川端に棚を作り餅と洗米を供えて川の神を祭るところもある。                                                                               | 習俗 (P282)   |
| 42 | ナガレモチ<br>(流れ餅)         | 12月1日 | ×         | 埼玉県入間郡               | 川浸りの日に作る団子をカブダングと言ふ。これを食べずに橋を渡ると災いがあるといった。1月15日の団子も同じ呼び方をしたところがある。                                         | 柳田習俗 (P634) |
| 43 | 川浸り餅                   | 12月1日 | ×         | 埼玉県 秩父郡長瀬町風布         | 餅を作って食べる。                                                                                                  | 習俗 (P282)   |
| 44 | カワビタリノツイタチ<br>(川浸りの朔日) | 12月1日 | ×         | 埼玉県南埼玉郡              | 水に落ちた子供がいると、松明をつけてトイレに追い込んだと言う。水の霊の迫害を防ごうとした方法だと言われた。川浸りの餅を搗いていた。                                          | 柳田習俗 (P629) |



《カッパレ餅》類

|    | 名称                             | 時期     | カッパ<br>伝説 | 地域               | 風習、伝承等                                                                                                  | 出典・備考       |
|----|--------------------------------|--------|-----------|------------------|---------------------------------------------------------------------------------------------------------|-------------|
| 45 | カビタレ<br>カワビタリ                  | 12月1日  | ×         | 埼玉県北葛飾郡地方        | 餅を搗き水神を祭る。                                                                                              | 習俗 (P282)   |
| 46 | デロコ                            | 11月30日 | ×         | 千葉県              | 団子のこと。デロコの意味は不明だが、里見家と関係がある。                                                                            | 柳田習俗 (P631) |
| 47 | 川びたり                           | 12月1日  | ×         | 千葉県東京湾口          | 餅を搗き、丸もちにして橋のもとにお供えし、川の神や水神さまをまつる。あるとき一人の漁師がこの川びたりの餅を食べないで漁に行き、こげて(死んで)しまったので、それからは必ず餅を搗いて食べるならわしにしている。 | 食事 (P109)   |
| 48 | かつぱもち                          | 12月1日  | ○         | 千葉県利根川流域         | かつぱにひかれないように、餅を搗いて利根川に流す。洗濯をしたり、飲み水として川の水をくんでくる家のあるので、川の神さまへの感謝のしるしでもある。                                | 食事 (P299)   |
| 49 | 川ビタリ餅                          | 12月1日  | ○         | 千葉県銚子市名洗町        | 餅を搗き、カッパに引っかかるのを防ぐため「川に尻を冷してこい」といって、川岸に供えた。                                                             | 習俗 (P228)   |
| 50 | 川ビタリ餅                          | 12月1日  | ×         | 千葉県佐原市返田         | 餅を川に流す。                                                                                                 | 習俗 (P228)   |
| 51 | サウダンツイタチ<br>(相談朔日)             | 12月1日  | ×         | 千葉県原市            | 乙子の朔日または相談朔日とも言い、奉公人の約束のことを言った。                                                                         | 柳田習俗 (P627) |
| 52 | ハナヨゴシモチ<br>(ハナヨゴシ餅・<br>ハナミダシ餅) | 12月1日  | ×         | 千葉県原市<br>千葉県いすみ市 | 川を渡るのに、小豆を食べていく時間がなければ、鼻の先に付けてでも渡れと言うところがあった。餅を鼻に塗る風習があって、そういう名称が出来たのかもしれない。<br>いすみ市ではハナミダシ餅と言う。        | 柳田習俗 (P636) |
| 53 | カワビタリノツイタチ<br>(川漫りの朔日)         | 12月1日  | ×         | 千葉県君津市           | 小豆を食べずに川を渡ってはいけない。水に流されるから小豆を鼻の先に付けてでも渡れと言った。                                                           | 柳田習俗 (P629) |
| 54 | 川ビタリ餅                          | 12月1日  | ×         | 千葉県富津市恩田         | 餅を搗いて汁粉を作り、川辺に供えて川の神を祭った。                                                                               | 習俗 (P228)   |

《カッパレ餅》類

|    | 名 称                      | 時 期   | カッパ<br>伝説 | 地 域                            | 風習、伝承等                                                                                               | 出典・備考       |
|----|--------------------------|-------|-----------|--------------------------------|------------------------------------------------------------------------------------------------------|-------------|
| 55 | カビタレ                     | 12月1日 | ○         | 千葉県香取郡神崎町本宿                    | カッパに引かれぬようにと牡丹餅を川端に置いてくる。                                                                            | 習俗 (P228)   |
| 56 | カフビタン<br>(川浸し)           | 12月1日 | ×         | 東京都八王子市                        | 川浸りの朔日と言い、朝のうちに川に行き、尻に水を浸けてくる。橋に牡丹餅を供える。餅を食べてからでないと、橋を渡ってはならぬと言った。                                   | 柳田習俗 (P628) |
| 57 | 川浸り<br>(尻浸り)             | 12月1日 | ×         | 東京都日野市                         | ぼたもちを作り、馬のいる家では、まず馬に食べさせてから人が食べる。これを食べると夜尿症が治ると言われている。                                               | 食事 (P229)   |
| 58 | 川渡り                      | 12月1日 | ×         | 東京都大島町                         | ぼたもちを作って神さま、仏様に進げる。とくに漁師の家では、水難を免れることを願って、丁寧にこのお祝いをする。                                               | 食事 (P284)   |
| 59 | カフビタリ                    | 12月1日 | ×         | 神奈川県平塚市城所、土屋                   | 牡丹餅を作って食べた。子どもは川へ行ってもよく尻を浸してくるまでは食べなくてはならないなどといった。                                                   | 習俗 (P373)   |
| 60 | カフワタギ餅                   | 12月1日 | ×         | 新潟県                            | 餅を搗き、川にはまらないうために、川の神に餅を供えて祭る。                                                                        | 習俗 (P206)   |
| 61 | カフワタリ<br>カフヒタリの餅         | 12月1日 | ×         | 新潟県<br>(三条市・長岡市・上越市・上越市・佐渡市ほか) |                                                                                                      | 習俗 (P206)   |
| 62 | カハトビモチ<br>(川飛び餅)         | 12月1日 | ×         | 新潟県南蒲原郡                        | 川飛びとは川に落ちて死ぬこと。津波があった時、川飛びがあったが、菰の餅を井当に持って行った男が一人だけ、助かったと言う話がある。水の霊が餅を喜んでと言う伝説の一つで、川渡りの朔日同系の習俗と思われる。 | 柳田習俗 (P627) |
| 63 | カハフタギモチ<br>(川塞ぎ餅)        | 12月1日 | ×         | 新潟県南魚沼郡                        | 川の神を祭る日で、家ごとに餅を搗いて川に流す。この餅に粉糠をかけて飼馬に与える家もある。                                                         | 柳田習俗 (P632) |
| 64 | カハアワタリゼツク<br>(川渡り節供・粥節供) | 12月1日 | ×         | 新潟県佐渡市                         | 朝飯に小豆飯と茄子漬を食べる。これを食べずに川を渡ってはならぬという。                                                                  | 柳田習俗 (P633) |

《カッパレ餅》類

|    | 名称                             | 時期     | カッパ<br>伝説 | 地域           | 風習、伝承等                                                                                              | 出典・備考       |
|----|--------------------------------|--------|-----------|--------------|-----------------------------------------------------------------------------------------------------|-------------|
| 65 | カビタレモチ<br>(カビタレ餅・<br>カビタリ餅)    | 12月1日  | ×         | 山梨県甲府市       | 餅を小さく切って日頃使っている池井戸に沈め、杓に入れて水の中に浸して来て、虫歯のまじないだと言って食べた。水の神の祭であり、水車は一日休み、水の岸には紙の幣を立てる。子供が竹を鑓にして餅搗きをする。 | 柳田習俗 (P630) |
| 66 | —                              | 12月1日  | ×         | 山梨県甲府市帯那町    | 四角の紙を三角に折って竹に挟んで紙鑓とし、三本を井戸端に立てる。三角の紙に指に鍋墨をつけて眼をかく。お水神さまの眼という。                                       | 習俗 (P57)    |
| 67 | 川びびり餅                          | 12月1日  | ×         | 山梨県都留市禾生全域   | 子供は川に行って尻を浸けてから川びびり餅を食べさせる習慣。                                                                       | 習俗 (P57)    |
| 68 | —                              | 12月1日  | ×         | 山梨県都留市夏狩     | 朝早く川に尻を浸け健康を願う。赤飯をふかす。                                                                              | 習俗 (P57)    |
| 69 | —                              | 12月1日  | ×         | 山梨県南巨摩郡身延町折門 | 朝握り飯を作って柄杓に入れ、井戸と川に供えに行くが、帰る時後ろを向くとお水神さんが赤い頭巾を被って出てくると言われてこわがった。                                    | 習俗 (P57)    |
| 70 | 川流れ餅                           | 12月1日  | ×         | 長野県          | 餅を搗いて神棚に供え、一週間の行に入り、水垢離をして清浄な体になって、新しい年を迎える準備をした。                                                   | 習俗 (P62)    |
| 71 | ナガレモチ<br>(流れ餅)                 | 12月1日  | ×         | 長野県千曲市       | この餅が足の裏に粘り付いて、流れずに済んだという話もあって、もし食べることが出来なければ、足の裏に塗っても良いといった。                                        | 柳田習俗 (P636) |
| 72 | ハナヨゴシモチ<br>(ハナヨゴシ餅・<br>ハナミダシ餅) | 12月1日  |           | 長野県北部        | 餅を足に塗る風習はなくて、食べることが出来なければ、足の裏に塗ってもよいという話だけが残っている。                                                   | 柳田習俗 (P636) |
| 73 | ミンカウス<br>(三十日臼)                | 11月30日 | ×         | 長野県東筑摩郡      | 小さな臼と杵を作り、米の粉を使い餅を搗き、神に上げる。子供にも作る。                                                                  | 柳田習俗 (P631) |
| 74 | ハネアガリ                          | 12月1日  | ×         | 長野県東筑摩郡      | 三十日臼と称して、小さな臼を作るのが、この前日の行事である。                                                                      | 柳田習俗 (P637) |

《カッパレ餅》類

|    | 名称             | 時期                           | カッパ<br>伝説 | 地域        | 風習、伝承等                                                                                                                                  | 出典・備考       |
|----|----------------|------------------------------|-----------|-----------|-----------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|-------------|
| 75 | ヨロゲダング         | 11月30日                       | ×         | 長野県北安曇郡   | 団子を作って汁に入れる。ヨロゲルは方言で、すくい揚げることを言う。汁の中からヨロゲで食べる。晦日はつもごりすなわちツンモグリだから、すくい上げられるよう言う意味でヨロゲ団子と言った。雪崩の難を免れるまじないのようにも考えられた。団子がなければ、芋でも食えと言う日である。 | 柳田習俗 (P631) |
| 76 | ナガレモチ<br>(流れ餅) | 12月1日<br>(12日の夜、<br>8日のコトの日) | ×         | 長野県北安曇郡   | 川流れ餅あるいはかぶ団子ともいう。1日から7日まで、行をして体を清めて正月の支度に取り掛かるといった。餅を搗かなかった婆が鬼に腕を抜かれた話や餅を食べずに川を渡って、流れて死んだという話があった。                                      | 柳田習俗 (P635) |
| 77 | ハネアガリ          | 12月1日                        | ×         | 長野県北安曇郡   | 昨日が晦日のツンモグリでよろげ団子を食べる日だから、今日は跳ね上がりがりだ、と言って、雪崩から助かった兄弟の話を語り伝えている。臼や杵を作るのにいい日となっている。                                                      | 柳田習俗 (P637) |
| 78 | 川びたり餅          | 12月1日                        | ○         | 静岡県       | 牛などを曳き出して橋を渡らせる。牡丹餅を作って川に流す。河童にシヨビギ込まれるから、予め河童にくれるのだと言う。                                                                                | 習俗 (P142)   |
| 79 | ツブクヤウ<br>(粒供養) | 12月1日                        | ○         | 静岡県静岡市    | 河童の災いがないと言った。この餅は家の神前には供えない。                                                                                                            | 柳田習俗 (P630) |
| 80 | ブンヅキ餅          | 11月30日                       | ×         | 静岡県静岡市清水区 | アシモト(土穂)を粉にして餅を搗く。門口に供えオゾイ(ズルイ)神さまを除ける。                                                                                                 | 習俗 (P142)   |
| 81 | カービタリ          | 1月15日                        | ×         | 静岡県熱海市    | 「カービタリも食ったりしよ」と言う。                                                                                                                      | 習俗 (P142)   |
| 82 | —              | 12月1日                        | ×         | 静岡県焼津市    | 納めの朔日といって、神仏に赤飯を供えと言う。                                                                                                                  | 習俗 (P142)   |
| 83 | —              | 12月1日                        | ○         | 静岡県御殿場市   | 牡丹餅を萱の簀で食べ、その簀を川に流す。この日は川に入る事を忌む。                                                                                                       | 習俗 (P142)   |

《カッパレ餅》類

|    | 名称                                   | 時期     | カッパ<br>伝説 | 地域       | 風習、伝承等                                                                                                                  | 出典・備考       |
|----|--------------------------------------|--------|-----------|----------|-------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|-------------|
| 84 | カビタレモチ<br>(カビタレ餅・<br>カビタリ餅)          | 12月1日  | ×         | 静岡県伊豆市   | お萩を棧俵に載せて川に流す。                                                                                                          | 柳田習俗 (P630) |
| 85 | ツブクヤウ<br>(粒供養)                       | 11月30日 | ×         | 静岡県駿東郡   | 川浸り餅を粒餅、ツボ餅と言い、搗く日を粒節供、宵節供と言った。農家の行事だが、これを食べておくど海川の難を運れると言った。                                                           | 柳田習俗 (P630) |
| 86 | ツブクヤウ<br>(粒供養)                       | 11月30日 | ×         | 静岡県榛原郡   | 粒餅は、一年中粗末にしておいた穀粒を供養する為に、庭に落ちこぼれの糠を拾って作ると言う。実際は粗末にしていない。この日の為に貯めておく。                                                    | 柳田習俗 (P630) |
| 87 | オトゴの朔日                               | 12月1日  | ×         | 愛知県      | (年中行事表より)                                                                                                               | 習俗 (P202)   |
| 88 | オトゴノツイタチ<br>(おとごの朔日・末子<br>の朔日・かしら朔日) | 12月1日  | ×         | 愛知県豊橋市   | 2人以上子のある家では、乙子の朔日または乙子の祝と言いい、餅を搗いたり小豆飯を炊いて祝っていた。                                                                        | 柳田習俗 (P625) |
| 89 | オトゴノツイタチ<br>(おとごの朔日・末子<br>の朔日・かしら朔日) | 12月1日  | ×         | 滋賀県高島市   | 子供が裏白の葉で作った花笠を被り、乙子の朔日と唱えて家々を回り、米麦を貰って歩いた。                                                                              | 柳田習俗 (P625) |
| 90 | カラスノナカヌマ<br>(烏の啼かぬま)                 | 12月1日  | ×         | 兵庫県      | 烏より先に起きて茄子の漬物を食べると、水に溺れる災いがないと言う。休みであり、神に詣る日でもある。この日の為に9月9日に茄子を塩漬けるところもある。茄子を基の目に切ったものと小豆を水炊きにしたものを膳にのせて、一口ずつ食べるところもある。 | 柳田習俗 (P626) |
| 91 | カラスノナカヌマ<br>(烏の啼かぬま)                 | 12月1日  | ×         | 大阪府摂津市北部 | 暗いうちに起きて牡丹餅を作り、茄子漬を食べると、その年の水難を免れるといい、烏が啼くよりもそれが運れると川にはまるなどと言った。                                                        | 柳田習俗 (P626) |

《カッパレ餅》類

|     | 名称                               | 時期     | カッパ<br>伝説 | 地域               | 風習、伝承等                                                          | 出典・備考       |
|-----|----------------------------------|--------|-----------|------------------|-----------------------------------------------------------------|-------------|
| 92  | カヘスカスカリン<br>(返す貸す借りん)            | 12月1日  | ×         | 京都府京丹後市          | おと子の朔日と言って芋飯を炊いて末子を慰める日とし、この日の早朝まだ烏が啼かぬうちに、漬茄子と酒粕とカリンを食べる家があった。 | 柳田習俗 (P626) |
| 93  | シモツキガユ<br>(霜月粥)                  | 11月23日 | ×         | 京都府京丹後市          | 大師講に煮る小豆粥を言う。この粥を食べておけば、寒の内川に落ちぬとも言うのは、川渡りの朔日との関係を考えさせる。        | 柳田習俗 (P614) |
| 94  | ネバリモノツイタチ                        | 12月1日  | ×         | 和歌山県紀の川市         | 糯米類を食べぬと師走中に川へまくれ込むと言った。特に食べ物の種類は決まっていない。                       | 柳田習俗 (P634) |
| 95  | オトゴノツイタチ<br>(おとごの朔日・末子の朔日・かしら朔日) | 12月1日  | ×         | 和歌山県有田郡          | 末弟を祝って餅を搗くと言いい、兄も食いたい乙子餅と言う諺が出来た。                               | 柳田習俗 (P625) |
| 96  | オトツイタチ<br>(おと朔日・おと子の朔日)          | 12月1日  | ×         | 鳥取県鳥取市           | この日は必ず茄子の漬物を食べ、お萩や赤飯を作る家が多い。                                    | 柳田習俗 (P625) |
| 97  | シハスマツリ                           | 12月1日  | ×         | 鳥取県西伯郡           | 萩の餅をこしらえて、両肘と両膝に塗り、師走に川へ転ばぬまじないだと言っていた。                         | 柳田習俗 (P627) |
| 98  | オトツイタチ<br>(おと朔日・おと子の朔日)          | 12月1日  | ×         | 鳥取県<br>岡山県       | 転んでも転んだと言わず、牛糞ですべて馬糞で止まったと言うものだと言っている。                          | 柳田習俗 (P625) |
| 99  | ヒザヌリ<br>(膝塗り)                    | 12月1日  | ×         | 鳥取県日野郡<br>岡山県新見市 | この日の食べ物を膝に塗る行事がある。新見市では、朝、膝の上に少し飯を載せて、師走川にこけませぬ様にと祈念する風習がある。    | 柳田習俗 (P635) |
| 100 | ヒザヌリ<br>(膝塗り)                    | 12月1日  | ×         | 島根県雲南市           | 膝に塗った時もあったが、餅を搗いて神に供え、蹟かないまじないと言ってその餅を膝の上に載せるので、膝乗りと呼んでいる。      | 柳田習俗 (P635) |

《カッパレ餅》類

|     | 名称                           | 時期    | カッパ<br>伝説 | 地域           | 風習、伝承等                                                                                             | 出典・備考       |
|-----|------------------------------|-------|-----------|--------------|----------------------------------------------------------------------------------------------------|-------------|
| 101 | ヒザヌリ<br>(膝塗り)                | 12月1日 | ×         | 広島県          | これを食べると水を渡っても倒れないと言っていたが、塗ったどうかはわからない。                                                             | 柳田習俗 (P635) |
| 102 | カハバドホリモチ<br>(川通り餅・<br>膝塗り餅)  | 12月1日 | ×         | 広島県西部        | この餅を食うものは水の難を遁れられるといい、由来は毛利家の先祖が、石見に攻め込んで江の川を渡る時に、二つの小石が帯に挟まって利運を得たと言う吉例からきているが、これは12月1日ではなかったという。 | 柳田習俗 (P632) |
| 103 | ネバリモノツイタチ                    | 12月1日 | ×         | 山口県萩市濱崎町     | 毛利家が石見の尼子方を攻めた時に、頭にモロムキ(正月の飾りに用いる藁白菌朶のこと)の葉を被り、刀を背負って江ノ川を押渡り、敵の城を攻落した言い伝えがある。                      | 柳田習俗 (P634) |
| 104 | カハアワタリゼツク<br>(川渡り節供・粥節<br>供) | 12月1日 | ×         | 山口県長門市       | 川渡りと称して、年に五回の親元へ礼に行く日の一つである。川渡りの意味はここで不明になり、単に親里に膳を持って行くことを、人並の川を渡ると言っていた。                         | 柳田習俗 (P633) |
| 105 | ネバリモノツイタチ                    | 12月1日 | ×         | 山口県長門市大島     | 朝、烏が啼かぬうちにねばり物を食うといいと言った。この島でのねばり物は粥であった。                                                          | 柳田習俗 (P634) |
| 106 | カハアワタリゼツク<br>(川渡り節供・粥節<br>供) | 12月1日 | ×         | 佐賀県唐津市鎮西町馬渡島 | この日を正月の始まりと言った。                                                                                    | 柳田習俗 (P632) |
| 107 | カハアワタリゼツク<br>(川渡り節供・粥節<br>供) | 12月1日 | ×         | 佐賀県小城市       | 川渡り餅を食べると川にはまらないと言った。                                                                              | 柳田習俗 (P633) |
| 108 | カハアワタリゼツク<br>(川渡り節供・粥節<br>供) | 12月1日 | ×         | 長崎県長崎市       | 朝、川渡り餅を売り歩いた。                                                                                      | 柳田習俗 (P632) |
| 109 | カハアワタリゼツク<br>(川渡り節供・粥節<br>供) | 12月1日 | ×         | 長崎県対馬市       | 川に餅を入れて鬼が食べている間に逃げてきたという話、牡丹餅を食べていた為に遅くなって、かえって危難を遁れたという話、餅を食わずに行くと大蛇に取られると言う話があった。                | 柳田習俗 (P633) |

《カッパレ餅》類

|     | 名称                                   | 時期    | カッパ<br>伝説 | 地域      | 風習、伝承等                                                                                                                                          | 出典・備考       |
|-----|--------------------------------------|-------|-----------|---------|-------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|-------------|
| 110 | フタリガユ<br>(渡り粥・渡し粥・<br>御粥渡し)          | 12月1日 | ×         | 長崎県杵岐市  | 朝、粥を煮る。この粥を食わぬうちは、どんなに小さな橋でも渡ってはならぬ。渡ると鯉が飛び付くなどと言った。魚の山越しと称して、山へ行くと魚が腹を突き抜くと言う者もいた。この粥は神仏に供えたり、親里へ贈り物にする。そうしてこの日から正月のオンダラ粥までの間、もう粥を食べてはならぬと言った。 | 柳田習俗 (P633) |
| 111 | オトゴノツイタチ<br>(おとごの朔日・末子<br>の朔日・かしら朔日) | 12月1日 | ×         | 熊本県天草諸島 | 長男または末弟の為の朔日と考えていたところがある。                                                                                                                       | 柳田習俗 (P625) |
| 112 | シハスユ<br>(師走湯)                        | 12月1日 | ×         | 熊本県阿蘇地方 | 白湯を飲むと、川に流されると言い、必ず茶を入れるか飯粒の湯の中に入れる。小豆餅を食べ、小豆の飯または粥を炊く。小豆粥を吹いてさますと、鼻の頭が赤くなると言うところもある。                                                           | 柳田習俗 (P627) |
| 113 | チャンモチ<br>(チャン餅)                      | 12月1日 | ×         | 鹿児島県    | 夜明けに搗く餅のこと。鯰が入っている。明日は朔日だチャン餅だと言って、子供が楽しみにする日だった。                                                                                               | 柳田習俗 (P631) |
| 114 | ネバリモノツイタチ                            | 12月1日 | ×         | 鹿児島県肝属郡 | ここではネベモノツイタチという。ねばり物の多くは粉をこねて作ったものの、すなわち桑団子の類を言い、必ず食べなければならないものとしていた。                                                                           | 柳田習俗 (P634) |



## 各地にみられる「シモツカレ」類ならびに初午の習俗

### 参考文献と表中の省略表記

| 省略表記 | 参考文献(編著者名(発行年)『書名』発行所)                                 |
|------|--------------------------------------------------------|
| 習俗   | 池田秀夫・日向野徳久・平野伸生・高崎繁雄・井上善治郎・宮田登・田中宣一(1975)『関東の歳時習俗』明玄書房 |
| 習俗   | 三浦貞栄治・森口多里・三崎一夫・今村泰子・月光義弘・和田文夫(1975)『東北の歳時習俗』明玄書房      |
| 習俗   | 藤本良致・橋本芳契・漆間元三・佐久間惇一(1975)『北中部の歳時習俗』明玄書房               |
| 習俗   | 小沢秀之・箱山貴太郎・木村博・加藤参郎・河上一雄(1975)『南中部の歳時習俗』明玄書房           |
| 食事   | 「日本の食生活全集 茨城」編集委員会(1985)『聞き書 茨城の食事』農山漁村文化協会            |
| 食事   | 「日本の食生活全集 福島」編集委員会(1987)『聞き書 福島の食事』農山漁村文化協会            |
| 食事   | 「日本の食生活全集 山形」編集委員会(1988)『聞き書 山形の食事』農山漁村文化協会            |
| 食事   | 「日本の食生活全集 栃木」編集委員会(1988)『聞き書 栃木の食事』農山漁村文化協会            |
| 食事   | 「日本の食生活全集 東京」編集委員会(1988)『聞き書 東京の食事』農山漁村文化協会            |
| 食事   | 「日本の食生活全集 千葉」編集委員会(1989)『聞き書 千葉の食事』農山漁村文化協会            |
| 食事   | 「日本の食生活全集 群馬」編集委員会(1990)『聞き書 群馬の食事』農山漁村文化協会            |
| 食事   | 「日本の食生活全集 埼玉」編集委員会(1992)『聞き書 埼玉の食事』農山漁村文化協会            |
| 柳田習俗 | 柳田国男(1975)『歳時習俗語彙』国書刊行会                                |

《シモツカレ》類

|   | 名称           | 時期 | 材料 | 味付け | 作り方 | 風習、伝承／他の食べ物等                                                                                                     | 地域       | 出典・備考       |
|---|--------------|----|----|-----|-----|------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|----------|-------------|
| 1 | フセウマ<br>(伏午) | 初午 |    |     |     | 初午の早い年は火に早い。屋根の上<br>に水を揚げ又は水を撒くという。                                                                              | 青森県東津軽郡  | 柳田習俗 (P386) |
| 2 |              | 初午 |    |     |     | 火早いといって、お茶を飲まずに<br>麦茶または豆茶にする。                                                                                   | 宮城県      | 習俗 (P161)   |
| 3 |              | 初午 |    |     |     | 節分に汲んでおいた水を屋根にか<br>け、火伏せの呪いであると言う。                                                                               | 宮城県迫町北浦  | 習俗 (P161)   |
| 4 |              | 初午 |    |     |     | 小豆飯を炊き、神々にお供えす<br>る。この日はお茶断ちで、酒をふる<br>まう。<br>小豆ごはん、味噌汁、冷や汁、にし<br>んこぶ巻き、こいのうま煮                                    | 山形県置賜地方  | 食事 (P161)   |
| 5 |              | 初午 |    |     |     | 盃に水を汲んで、分家宅に持って<br>行き、家の入口に三度振りかけ<br>る。屋根にかけける家もある。7日間<br>茶断ちをする家がある。月初めに<br>初午が当たったら、その年は火が<br>早い。火事に多い年になると言う。 | 福島県(浜通り) | 習俗 (P303)   |
| 6 |              | 初午 |    |     |     | 稲荷さまに五色の紙の旗を立て<br>る。火が早いと言って、朝のうちは<br>茶を出さない。昔は蚕の種を供え<br>てお参りした。赤飯を炊き、卵、豆<br>腐、天ぷらを供える。                          | 福島県(中通り) | 習俗 (P303)   |

《シモツカレ》類

|    | 名称    | 時期               | 材料                                                                                   | 味付け           | 作り方                                                              | 風習、伝承／他の食べ物等                                                             | 地域                              | 出典・備考     |
|----|-------|------------------|--------------------------------------------------------------------------------------|---------------|------------------------------------------------------------------|--------------------------------------------------------------------------|---------------------------------|-----------|
| 7  |       | 初午               | 大根<br>黒豆                                                                             |               | 大根おろしに黒豆を入れる。                                                    | 団子を作って蚕養山に供える。豆腐、小豆飯を稲荷さまに供える。女の子の人たちが各自食べ物を持って宿に集まり、初午講をやる。この日はお茶は飲まない。 | 福島県(会津地方)                       | 習俗 (P37)  |
| 8  |       | 初午               |                                                                                      |               |                                                                  | 赤飯を炊いて稲荷神社に供える。子供たちが色紙に「正一位稲荷大明神」と書いて、長い竿に吊るして稲荷神社に奉納する。                 | 茨城県大子町                          | 習俗 (P130) |
| 9  | スミツカレ | 初午               | 大根 一 下 ず<br>豆 人 参<br>油 揚 げ                                                           |               | 材(大根／豆／人参／油揚げ)を混ぜて味を付けて作る。                                       | 稲荷神社に供える。<br>赤飯                                                          | 茨城県西地域                          | 習俗 (P130) |
| 10 | すみつかり | (旧)<br>2月の初<br>午 | 大根・人参ーオニオロシで<br>下 ず<br>節分の炒り豆ー皮を<br>取る<br>油揚げー細切り<br>新巻き鮭の頭ーさい<br>の 目<br>酒 粕 ー ち ぎ る | 酢<br>砂糖<br>醤油 | 材(大根・人参／酒粕／炒り豆／鮭／油揚げ)をなべに入れて、とろ火で煮る。<br>酒粕がとろけたら、味付けして味がしみるまで煮る。 | 藁つとに載せて、屋敷内の稲荷様<br>に供える。<br>赤飯                                           | 茨城県中央地域<br>茨城県北部地域              | 食事 (P80)  |
| 11 |       | 初午               |                                                                                      |               |                                                                  | 団子を作る                                                                    | 栃木県足利市・<br>阿蘇郡の一部・<br>那須郡塩谷郡の一部 | 習俗 (P90)  |

《シモツカレ》類

|    | 名称                      | 時期 | 材料                                                                              | 味付け             | 作り方                                                                                                                               | 風習、伝承／他の食べ物等                                                                   | 地域       | 出典・備考                    |
|----|-------------------------|----|---------------------------------------------------------------------------------|-----------------|-----------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|--------------------------------------------------------------------------------|----------|--------------------------|
| 12 |                         | 初午 |                                                                                 |                 |                                                                                                                                   | 1戸1人ずつ男が出て回り念仏をする。火の用心の為に、10時間前にお茶を飲むことを禁じたり、お風呂をたてておくことを忌む。                   | 栃木県那須町   | 習俗 (P90)                 |
| 13 | しみつきり<br>しもつきり<br>すむつきり | 初午 | 節分の大豆<br>大根・人参ーオニオロ<br>シで下す<br>塩鯢の頭<br>酒粕                                       | 鯢頭の<br>塩味<br>醤油 | 材(大豆／大根／人参<br>／塩鯢の頭／酒粕／)<br>を入れて煮る。                                                                                               | 油揚げや牛蒡を入れる家もある。<br>芳賀地方はこれに酢を入れる家が多い。赤飯としみつきりを薬苞に入れて稲荷さまに供える。                  | 栃木県      | 習俗 (P90)                 |
| 14 | しもつかれ                   | 初午 | 大根・人参ー粗くすり<br>下す<br>塩引きの頭ーぶつ切<br>り<br>大豆ー炒る<br>酒粕<br>油揚げ                        |                 | 材(大根／人参／塩引<br>きの頭／大豆／酒粕<br>／油揚げ)を入れて<br>ゆっくりと煮る。                                                                                  | 家々をめぐってこれを食べると中<br>気にならないと言ひ伝えがある。                                             | 栃木県      | 食事 (P2)                  |
| 15 | しみつかれ                   | 初午 | 大根・人参ーオニオロ<br>シで下す<br>節分の大豆ーほうろく<br>で炒る。皮は除く。<br>塩引きの頭ー焼いて<br>ぶつ切り<br>酒粕<br>油揚げ | 醤油              | 材(大根／人参／大豆<br>／塩引き)を入れてこと<br>と煮る。塩引きがく<br>ずれるほどやわらかく<br>なったら、酒粕を入れ、<br>やわらかく煮て味を付<br>ける。<br>前日に八升のなべいっ<br>ぱいに作り、一晩ねか<br>せ、何日も食べる。 | つとこ(薬苞)に赤飯としみつか<br>れを別々に入れ、氏神さまと村の<br>稲荷さまにあげる。橋を渡らずに<br>三軒の家で食べると中気にならな<br>い。 | 栃木県鬼怒川流域 | 食事<br>(P25.26 51<br>.52) |

《シモツカレ》類

|    | 名称    | 時期        | 材料                                               | 味付け | 作り方                                   | 風習、伝承／他の食べ物等                                                                                                                                                                                              | 地域       | 出典・備考            |
|----|-------|-----------|--------------------------------------------------|-----|---------------------------------------|-----------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|----------|------------------|
| 16 | しもつかれ | 初午        | 大豆一節分の福豆<br>大根・人参ーオニオロ<br>シで下す<br>塩引きの頭ーぶつ切<br>り | 醤油  | 材(大豆／大根／人参<br>／塩引き)をじっくりと<br>煮て、味付ける。 | 七軒の家のしもつかれを食べると<br>中風にならないといわれ、何軒も<br>の家を歩いてしもつかれを食べ<br>た。<br>藁苞に赤飯としもつかれをいれた<br>ものを供え、農作物の豊作祈願を<br>した。                                                                                                   | 栃木県那須野ヶ原 | 食事 (P150)        |
| 17 | しもつかり | 初午        | 大根・人参ー粗く下す<br>大豆                                 |     | 材(大豆／大根／人<br>参)を煮る。                   | 藁苞に入れ赤飯とともに氏神さま<br>に供える。稻荷神社に農作物の豊<br>作を願う。                                                                                                                                                               | 栃木県八溝山地  | 食事 (P207)        |
| 18 | しみづかり | 初午        | 大豆                                               |     | 節分の時に炒った大豆<br>の残りを使って作る。              | 小豆飯                                                                                                                                                                                                       | 栃木県両毛山地  | 食事<br>(P293,294) |
| 19 |       | 初午の前<br>夜 |                                                  |     |                                       | オシラマチと言って、マユ玉16個の<br>2倍、32個を一升枀に入れ、四つ<br>角に桑の枝を立て、ザルに納めて<br>オシラさまに供え、大正月の松、<br>アーボーヒーボーを囲炉裏でいぶ<br>し、空臼を三回つく。この煙に乗っ<br>て、あるいは臼をついた音を聞いて、<br>オシラさまは降りてくると言う。<br>オシラさまは絹笠さまという蚕神だ<br>といって、絵姿の掛軸をかける家も<br>ある。 | 群馬県      | 習俗 (P37)         |
| 20 |       | 初午        |                                                  |     |                                       | 桑の木を燃やしてマユナリダング<br>を茹で、16個桑の二又にさして、ま<br>たはザルかー一升枀に藁を敷いて、<br>マブシに見立ててそこに入れ、オ<br>シラさまに供える。                                                                                                                  | 群馬県水上町   | 習俗 (P37)         |

《シモツカレ》類

|    | 名称                     | 時期    | 材料                                                          | 味付け      | 作り方                                              | 風習、伝承／他の食べ物等                                                              | 地域               | 出典・備考     |
|----|------------------------|-------|-------------------------------------------------------------|----------|--------------------------------------------------|---------------------------------------------------------------------------|------------------|-----------|
| 21 |                        | 初午    |                                                             |          |                                                  | 女衆のお祝いとし、サナギ(小豆粒)の入ったマユ玉を作り、近所の大勢に振舞う。                                    | 群馬県白沢村           | 習俗 (P37)  |
| 22 |                        | 初午    |                                                             |          |                                                  | 豆腐の田楽、団子を作り、お互いに呼び合って「エレー一番が当たっちゅうで、すけに来たよ」と挨拶する。                         | 群馬県白沢村・利根村・勢多郡東村 | 習俗 (P37)  |
| 23 | スミツカリ<br>シミズカリ<br>ニガラミ | 初午の前夜 | 大根ーオニオロシで下す<br>酒粕<br>芋<br>人参<br>油揚げ<br>年越しの豆                |          | 材(大根／酒粕／芋／人参／油揚げ／豆)を入れて煮る                        | 藁筒に入れて屋敷稲荷にあげ、その藁筒は翌年の正月に燃やすことになっている。<br>囲炉裏の火は燃やさない。炭焼きも朝は茶を飲まず、風呂も沸さない。 | 群馬県板倉町<br>赤城山周辺  | 習俗 (P37)  |
| 24 |                        | 初午    |                                                             |          |                                                  | 稲荷さまの眷属の子どもができてのお七夜に当たるといい、ダンゴも小豆を煮た中に入れ、ススリダンゴにして食べる。                    | 群馬県千代田村          | 習俗 (P37)  |
| 25 | すみつかり                  | 初午    | 大根・人参ーオニオロシで下す<br>塩引きの頭ー細かく切る<br>節分の豆ー炒って枳の底でこする<br>油揚げー細切り | 醤油<br>砂糖 | 材(大根10本／人参5～6本／塩引きの頭1尾～2尾分／節分の豆1合／油揚げ3～5枚)を入れて煮る | 赤飯も炊いて、すみつかりと一緒に藁苞にのせ、稲荷さまにあげる。初午から少し暖かくなるまで、すみつかりは日常食としてもたびたびつくる。        | 群馬県東毛平坦地         | 食事 (P270) |

《シモツカレ》類

| 名 称      | 時期    | 材料                                           | 味付け | 作り方                        | 風習、伝承／他の食べ物等                                                                                                                                                                                                       | 地域                    | 出典・備考     |
|----------|-------|----------------------------------------------|-----|----------------------------|--------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|-----------------------|-----------|
| 26       | 初午    |                                              |     |                            | お蚕神さま(オシラさま、サンカジンさま、キヌガサさま)が天から地上に降りて来られる日だといひ、庭に竹を立てて縄を巻きつける。正月さまのお松類を燃やす。その煙にお蚕神さまが乗って降りてくるともいふ。<br>米の粉の餅を作って供えるが、その煮炊きは、小正月のオカマさまのオカマ俵を燃料にする。餅は一升枀に盛るが主人の年の数だけ盛る家もある。枀の四隅には正月の松の枝を立てる。稻荷神社を7社お参りするとお蚕が当たると言われる。 | 埼玉県長瀬町風布              | 食事 (P264) |
| 27 しみつかれ | 初午    | 大根ーガリガリ卸しで<br>下す<br>大豆ー炒る<br>鮭の頭             | 酢   | 材(大根／大豆／鮭の頭)を入れて煮る。        |                                                                                                                                                                                                                    | 埼玉県行田市・北埼玉郡・南埼玉・北葛飾郡下 | 食事 (P264) |
| 28 しみづかり | 3月の初午 | 大根ーオニオロシで粗く<br>下す<br>大豆ー炒って二つに割る<br>油揚げー細く切る | 醤油  | 材(大根／大豆／油揚げ)を入れて煮る。        | 藁筒に入れて両側を縛り、屋敷内の稲荷様に供える。<br>お神酒、赤飯                                                                                                                                                                                 | 埼玉県北足立台地              | 食事 (P186) |
| 29 すみづかり | 3月1日  | 大根・人参ーオニオロシで<br>下す<br>大豆ー炒って二つに割る            | 醤油  | 材(大根3、4本／人参1本／大豆3合)を入れて煮る。 | 藁筒に入れて、屋敷内や近所の稲荷様に供える。家によっては、歳暮鮭の頭や油揚げを入れる。<br>油揚げ、豆腐、赤飯、草餅                                                                                                                                                        | 埼玉県東部低地               | 食事 (P234) |

《シモツカレ》類

|    | 名称 | 時期 | 材料 | 味付け | 作り方 | 風習、伝承／他の食べ物等                                                                                                                     | 地域           | 出典・備考     |
|----|----|----|----|-----|-----|----------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|--------------|-----------|
| 30 |    | 初午 |    |     |     | 稲荷さまに赤飯・油揚げ・目刺しなどを上げる。                                                                                                           | 千葉県長生郡長柄町    | 習俗 (P199) |
| 31 |    | 初午 |    |     |     | 米を浸しておいて搗いてオシロギ(団子)を作り、南天の葉の上に7つほど載せて稲荷さまに供えた。                                                                                   | 千葉県大加場       | 習俗 (P199) |
| 32 |    | 初午 |    |     |     | 稲荷を祀っている家に行きお金や赤飯、菓子を買ひ、共同飲食をした。                                                                                                 | 千葉県船橋市・市川市香取 | 習俗 (P200) |
| 33 |    | 初午 |    |     |     | 稲荷神社に小屋を作って、子どもたちがお籠りし、各家々では赤飯や油揚げなどを小屋に届けた。                                                                                     | 千葉県銚子市名洗町    | 習俗 (P200) |
| 34 |    | 初午 |    |     |     | 赤飯を炊き、油揚げ、野菜の煮付けなどの精進料理を作る。子供たちは赤いのぼりを立てた町内のお稲荷さんに行って、赤飯や駄菓子などもらうのが楽しかった。                                                        | 東京都江東区       | 食事 (P19)  |
| 35 |    | 初午 |    |     |     | ある家の庭に祀ってあるお稲荷さんのお祭りには、大勢の子どもたちが集まり、その家の従業員が作ったこうじで出来た甘酒が振舞われた。男の人たちには、酒の肴として、必ずこまつなとあさりのかしあえをたくさん作った。晩ごはんは、麦飯に青のりたっぷりのとろろ汁であった。 | 東京都品川区       | 食事 (P54)  |



《シモツカレ》類

|    | 名称                 | 時期 | 材料 | 味付け | 作り方 | 風習、伝承／他の食べ物等                                                                                                                                                              | 地域       | 出典・備考       |
|----|--------------------|----|----|-----|-----|---------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|----------|-------------|
| 36 |                    | 初午 |    |     |     | お稲荷さんのお祭りをする。夜宮（前の晩）に甘酒を供え、家の者も飲む。油揚げ、あさりのむきみ、赤飯を供えて、のぼりを立てる。朝は赤飯をいただく。                                                                                                   | 東京都葛飾区   | 食事 (P157)   |
| 37 | ハツウマダゴンゴ<br>(初午団子) | 初午 |    |     |     | 初午粉という米の粉を使って神に供える。                                                                                                                                                       | 東京都日野市   | 柳田習俗 (P385) |
| 38 |                    | 初午 |    |     |     | 屋敷内の農業の神さまであるお稲荷さまに五色の旗を立て、油揚げ、おこわ、野菜の煮しめ、目刺しをあげる。姑自慢の甘酒を、近所の人や子供たちにふるまう。子供たちは太鼓をたたいて遊ぶ。                                                                                  | 東京都日野市   | 食事 (P232)   |
| 39 |                    | 初午 |    |     |     | 屋敷稲荷のそばに五色の紙をつないだ旗を立て、赤飯を炊き、油揚げと供に供える。屋敷稲荷を祀らない家では、部落の稲荷さまに集まって火を焚き、赤飯、油揚げ、目刺しなどを供えてから、それを食べて帰ってくる。残ったら家人に持って帰って食べさせる。家では、朝は赤飯とけんちん汁、きんぴら、裂き干し大根の酢のもの、たくあんなどを出し、昼はうどんである。 | 東京都東久留米市 | 食事 (P193)   |

《シモツカレ》類

|    | 名称                | 時期            | 材料 | 味付け | 作り方 | 風習、伝承／他の食べ物等                                                                                 | 地域          | 出典・備考       |
|----|-------------------|---------------|----|-----|-----|----------------------------------------------------------------------------------------------|-------------|-------------|
| 40 |                   | 初午            |    |     |     | 地の神という屋敷神としての稲荷の祠があって、「正一位稲荷大明神」と書いた幟を立てたり、赤い紙を貼り合せて作った旗を祠の前に立て、油揚げや魚、糺苞に入れた赤飯などを供えて祭る。      | 神奈川県        | 食事 (P234)   |
| 41 |                   | 初午<br>(1月15日) |    |     |     | 藁で作った馬の頭に幌をつけ、一人は馬の頭を、一人は尾を持って村の家々を訪れる。太鼓や歌で驚かせ、家内安全と養蚕及び農作物の豊年万作を祈る。                        | 富山県東砺波郡利賀村  | 習俗 (P129)   |
| 42 |                   | 初午            |    |     |     | 旗と小豆飯(赤飯・油揚げ飯)・油揚げ・鰯・鮎などを上げて夜籠りをした。                                                          | 新潟県(稲荷を祀る所) | 習俗 (P181)   |
| 43 |                   | 初午            |    |     |     | 茶絶ちは火難を免れるとして、宵宮から初午の午前中は茶を出さない風があった。                                                        | 新潟県北蒲       | 習俗 (P181)   |
| 44 | ハツウマダンゴ<br>(初午団子) | 2月8日          |    |     |     | 稲荷の祭りをする。                                                                                    | 新潟県魚沼市      | 柳田習俗 (P385) |
| 45 |                   | 初午            |    |     |     | 稲荷社の祭りをしたり、有名な稲荷社を参拝する者がいた。蚕まちといって、米の粉で繭玉を作って稲荷さまにあげ、子どもたちは紙を切って一万両や十万両と書いて、それで各家の繭玉を買って歩いた。 | 長野県         | 習俗 (P79)    |

《シモツカレ》類

|    | 名 称                                 | 時期 | 材料 | 味付け | 作り方 | 風習、伝承／他の食べ物等                                                                | 地域         | 出典・備考       |
|----|-------------------------------------|----|----|-----|-----|-----------------------------------------------------------------------------|------------|-------------|
| 46 | コダママツリ<br>(蚕玉祭)                     | 初午 |    |     |     | 蚕の神の祭りをする。蚕玉の字を刻した石の塔が立っている所に、栗穂や繭形の団子を持って行って供える。                           | 長野県下伊那郡    | 柳田習俗 (P386) |
| 47 | ダウロクジンノ<br>クワジミマヒ<br>(道碌神の火事<br>見舞) | 初午 |    |     |     | 道碌神の火事見舞と言って餅を搗き、神の祭をする。藁で作った馬に餅を背負わせて早朝に道碌神にお参りする。藁馬は後で屋根の上に投揚げて置く。        | 信州北部       | 柳田習俗 (P386) |
| 48 |                                     | 初午 |    |     |     | 赤飯を棧俵に銭を包み、宮詣りの途中で落とす。子供がそれを拾って、お菓子などを買って食べる。厄年の家では烏飯を炊き、厄年の者は道の辻に銭を落としてくる。 | 静岡県南伊豆     | 習俗 (P121)   |
| 49 |                                     | 初午 |    |     |     | 1.2歳の子供を連れて、浜松市の志都呂馬頭観音を参詣する。                                               | 静岡県浜名郡舞坂辺  | 習俗 (P121)   |
| 50 |                                     | 初午 |    |     |     | 繭団子を作ってお稲荷さんに奉納し、養蚕などの豊産や商売繁盛の祈願をする。                                        | 静岡県北遠地方    | 習俗 (P121)   |
| 51 |                                     | 初午 |    |     |     | 繭の形をした繭団子と切干大根の白和えを一升杓に載せて、各家で祀っている蚕神に供える。                                  | 愛知県江南市宮田地区 | 習俗 (P166)   |

《シモツカレ》類

|    | 名称 | 時期 | 材料 | 味付け | 作り方 | 風習、伝承／他の食べ物等                                                                          | 地域             | 出典・備考     |
|----|----|----|----|-----|-----|---------------------------------------------------------------------------------------|----------------|-----------|
| 52 |    | 初午 |    |     |     | 農事豊凶を占うため、尾西市刈安須賀、羽鳥市須和氣の稲荷社へ参詣に出かけた。                                                 | 愛知中島郡祖父江町地方    | 習俗 (P166) |
| 53 |    | 初午 |    |     |     | 「厄歳マツリ」という25、42、61の各厄年の男性が揃ってもちなげをした。                                                 | 愛知県幡豆郡一色町佐久島地区 | 習俗 (P166) |
| 54 |    | 初午 |    |     |     | 初午団子を作り、観音さまに持ってゆくと大きな子が生まれると言ふ。まん丸にできるとなり(風態)のよい子ができるといわれ、絵馬を持って行った。                 | 愛知県東加茂郡下山村地方   | 習俗 (P166) |
| 55 |    | 初午 |    |     |     | 大栄寺の馬頭観音へ牛馬を連れて参詣し、笹の葉に豆のご飯を載せたものを牛馬に食べさせたと言ふ。                                        | 愛知県渥美郡赤羽根町地方   | 習俗 (P166) |
| 56 |    | 初午 |    |     |     | 仕事を休み、小豆飯を炊き、油揚げを使ってご馳走を作っていた。馬を買って家では、東加茂郡旭町牛地生駒山小馬寺(駒山)や古戸(東栄町)の権現さま、豊川稲荷に参詣する人もいた。 | 愛知県北設楽郡地方      | 習俗 (P166) |
| 57 |    | 初午 |    |     |     | 鹿うち、種取りや成人式が行われた。                                                                     | 愛知県東栄町振草地方     | 習俗 (P166) |
| 58 |    | 初午 |    |     |     | 算盤の粒の形と繭の形に団子を作り、それを繋ぎ合わせて近所に配って回った。                                                  | 岐阜県吉城郡神岡町山之村   | 習俗 (P216) |

《シモツカレ》類

|    | 名称                | 時期 | 材料 | 味付け | 作り方 | 風習、伝承／他の食べ物等                                                                     | 地域            | 出典・備考       |
|----|-------------------|----|----|-----|-----|----------------------------------------------------------------------------------|---------------|-------------|
| 59 |                   | 初午 |    |     |     | 正月の花餅の木を焚いて初午団子を作り、一升枀に12個の団子を入れてコダマさま(蚕神)に供えた。                                  | 岐阜県上宝村双六      | 習俗 (P216)   |
| 60 |                   | 初午 |    |     |     | 団子が入った俵を馬の背に負わせて宮に入り、神職が祈禱してから団子を撒く。むしりあった俵の藁を持ち帰り、養蚕の道具に混ぜて編むとその年の蚕の出来がよいと言われた。 | 岐阜県上宝村宮原の栗原神社 | 習俗 (P217)   |
| 61 |                   | 初午 |    |     |     | 繭形・算盤玉型・丸形の4初午団子を作る。枀に入れてコダマの神に供え豊蚕を祈る。美しい繭が沢山獲れ、採算が取れるように、収入が多いようにとの意味である。      | 岐阜県上宝村長倉      | 習俗 (P217)   |
| 62 | ハツウマダンゴ<br>(初午団子) | 初午 |    |     |     | 初午団子を作る時の薪は、正月の若木迎の日に採ってきたものを必ず焚く。                                               | 岐阜県武儀郡        | 柳田習俗 (P385) |
| 63 | ハツウマダンゴ<br>(初午団子) | 初午 |    |     |     | お茶を飲まない。                                                                         | 岐阜県高山市        | 柳田習俗 (P385) |
| 64 | ハツウマダンゴ<br>(初午団子) | 初午 |    |     |     | 茶釜を洗って中を乾かすと、小遣銭に不自由せぬと言った。                                                      | 鳥取県八頭郡        | 柳田習俗 (P385) |
| 65 | フセウマ<br>(伏午)      | 初午 |    |     |     | 初午から5日まで、指を伏せて数えるうちに来ることを言う。これに別の意味を考える風がある。                                     | 岡山県           | 柳田習俗 (P386) |

《シモツカレ》類

|    | 名称                | 時期                         | 材料 | 味付け | 作り方 | 風習、伝承／他の食べ物等                                                                         | 地域       | 出典・備考       |
|----|-------------------|----------------------------|----|-----|-----|--------------------------------------------------------------------------------------|----------|-------------|
| 66 | オトウマ<br>(乙午)      | 2月の午<br>の日<br>(2度又は<br>3度) |    |     |     | 休みにしているところがある。乙午<br>というのはその終りの午の日のこ<br>と。                                            | 広島県比婆郡   | 柳田習俗 (P385) |
| 67 | ハツウマダンゴ<br>(初午団子) | 初午                         |    |     |     | 大麦・小麦・早稲藁・木炭・髪の毛<br>等、合わせて7種を紙に包んで、<br>唱えごとをして川に流すと、髪の毛<br>がよく伸びるという言い習わしがあ<br>る。    | 佐賀県      | 柳田習俗 (P385) |
| 68 | ハツウマダンゴ<br>(初午団子) | 4月午の日                      |    |     |     |                                                                                      | 鹿児島県奄美大島 | 柳田習俗 (P385) |
| 69 | セジャウマツリ<br>(世上祭)  | 初午                         |    |     |     | 世上祭で豊作を禱る。子牛を持つ<br>た家は牝には一升、牡には五合く<br>らいの酒を出して、組の番合に披<br>露する。作物を荒らしまわるからの<br>挨拶だという。 | 長崎県杵岐市   | 柳田習俗 (P386) |

《シモツカレ》類

|    | 名称                | 時期 | 材料 | 味付け | 作り方 | 風習、伝承／他の食べ物等                                                                     | 地域            | 出典・備考       |
|----|-------------------|----|----|-----|-----|----------------------------------------------------------------------------------|---------------|-------------|
| 59 |                   | 初午 |    |     |     | 正月の花餅の木を焚いて初午団子を作り、一升枀に12個の団子を入れてコダマさま(蚕神)に供えた。                                  | 岐阜県上宝村双六      | 習俗 (P216)   |
| 60 |                   | 初午 |    |     |     | 団子が入った俵を馬の背に負わせて宮に入り、神職が祈禱してから団子を撒く。むしりあった俵の藁を持ち帰り、養蚕の道具に混ぜて編むとその年の蚕の出来がよいと言われた。 | 岐阜県上宝村宮原の栗原神社 | 習俗 (P217)   |
| 61 |                   | 初午 |    |     |     | 繭形・算盤玉型・丸形の4初午団子を作る。枀に入れてコダマの神に供え豊蚕を祈る。美しい繭が沢山獲れ、採算が取れるように、収入が多いようにとの意味である。      | 岐阜県上宝村長倉      | 習俗 (P217)   |
| 62 | ハツウマダンゴ<br>(初午団子) | 初午 |    |     |     | 初午団子を作る時の薪は、正月の若木迎の日に採ってきたものを必ず焚く。                                               | 岐阜県武儀郡        | 柳田習俗 (P385) |
| 63 | ハツウマダンゴ<br>(初午団子) | 初午 |    |     |     | お茶を飲まない。                                                                         | 岐阜県高山市        | 柳田習俗 (P385) |
| 64 | ハツウマダンゴ<br>(初午団子) | 初午 |    |     |     | 茶釜を洗って中を乾かすと、小遣銭に不自由せぬと言った。                                                      | 鳥取県八頭郡        | 柳田習俗 (P385) |
| 65 | フセウマ<br>(伏午)      | 初午 |    |     |     | 初午から5日まで、指を伏せて数えるうちに来ることを言う。これに別の意味を考える風がある。                                     | 岡山県           | 柳田習俗 (P386) |

《シモツカレ》類

|    | 名称                | 時期                         | 材料 | 味付け | 作り方 | 風習、伝承／他の食べ物等                                                                         | 地域       | 出典・備考       |
|----|-------------------|----------------------------|----|-----|-----|--------------------------------------------------------------------------------------|----------|-------------|
| 66 | オトウマ<br>(乙午)      | 2月の午<br>の日<br>(2度又は<br>3度) |    |     |     | 休みにしているところがある。乙午<br>というのはその終りの午の日のこ<br>と。                                            | 広島県比婆郡   | 柳田習俗 (P385) |
| 67 | ハツウマダンゴ<br>(初午団子) | 初午                         |    |     |     | 大麦・小麦・早稲藁・木炭・髪の毛<br>等、合わせて7種を紙に包んで、<br>唱えごとをして川に流すと、髪の毛<br>がよく伸びるという言い習わしがあ<br>る。    | 佐賀県      | 柳田習俗 (P385) |
| 68 | ハツウマダンゴ<br>(初午団子) | 4月午の日                      |    |     |     |                                                                                      | 鹿児島県奄美大島 | 柳田習俗 (P385) |
| 69 | セジャウマツリ<br>(世上祭)  | 初午                         |    |     |     | 世上祭で豊作を禱る。子牛を持つ<br>た家は牝には一升、牡には五合く<br>らいの酒を出して、組の番合に披<br>露する。作物を荒らしまわるからの<br>挨拶だという。 | 長崎県杵岐市   | 柳田習俗 (P386) |



執筆者

杉本 妙子（茨城大学）

---

平成 28(2016)年度 文化庁委託事業報告書  
被災地方言で語る生活文化の再発見と継承：  
茨城と福島浜通りの方言を中心に

平成 29(2017)年 3 月 20 日発行

編者 杉本妙子（茨城大学）

〒310-8512 茨城県水戸市文京 2-1-1  
茨城大学人文学部 TEL 029(228)8104(代)

---